FUTABASHA
MOOK
グレートメカニック
スペシャル

# MSV

## The Second-Generation

## 1986-1993

MOBILE SUIT VARIATION
MSV全書

Z-MSV

ZZ.CCA-MSV

M-MSV

F91 SERIES

FUTABASHA
MOOK
グレートメカニック
スペシャル

# MSV

## The Second-Generation

## 1986-1993

MOBILE SUIT VARIATION

MSV 全書

# MSV

The Second-Generation

1986-1993

# MSV
The Second-Generation
1986-1993

9784575465181

ISBN978-4-575-46518-1
C9476 ¥1800E

1929476018007

創通・サンライズ

定価：本体1800円＋税
雑誌 63982-95 Printed in Japan ◆ Futabasha 2019

グレートメカニックスペシャル

# MSV

## ザ・セカンドジェネレーション



MSV以降のMSVの歴史!!

双葉社

グレートメカニックスペシャル

# MSV

## ザ・セカンドジェネレーション

MSV以降のMSVの歴史!!

双葉社

# CONTENTS

# MSV
The Mobile Suit Variation
1986-1993


004 Introduction

006 **Z-MSVの世界**

006 機体解説

FA-178 フルアーマーガンダムMk-Ⅱ／MSA-099-2 リック・ディアスⅡ／MSA-004K ネモⅢ／
MSA-005K ガンキャノン・ディテクター／MSA-005S メタス改／MSR-100S 百式改／MSR-100S 量産型百式改／
MSZ-006X1 プロトタイプZガンダム／MSZ-006X2 プロトタイプZガンダム（ディアスヘッド）／
MSF-007 ガンダムMk-Ⅲ／MSZ-007 量産型Zガンダム／MSZ-006 ZⅡ SE.D.I-1R ディジェ SE-R

016 **ZZ.CCA-MSVの世界**

016 機体解説

FX-010A Gフォートレス武装強化案（スーパー Gフォートレス）／MS-140 デザート・ゲルググ／
MS-06ORC デザート・ザク（ロメル・カスタム）／RMS-188 ザクダイバー／RGM-89S スタークジェガン／
RGC-90 ジェガン重装型／RGZ-918 リ・ガズィ・カスタム／RX-93 νガンダム（ダブル・フィン・ファンネル装備型）／
FA-93HWS νガンダム（ヘビー・ウェポン・システム装備型）／RX-93-v2 Hi-νガンダム／MSN-04Ⅱ ナイチンゲール／
NZ-222 サイコ・ドーガ／AMX-120X ギラ・ドーガ サイコミュ試験型／AMS-119 ギラ・ドーガ重装型／
AMS-119S ギラ・ドーガ改

030 MSV後の潮流① ガンダム・センチネルの描いた軌跡

032 **M-MSVの世界**

034 機体解説

MS-04 プロトタイプザク／MS-08R-3S 高機動型ザクⅡ／MSM-03 プロトタイプゴッグ／MSM-02 水中実験機／
RX-77-1A ガンキャノンA／RX-78-4 ガンダム4号機（G04）／RX-78-5 ガンダム5号機（G05）／
RX-78-6 ガンダム6号機（マドロック）／RX-78-7 ガンダム7号機／FA-78-3 フルアーマーガンダム7号機／
HFA-78-3 重装フルアーマーガンダム7号機／RGM-79F 陸戦用ジム／RGM-79F デザート・ジム／RAG-79 アクア・ジム／
RAG-79-G1 水中型ガンダム／RX-81ST RX-81スタンダード（ジャライン・スタンダード）／
RX-81LA RX-81ライトアーマー（ジャライン・ライトアーマー）／FA-007Ⅲ フルアーマーガンダムMk-Ⅲ／
FA-1008 フルアーマー百式改／MSK-100S 陸戦用百式改／MRX-007 プロトタイプサイコ・ガンダム／
RX-098 プロトタイプブリック・ディアス／MRX-011 量産型サイコ・ガンダム／MSZ-009 プロトタイプZZガンダム／
MSZ-013 量産型ZZガンダム／RX-94 量産型νガンダム

050 MSV後の潮流② ダブルフェイク アンダー・ザ・ガンダムが遺したもの

050 **F91シリーズの世界**

060 機体解説

F90 ガンダムF90 ／F90A ガンダムF90アサルトタイプ／F90D ガンダムF90デストロイタイプ／
F90S ガンダムF90サポートタイプ／F90H ガンダムF90ホーバータイプ／F90M ガンダムF90マリンタイプ
F90P ガンダムF90プランタイプ／F90V ガンダムF90ヴェスパータイプ／F90Ⅱ ガンダムF90Ⅱ／
F90ⅡL ガンダムF90Ⅱロングレンジタイプ／F90ⅡI ガンダムF90Ⅱインターセプトタイプ／OMS-06RF RFザク／
OMS-07RF RFザフ／OMS-09RF RFドム／OMS-090RF RFデザート・ドム／OMSM-07RF RFズゴック／
OMS-14RF RFゲルググ／OMS-14SRF RFゲルダザ シャルル・ロウチェスター専用機／
OMS-90R ガンダムF90火星独立ジオン軍仕様／OMAX-01 グラン・ザム／RXR-44 ガンタンクR-44パワードウェポンタイプ／
F91 ガンダムF91バックキャノン装着型（パワードウェポンタイプ）／F91 ガンダムF91ツイン・ヴェスパー装着型／
F70 キャノンガンダム／F71 ヴェスパー装着型G・キャノン（新型火器試験仕様）／F71 G・キャノンパワードウェポンタイプ／
RGM-109 ヘビーガン重装攻撃型／XM-05 ベルガ・ギロス武装強化型／XM-06 ダギ・イルス長距離偵察型／
デッサ・クイプMS／MS-06MP マニピュレイションシステム装着型ザク／RXF-91 シルエットガンダム／
RXF-91A シルエットガンダム改／F90ⅢV クラスターガンダム／RX-99（AFX-9000）ネオガンダム／
F71B G・キャノン・マグナ／RGM-111 ハーディガン／XM-05B ベルガ・バルス／XM-07G ビギナ・ゼラ／
XM-07B ビギナ・ギナⅡ／XM-07S ビギナ・ギナ（ペラ・ロナスペシャル）

083 読み物／インタビュー

084 MSV以降のMSVとリアリティ

000 THE対決

092 MSV10年史概論

090 MSV対談 “その後”のMSVの成り立ちと経緯 井上幸一

102 証言 “その後”のMSV バンダイと模型情報とアンビル盲人と 安田朗

107 MSV対談 “その後”のMSVとバンダイのガンプラとの関係性 川口克己 岸山博文

Z-MSV

# その後のMSVとガンダムシーン変遷の10年を紐解く

モビルスーツバリエーション、すなわちMSV」とは、ご存知のとおり『機動戦士ガンダム』、及び、そのシリーズに登場するロボット兵器、モビルスーツのバリエーションモデルの総称であり、「両時に番組（作品）に登場したモビルスーツとは異なる、雑誌や模型といったメディアで新たにデザイン（下開発）されたもののことをいう。

狭義には、オリジナルの「MSV」、そして「Z・MSV」など、MSVと称された開連企画におけるプロジェクトの中でラインナップされたモビルスーツ群と定義することができるだろう。広義には『機動戦士ガンダム』シリーズの映像作品に登場しなかったモビルスーツの総称と言っていいかもしれない。

原初の「MSV」の起源となるものは、劇場版『機動戦士ガンダムI』公開直後の昭和56［1981］年の春、講談社『テレビマガジン』のムック『劇場版　機動戦士ガンダム　アニメグラフィック』誌上に掲載された4体のモビルスーツの画稿に遡る。そこには「渥地戦用ザク」「水中（潜水作業）用ザク」「砂漠戦用ザク」「ザクキャノン」といった4種のザクが描かれており、それらはオリジナルのデザインからはほんのわずか、塗装や形が違う、いわば改造機であった。

『機動戦士ガンダム』という作品は、リアルな世界観が売り物のひとつであり、それは後に「リアルロボット」としてひとつのジャンルを拓くことになる。そして『機動戦士ガンダム』の世界観は、単なるアニメーション作品の世界観以上のものを描くことができる可能性を秘めていたため、雑誌媒体を中心に『ガンダムの世界観』をより遊ぶ」というムーブメントに繋がっていった。そして雑誌媒体中心だったムーブメントに模型業界（バンダイ）も相乗りする形で、バリエーションモデルのプラモデル製品化が行われた。そして1983年の4月、「MSV」というシリーズタイトルが正式に付けられたのだ。当初の「MSV」は、周辺メディアやファンからの「遊び」がスタートだったわけだ。

しかし、プラモデル商品は、当初のその意を上回る売上を記録していた。ガンプラブームの余波もあり（はするが）、また当時の雑誌媒体などでも、映像作品には描かれなかった裏設定としてでもいうべき、様々な設定の公開は、コアなファンにとって重用なコンテンツでもあった。つまり、「MSV」は、『機動戦士ガンダム』というフィールドで、映像作品を楽しむ以外に、作品世界周辺で「遊ぶ」ことも、重要な要素の1つとして確立したのだ。そして、その流れは現在にまで続いている。

本書は、初代「MSV」から、『機動戦士Vガンダム』前後の90年代前半までの狭義のMSV企画」を中心にしつつ、実質的なMSV企画」など、広義な「M

M-MSV

## ZZ.CCA-MSV

SV」作品を集めたものである。そして、ここで注目してほしいのは『機動戦士ガンダム』及び『MSV』の時代における変容である。初代では、いわば『機動戦士ガンダム』が含むミリタリー的な、あるいはSF的なエッセンスを強化したものであった。一方、アニメロボットにおける「ミリタリー」のブームともいえる現象は、'83年頃には一息つきつつあり、ミリタリー的なエッセンスを抑えながら、別の方向に進んでいく。それは、本家『機動戦士ガンダム』においても、続編作品の『機動戦士Zガンダム』ですら、変形モビルスーツを導入し、ニュータイプ専用機を数多く登場させるなど、ミリタリー的文脈から若干距離を置いたことでも明らかである。

しかし、『機動戦士ガンダム』そして「MSV」という成功体験は、新たなる「MSV」を生み出さなければならない、というのは必然ともいえた。一方、デザインとしては、オリジナルのメカニックデザイナー、大河原邦男氏が『機動戦士Zガンダム』ではメインデザイナーから外れ、藤田一己氏や永野護氏といった若手を起用していた。その流れは「MSV」も同様で、彼らだけでなく、多くの若手デザイナーが参加することになった。また、大河原氏や90年代になると「M・MSV」などに参加している。つまり、新時代の「MSV」は様々なデザイナーたちによって「ガンダム」に、新たな価値を見つけていく、発見していった記録の証といえるのかもしれない。

さらに『機動戦士ガンダム』というタイトルの、市場における変遷も重要な意味を持つ。初代「MSV」は、「ガンダムブーム」の頃に小学生だった中高生を中心に据えながら、その下の世代がメインターゲットであった。

もともと製作元のサンライズは、いわゆる「リアルロボット」作品を「中とも」、すなわち大人と子供の中間の世代をターゲットにしていた。対して最初の『機動戦士ガンダム』は、その上の世代にもヒットしており、これは過去の「戦記物ブーム」の影響も受けていた部分があったからこそ、30年代中頃より登場し、後に大ヒットする『SDガンダム』は、主に小学生以下をメインターゲットにしており、これらが『ガンダム』の裾野を広げていった現在でこそ『ガンダムシリーズ』は一幅広いファン層から支持されているが、当時は多様化の裏返しでもあったといえるだろう。

そういった意味では『Z・MSV』以降、構築されてきたMSV関連各種は、試行錯誤の歴史ともいえるかもしれない。発表されるものは主に雑誌媒体で、プラモデルが発売されることはなかった（BB戦士や玩具類などは例外）。映像作品が劇場版含めたのは、映像作品が劇場版含めた、プラモデル製品のラインナップ拡充をコンセプトにした『機動戦士ガンダムF90』まで、待たなければならなかった。雑誌媒体の筆頭役になったのは『戦慄情報』や『B-CLUB』といったバンダイ系の出版メディアであり、また「MSV」の事実上の生みの親である講談社のコミックボンボンにも大きな役割を果たしていた、つまり傍流的には彼の「MSV」企画も、最初の「MSV」のまとめごとも玩具の子孫なのである。

こうした「Z・MSV」以降の「MSV」を今ふたたび振り返ることは、80年代の中頃から90年代中頃までの10年間に、『ガンダム』というものの受け止められ方が、どのように変化していったのか、ということを見ていくことなのかもしれない。

## F91 SERIES

※本書における機体解説の画稿と解説は基本的に発表当時のものに準拠する形で構成しております。そのため現在における設定等と一部異なる部分がありますのでご了承下さい。

# Z-MSVの世界

MSV機体解説

MSV Z-MSV編

## Z-MSVのベースとなった作品

機動戦士Zガンダム

**作品データ**

放送　1985年3月2日～86年2月22日
総話数　全50話
毎週土曜日　17：30～18：00
キー局　名古屋テレビ

**STAFF**

| | |
|---|---|
| 企画 | 日本サンライズ |
| 原案 | 矢立肇 |
| 原作・総監督 | 富野由悠季 |
| キャラクターデザイン | 安彦良和 |
| メカニカルデザイン | 大河原邦男、藤岡建一巳 |
| デザインワークス | 永野護 |
| デザイン協力 | 仲盛文 |
| 設定ベース | 永原唯 |
| メカニカル作画監督 | 内田康久 |

**主題歌**

OP「Z－時をこえて」
挿歌OP「水の星に愛をこめて」
ED「星空のBelieve」

Zガンダムのおもな登場人物

カミーユ・ビダン　　ブライト・ノア

クワトロ・バジーナ／シャア・アズナブル　　ハマーン・カーン

物語の舞台は、地球圏に散らばるスペースコロニーに移住した人類が、地球に住む人々を支配しようとする連邦軍と、それに反発するエゥーゴとの戦いを描いた。主人公のカミーユ・ビダンは、ニュータイプ能力を持つ少年で、エゥーゴに参加し、連邦軍のエースパイロットであるクワトロ・バジーナ大尉（シャア・アズナブル）と出会う。

### MSVの新たな時代の幕開け『Z・MSV』

本来『MSV』が初めて「MSV－モビルスーツバリエーション」というシリーズ名を冠し、プラモデル商品となったのは1983（昭和58）年の4月のこと。時期としては『戦士ガンダイン』の放送時期に当たるそして模型商品としての『MSV』シリーズは好評を博し、翌年の12月までラインナップを継続『機動戦士ガンダム』の続編作品『機動戦士Zガンダム』の放送開始は1985年3月であり、ほぼ『Zガンダム』放送開始時まで続いたことになる

その一方で84年の年初には『MSV』の続編的な企画として「MS・X」がスタートしたが、「Zガンダム」の制作決定に、事実上打ち切られた

当時のMSV企画は、本編映像作品の補完的な存在という側面があり、放送終了後もモビルスーツのラインナップを広げる（＝商品化候補のアイテムが増える）受け皿の1つという役割があった。この手法は当然『Zガンダム』でも考えられた。それが『Z・MSV』である。

商業的に『Zガンダム』の模型商品のセールスは、好調だったものの、すぐに続編「機動戦士ガンダムZZ」の放送が決定。プラモデル製品の開発、生産面でもMSV企画などをシリーズとして立ち上げる余裕はない、という事情となった。しかし『MSV』の灯を消すべきではない」との判断から、ひとまず単独商品化を念頭に置かないプロジェクトとして、バンダイ（当時）が刊行していた「B・CLUB」誌上にての連載という形で広く知られるようになった

結果的に『Z・MSV』は、『MSV』よりも大幅にラインナップが少なく、主人公機であるエゥーゴ「カラバ」陣営の機体のみとなっている。そして、その「質の変化」にも注目すべきだろう。オリジナルのMSVが、「ザクバリエーション」を起点に、兵器やその運用などミリタリー的雰囲気に、SF的な要素を加えて構成されていたが、『Z・MSV』では、主人公側のモビルスーツのカスタム機と、新規機体というラインナップで構成されていた。つまり、兵器（あるいは機能）として捉えるべきモビルスーツのバリエーションというより、よりキャラクター性の強化を狙っていた、デザインは『Zガンダム』のメインメカニカルデザイナーである藤田一己氏が担当した

実際この当時には、アニメロボットにおけるミリタリーブームは過去のものとなっており、

MSZ-006
Zガンダム

**ウェイブ・ライダー**

Zガンダムは変形することで単機による大気圏突入が可能となる。ノールも変形に必要なパーツとなっている。

MSN-00100
百式

**Zガンダム を代表するMSたち**

**作品内には数多くのMSやMAが登場するが、その中から代表的なMSをいくつか紹介する。**

作品には エゥーゴ（カラバ）、ティターンズ、連邦軍、アクシズ（後のネオ・ジオン）と多数の勢力が登場するため、各陣営別に多くのMSが配されている。傾向としてはMSからMAなどに変形する可変機が多く、数自体も少数生産が一機だけのワンオフ機という傾向だった。主役メカのガンダム自体にも交代劇があり、非変形のガンダムMk-Ⅱから可変機のZガンダムへと変わる。ただ、前主役のガンダムMk-Ⅱは乗り手が変わって、引き続き作品に登場する形となっている。

AMX-004 (MMS-3)
キュベレイ

MSA-003
ネモ

RX-178+FXA-05D
ガンダムMk-Ⅱ

**冷遇されている？ティターンズ系MS**

Z-MSVの展開期間そのものが短いことも主要因のひとつといえるだろうが、Z-MSVにおいてティターンズ系のバリエーションモデルは、ほぼゼロである。機体の人気が低かったわけではないものの、特異な出自の機体も多く、派生機を設定し難いというのが大きいだろう（ほぼ試作機か専用機で占められる）。ただ、後年になるとメディア（模型誌）やゲームなどで、ティターンズ系の派生機が設定されるようになってきている。

PMX-003
ジ・O

RX-139
ハンブラビ

RX-110
ガブスレイ

## モビルスーツにも変革をもたらした「Zガンダム」

「ガンダム」放送より5年の年月を経て製作された「Zガンダム」。実際には劇場版3作目の「機動戦士ガンダムⅢ　めぐりあい宇宙」の公開から5年後という見方が正しいかもしれない。「Zガンダム」で登場するキャラクターたちに「ガンダム」の主役を取らせ、オリジナルのキャラクターを監視にしたことや、「地球連邦軍VS地球連邦軍」というドラマ構造であったといっていいだろう。

しかし、一方でメカニック面でも、モビルスーツに大きな変革がもたらされることになる。それは、「可変モビルスーツをラインナップの主力にする」という施策だ。

ある意味、「ガンダム」で一般に受けた「リアリティ」あるいは「量産型」という要素を、全廃したとまではいかないものの、主流にしなかったのであり、それは「モビルスーツ史」的には大きな転換点であったということがいえるだろう。

新たな方向性の模索は当然ともいえ、実際、「百式改」「ZII」など、少ないラインナップの中でも人気機種が登場。後のMSV企画における、もう1つの源泉を作ったともいえるだろう。

FA-178

# フルアーマー ガンダムMk-Ⅱ

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.5m |
| 本体重量 | 53.2t |
| 全備重量 | 74.3t |
| ジェネレーター出力 | 1,930kW |
| スラスター推力 | 124,500kg |
| センサー有効半径 | 11,300m |
| 装甲素材 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | バルカン・ポッド・システム<br>ビーム・サーベル×2<br>グレネード・ランチャー付<br>2連装ビーム・ガン<br>グレネード・ランチャー |
| 備考 | フレキシブル・シールド装備 |

## 時代の趨勢にのまれたガンダムMk-Ⅱ強化プラン

ムーバブル・フレームをモビルスーツ（MS）としてはじめて採用した、画期的なMSであったRX-178ガンダムMk-Ⅱ。しかし装甲材はチタン合金系が使用され、当時の技術レベルとしては標準的であった。

このようなRX-178の防御面の不足に対し企画されたのがFA-178フルアーマーガンダムMk-Ⅱである。機体の胴体前面、肩部、脚部、腰部などに増加装甲が取り付けられ、防御力は大幅にアップした。肩部の独立可動式のフレキシブルシールドも特徴的な装備だ。また、右腕には2連装ビーム・ガンを備え火力も向上している。しかしその一方で、これら装備の重量増により機動性が低下するという問題も生じた。脚部などにはスラスターユニットが増設されているが、重量増を打ち消すほどの効果はなかったようだ。

結局のところ、RX-178の性能向上策はフルアーマー化ではなく、サポートメカであるFXA-05Dディフェンサーによる強化プランが採用されるに至った。こちらは火力と機動力（一連力）、さらには2機の連携運用による柔軟な戦術を重視していたとされている。ビーム兵器全盛となったグリプス戦役期においては、増加装甲による少しばかりの防御力向上よりも、機動力向上の方が優先されたということであろう。

MSA-099-2

## リック・ディアスⅡ

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全　高 | 24.05m | センサー有効半径 | 11,200m |
| 頭　頂　高 | 18.52m | 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 本体重量 | 30.7t | 武　装 | ビーム・サーベル<br>2連装メガ・ビーム・ガン |
| 全備重量 | 58.2t | | |
| ジェネレーター出力 | 1,850kW | | |
| スラスター推力 | 102,300kg | | |

### 細かな点に手を加えた性能向上モデル

アナハイム・エレクトロニクス社がRMS-099リック・ディアスを改良したモデル。基のRMS-099か頭部にコクピットを持つ構造ゆえ、胸体内構造の変更に対する自由度が高く、改修が容易だったという。なおスペック上は本機とRMS-099はほぼ変わりがないが、ハンガーや脚部のスラスターが強化されており、機動性は向上している。また、2連装メガ・ビーム・ガンは、MSZ-010Zガンダムのダブル・ビーム・ライフルのプロトタイプモデルである。

MSA-004K

## ネモⅢ

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全　高 | 21.4m | センサー有効半径 | 12,050m |
| 頭　頂　高 | 18.5m | 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 本体重量 | 45.4t | 武　装 | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・キャノン |
| 全備重量 | 56.1t | | |
| ジェネレーター出力 | 1,620kW | | |
| スラスター推力 | 68,600kg | | |

### 固定兵装を取り入れたネモ後継機の代替案

MSA-003ネモの発展型、本来のMSA-003強化プランのMSA-004ネモⅡのシェネレター出力向上が失敗し、武装強化特装型として生まれたのが本機である。固定兵装のビーム・キャノンは上ハッチ方式でハッチハッチ両側面に予備ハッチを搭載するなど、ハッチにはハーニアスタビレーターを備えている。開発は量産型人型機に遅れ、1号機が完成したのはグリプス戦役も終盤、ギガンのアクシズがぶつけられた日、宇宙世紀0088年1月18日であった。

MSA-005K

# ガンキャノン・ディテクター

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.5m |
| 本体重量 | 34.3t |
| 全備重量 | 54.5t |
| ジェネレーター出力 | 1,780kW |
| スラスター推力 | 64,600kg |
| センサー有効半径 | 9,200m |

| | |
|---|---|
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・ガン<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・キャノン×2 |

## カラバのために作られた可変機構を内蔵した支援機

カラバの要請を受け、エゥーゴがアナハイム・エレクトロニクス社に開発を依頼した支援機で、ゲリラ戦に適応しつつ、射撃時の安定性が求められた。これにはMSA-005メタスの可変フレームを流用し、射撃形態への変形で解決を図った。主兵装は右肩のビーム・カノン砲塔の2門のビーム・キャノン・ハッチに内臓するアームは、射撃時の安定性向上に寄与する。2機が製造され、1機は事故で喪失、残り1機がカラバで運用された。グリプス戦役後は地球連邦軍で運用されている。

MSA-005S

# メタス改

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.3m |
| 本体重量 | 34.9t |
| 全備重量 | 50.9t |
| ジェネレーター出力 | 2,000kW |
| スラスター推力 | 83,000kg |
| センサー有効半径 | 12,000m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ハイ・メガ・キャノン |

## ハイ・メガ・キャノンを備えた高火力型メタス

MSA-005メタスを砲撃戦仕様に改修した機体。可変機構を実現させたため、あまりフレーム剛性は高くないMSA-005だが、本機は関節各部の剛性は高められ、あるいは改善もされた。モビルアーマ形態時の機首部にハイ・メガ・キャノンを内蔵し、モビルスーツ時でも水平撃ちが可能。ただ指揮システムやレーダーの出力は特に高いわけではなく、強大な威力を持つとはいえ決して軽い、どちらかといえばMA形態での火力を活かした宇宙戦闘機的な性格の機体とみられる。

MSR-100S
# 百式改

| | |
|---|---|
| 全　　高 | 19.2m |
| 本体重量 | 39.2t |
| 全備重量 | 63.6t |
| ジェネレーター出力 | 2,015kW |
| スラスター推力 | 93,500kg |
| センサー有効半径 | 11,500m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 武　　装 | バルス・レーザー砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・ガトリングガン<br>グレネード・ランチャー×4 |

## 百式のポテンシャルをアップデートさせる

ナハイム・エレクトロニクス社によるZ計画の一環として開発されたMSN-0010式は、可変機構の研究中に生まれた機体だ。実質的にMSZ-006Zガンダムのテストベッドだったが、グリプス戦役ではクワトロ・バジーナ大尉の乗機として活躍した。

MSR-100S百式改は、MSN-0010を時代の変化に合わせて強化した機体だ。主に軽量化と推進力の向上、運動性の強化に重点を置いている。原型機からフレームが露出した特徴的な脚部を持つが、本機ではさらに上腕部の装甲もオミットされた。

スペックも、本体重量は原型機よりも軽いが、装備の増加に対する比率や重量配分の適正化、といった意味での軽量化なのかもしれない。また、クバンとバインダーは増加モーメント型高移動バーニア・スタビライザーに変更された。

武装面も強化がなされ、前後に長い特徴的な頭部は、バルカン砲ではなくバルスレーザー砲のユニットを内蔵するためである。また肩部など、ハードポイントが増設され、同時期に開発中の各種兵装の装備が予定されていた。なお、これらの改修は比較的容易だったとされ、バースの百式へ「1週間程度で通常使用する機体にする」とセットを作成している。

MSR-100S

# 量産型百式改

全高 19.2m
本体重量 39.2t
武装 ビーム・サーベル×2 ビーム・ライフル ビーム・ガトリングガン

## 百式改を量産向けに改修した機体だが……

本機はMSR-100S百式改の量産最適化モデル。頭部のバルスレーザーや肩部のハードポイントなど、機能は原型機から受け継ぐが、腕部などはMSN-0010百式に準じた構造である。さらにフレキシブルなインナーフレーム、増加モーメント型高機動バーニアスタビライザーといった装備はオミットされている。一般的に量産化のためコストダウンした機体となっているが、単座機としての機能は十分に確保されている。結局のところ本機が本格的に量産される機会はなかった。

MSZ-006X2
プロトタイプ
Zガンダム
ディアスヘッド

基本的な性能はMSZ-006X1と同じで頭部ユニット形状が異なっている。このタイプは通称「ディアスヘッド」と呼ばれている。他にネモヘッドと呼ばれる機体もある。

MSZ-006X1

# プロトタイプ Zガンダム

全高 19.6m
本体重量 29.9t
全備重量 52.1t
ジェネレーター出力 1,790kW
スラスター推力 99,000kg
センサー有効半径 14,000m
装甲材質 ガンダリウム合金
武装 ビーム・サーベル×2 ビーム・ライフル

## アナハイム・エレクトロニクス社純正のZガンダム試作機

アナハイム・エレクトロニクス社が開発していたMSZ-006 Zガンダムの試作機。同社がRX-178ガンダムMk-Ⅱを入手した時に完成しており、本機への技術流入はないが、本機は非可変機である直式型頭部のX1、リック・ディアス型頭部のX2、ネモ型頭部のX3の計3機が製造されたが、X1型が有効との試験結果に基づき、MSZ-006が作られることになった。なお、本機に用いられた部品の一部は、そのままMSZ-006に流用された。開発期間の短縮に貢献している。

MSF-007

## ガンダムMk-Ⅲ

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全　高 | 22.0m | 機体材質 | ガンダリウム合金 |
| 頭　高 | 19.5m | 武　装 | 頭部ビーム・キャノン<br>腰ビーム・サーベル×2<br>シールド付属ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル |
| 本体重量 | 32.1t | | |
| 全備重量 | 48.2t | | |
| ジェネレーター出力 | 2,022kW | | |
| スラスター推力 | 107,500kg | | |
| センサー有効半径 | 11,500m | 備　考 | シールド装備 |

### ガンダムMk-Ⅱが持つ問題点をアップデート

RX-178ガンダムMk-Ⅱは、革新的ではあったが、導入したナノラミネート・エレクトロニクス社では問題点も指摘されていた。それらを解決すべく新世代機として開発されたのがMSF-007ガンダムMk-Ⅲである。ムーバブル・フレームの構造上の脆弱性を見直し、単純化することで強度向上を図った。また、関節部は有機的な動きをさせるため、大幅に手が加えられている。その他、大型のハニカム・スタビライザーと可動式ハニカムスラスターを備え、運動性も高められている。

MSZ-007

## 量産型Zガンダム

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全　高 | 20.4m | 機体材質 | ガンダリウム合金<br>ルナ・チタニウム・セラミック複合材 |
| 本体重量 | 30.9t | 武　装 | ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル×2<br>メガ・ビーム・ライフル |
| 全備重量 | 48.3t | | |
| ジェネレーター出力 | 1,830kW | | |
| スラスター推力 | 73,700kg | | |
| センサー有効半径 | 11,900m | | |

### Zガンダムのモビルスーツ形態時の能力にフィードバックする

MSZ-006Zガンダムは、完成度の高い可変モビルスーツ（MS）だが、MS形態時での戦闘力も優秀であった。この点に着目し、MSZ-006の量産化を目指したのが本機である。原型機の可変機構をオミットするという大胆な策で、頭部もツインカメラやV字アンテナを廃している。しかし非可変MSとして見ると平凡な本機は、MSN-100百式やその他の量産MSの方が有効という、ある意味もっとも実用的な理由により、計画中止となり、数機が製造されたにとどまった。

MSZ-008

# ZII ゼッツー

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.3m |
| 本体重量 | 31.1t |
| 全備重量 | 69.7t |
| ジェネレーター出力 | 2,130kW |
| スラスター推力 | 114,300kg |
| センサー有効半径 | 14,000m |
| 開発母体 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ビーム・サーベルX2<br>ビーム・ライフルX2<br>メガ・ビーム・ライフル<br>クレイ・バズーカX2 |

## メタスの可変機構を利用した高バランスのZガンダム

MSZ-006 Zガンダムの発展型として、アナハイム・エレクトロニクス社が開発・生産したMS。

本機の開発においてはMSA-0011メタスの可変機構を流用して、単純化を図った点が最大の特徴であり、生産性と操縦性が向上した方、MSZ-006のシステム的な特徴であるオプション装備なし。

本機による大気圏突入はできないため、本機の戦略的役割は、大きく異なるものとなった。そういった意味ではMSZ-006の発展型という本機の説明は、あまり適切ではないかもしれない。

なお、本機のモビルアーマー形態は、ライフライダーは、大気圏内での飛行も不可能だが、原型機で可能だったサブ・フライト・システムのような運用は使用環境が限定されるその反面、航宙戦闘機として見た場合、性能は申し分なく、ハンブルな可変機構と相まって、生産コストや運用面でも大きな問題はなかった。しかし、本機の開発時期は、MSZ-010 ZZガンダムと重なり、MSZ-010の開発が優先されたため、廃案となってしまった。

### ウェイブ・ライダー形態

本機の場合、可変後のMA形態は戦闘機に該当し、大気圏突入能力や大気圏内での戦闘は考慮されていないだが、MSZ-006 Zガンダムの系列機ということから、便宜的にウェイブライダーの名称が付与されている

SE.DJ-1R

## ディジェ SE-R

| | |
|---|---|
| 全高 | 18.6m |
| 本体重量 | 28.6t |
| 全備重量 | 58.3t |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金(推定) |

### 多くが謎に包まれた幻のディジェ

MSK-008ディジェをベースに開発された機体。そもそもRMS-099リック・ディアスを原型とする機体ながら、本機は超高性能MSとして企画され、様々な革新的機能が実装されているといわれる。そのため本機は、原型機とはまったく異なる姿となっている。ただ、機体の装備やスペックなどの詳細は不明な点が多く、開発主体すら不明。カラバの自力開発かも判然としない。謎多き機体である。

# ZZ.CCA-MSVの世界

## ZZ.CCA-MSVのベースとなった作品

MSV機体解説
MSV
ZZ.CCA
MSV編

### 機動戦士ガンダム GUNDAM 逆襲のシャア

作品データ
公開　1988年3月12日
配給　松竹系

STAFF
企画・製作　サンライズ
原作・脚本・監督　富野由悠季
キャラクターデザイン　北爪宏幸
モビルスーツデザイン　出渕裕
メカニカルデザイン　ガイナックス・佐山善則

主題歌
「MAY THE TIME ～メビウスの宇宙を超えて～」

### 機動戦士ガンダムZZ

作品データ
放送　1986年2月1日～87年1月31日
放送局　全47話、毎週土曜日　17：30 ～ 18：00
キー局　名古屋テレビ

STAFF
企画　日本サンライズ
原案　矢立肇
原作・脚本監督　富野由悠季
キャラクターデザイン　北爪宏幸
メカニカルデザイン　仲重春、明貴美加
メカニカルベースデザイン　小林誠、出渕裕
デザイン協力　安彦良和、大河原邦男、華田一巳
メカニカル作画監督　内田順久

主題歌
オープニング「アニメじゃない-夢を忘れた古い地球人よ-」
挿入OP「サイレント・ヴォイス」
終期ED「時代が泣いてる」、最期ED「一千万年銀河」

## プラモデルのオマケ的企画から始まったMSV

「機動戦士ガンダムZZ」のMSV企画である「ZZ・MSV」と、「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」のMSV企画「CCA・MSV」は、両方合わせていわば後天的なMSV企画と言っていいだろう。そのオリジナルは、各作品のプラモデルに封入されていた組立説明書（インスト）に掲載されていた記事、という体裁が初出となっている。

これらの機体は当初から「MSV」を名乗っていたわけではなく、あくまでプラモデルの世界観を広げるための「オマケ的な」企画として登場したものだった。しかし、プラモデルとして商品化される予定もない機体がインストで紹介される、というのは異例の企画ではあるものの、「映像に登場しなかったモビルスーツのバリエーションモデル」という広い意味では本家MSVのインストにも掲載されていたバリエーション機体と同じ扱い、といっていいだろう。その精神としてもMSVと呼ぶにふさわしいものだ。

実際、『B-CLUB』の別冊として刊行され、現在まで形を変えながら版を重ねている『MS大全集』に掲載される際には、各々「MSV」のカテゴリー名が与えられているため、「MSVシリーズの1つ」と認識されているというのが現状だ。

その展開において、「バンダイ（当時）がインストへのバリエーションモデル掲載を企画し、製作プロダクションである神重春が具体的な記事及びデザインを展開する体制であった。それらのデザイン画構は、当時仲重春に所属していた明貴美加、福地仁といった、その後ガンダム作品に関係する若手デザイナーが担当している。

またプラモデルのインストに掲載されるモデルらしく、バリエーションは、劇中に登場する機体解説品のベースとなるモデル（プロトタイプ）、あるいは増加装備型、発展型といった機体が多いのも特徴で、メーカーサイドの遊び方の提案といえるだろう。そのような出自もあって、「ZZ・MSV」とも違ったラインナップ傾向にある。

また、「逆襲のシャア」ではHi-νガンダムやヤ、ナイチンゲールといった、作品とは縁なき展開がされた小説『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア ベルトーチカ・チルドレン』に登場する機体も、現在では「CCA・MSV」の関連機種として、ラインナップに加えられている。

AMX-009
カ・ゾウム

X-102
ズサ

MSZ-010
ZZガンダム

ガンダムZZ」の
代表的なMS

合体変形

Gフォートレス

NZ-000
クィン・マンサ

AMX-103
ハンマ・ハンマ

前作から敵対組織の数が減られ、対立構造がより明確化された「ガンダムZZ」。ただ主役サイドのMSは、新規主役のZZガンダム以外はほぼ持ち越しのため、アクシズ＝ネオ・ジオン勢MSの方がバラエティーに富んでいる。作中でMSV的な機体がゲストメカとして登場しているのも、作品的特徴の1つ。

逆襲のシャア」の
代表的なMS

NZ-333
α・アジール

RGM-89
ジェガン

AMS-119
ギラ・ドーガ

MSN-04
サザビー

RX-93
νガンダム

劇場作品というフォーマットもあって、作中に登場するMS（MA）の機体数そのものは決して多くない。主役であるアムロとシャアの搭乗機体もデザイン自体はシンプルなラインでまとめられていて、「機動戦士ガンダム」への原点回帰を彷彿とさせる。規格外の巨大MAであるα・アジールも作品に彩りを添えている。

## 好対照な作品である『ZZ』と『逆シャア』

『ガンダムZZ』は『ガンダム』から連続する形で1986年3月1日から放送開始されたTV作品である。主人公は前作から変わったものの、世界観、物語には続編にあたり、登場モビルスーツは、『ZガンダムⅡ』可変機など特殊機のモビルスーツ戦を描いたことを継承しつつ、敵モビルスーツは数回のように強力な新機種を登場させ、ハデさを増したものだった。『逆襲のシャア』は『ガンダムZZ』放送終了から1年後に公開された劇場作品であり、本作のモビルスーツは、『機動戦士ガンダム』に立ち戻り、その発展系ともいえる「ミリタリー」「兵器」「量産機」方向に振られていた。アムロとシャアの戦いの決着」を描いた作品ゆえ、オールドファンの好みに寄ったのは当然ともいえるだろう

TVシリーズに付随した「ZZ・MSV」よりも、劇場作品である「CCA・MSV」の機体の方のラインナップが多いのも、ワンオフ機が多かった『ガンダムZZ』、量産機中心の『逆襲のシャア』という違いも理由の1つと思われ、MSVの本質をよく表しているシリーズといえるだろう。

## 高速巡洋艦クラスの戦闘能力を付与

MSZ-010 ZZガンダムの単体での作戦遂行能力向上のために計画された機体だが、基本は巡航形態の FX-010 Gフォートレスの強化案といえる。機体右上面部にハイパー・メガ・ランチャーを装備し、さらに両側面部にはミサイル・ランチャーを備えることで火力増強を図っている。また、プロペラントタンクやブースター・ユニットなどを増設することで航続距離も延伸されている。こうした強化改修によって高速巡洋艦クラスの能力を得られたという。先にも述べたようにFX-010AGフォートレス武装強化案「スーパーGフォートレス」は、巡航形態における戦闘能力を向上させるプランだ。

基本的に巡航形態での戦闘をメインに想定しているが、モビルスーツ形態への変形も可能である。ただし、変形時には装備類を一度パージする必要があり、ミサイル・ランチャーなどはダブル・ビーム・ライフルと同じように本体で把持する必要がある。なお、このプランでは、コア・トップの上翼部分にもミサイル・ランチャーを増設する案もあった。

MS-14D

MS-14D
## デザート・ゲルググ

## ベリスコープを備える砂漠地帯用ゲルググ

砂漠地帯での運用を考慮し開発されたMS-14ゲルググの派生機。頭部まわりのセンサー類が変更されているほか、望遠鏡を備える。これは砂中に身を潜めアンブッシュ（待ち伏せ）するための装備で、この装備からもわかるようにゲリラ戦を得意とする。脚部には固定武装としてアームド・バスターを装備している。これは折りたたみ式の実体弾兵装である。一年戦争時の機体だが、戦後も本機はシャンバロ公国の残党軍によって長く運用されている。

FX-010A

# Gフォートレス武装強化案 スーパー Gフォートレス

| | |
|---|---|
| 全　長 | 30.58m |
| 全　幅 | 19.52m |
| 重　量 | 3.1t |
| スラスター推力 | 168,200kg |
| 武　装 | ミサイル・ポッド×4、ミサイル・ランチャー×6<br>21連装ミサイル・ランチャー×2<br>ダブル・ビーム・ライフル<br>ダブル・キャノン、ハイパー・メガ・ランチャー |

MS-06DRC

# デザート・ザク ロンメル・カスタム

| | |
|---|---|
| 頭　高 | 17.8m |
| 本体重量 | 58.7t |
| センサー有効半径 | 8,800m |
| 装甲材質 | 超硬スチール合金 |
| 武　装 | シールド・クロー、<br>ロングレンジ・ライフル |

## アフリカのジオン残党軍を率いた男のカスタム機

アフリカ戦線のジオン残党軍「ロンメル部隊」を率いるデザート・ロンメル中佐の専用機。本機には使用環境に即した改修が施されているが、ベース機体がMS-06Dザク・デザートタイプか、MS-06JザクⅡなのかは判然としない。一年戦争から8年の間、改修が繰り返されたことは想像に難くないが、真相は藪の中だ。実際、第一次ネオ・ジオン戦争時のロンメル中佐の乗機は、MS-06Jを改修したものであったため、本機による戦果や実績といった詳細な記録も明らかとなっている。

RMS-188
# ザクダイバー

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全高 | 17.7m | 武装 | サブロック・ガン |
| 全備重量 | 45.8t | | |

## 深海作業用に開発された異形の水陸両用機

地球地上軍が開発した水陸両用機。ノウ・現存の機体と比べて、より深い潜航深度での活動が可能。この為、本機も戦闘用というよりは作業用に近い機体だが、サブロック・ガンのような武装も施されている。特徴的なメインカメラは、視界の悪い深海での集音・画像処理が採用されている。カラーリングは成長の長い赤と灰色が使われており、これ・・深海での見え方を考慮した可能性が考えられる。人間の目には赤は深海では黒に近く見えるなどの為には赤くなる。

RGM-89S
# スタークジェガン

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全高 | 19.2m | 標準装備 | ・ビーム・サーベル×2<br>・ビーム・ライフル |
| 本体重量 | 28.4t | 武装 | バルカン・ポット・システム、ビーム・サーベル×4（連携式）、グレネード・ランチャー×6（装弾式）、3連装ミサイル・ポッド、ビーム・ライフル、ハイパー・バズーカ |
| 全備重量 | 68.3t | | |
| ジェネレーター出力 | 1,670kW | 備考 | 胸部にダミー頭部ロケット×2 |
| スラスター推力 | 76,600kg | | |
| センサー有効半径 | 20,700m | | |

## 核ミサイルを備える対艦戦闘型のジェガン

RGM-89ジェガンに追加装備や装甲を施した強化タイプ。肩部に3連装ミサイル・ポットを備え、バックパックには、ミサイル発射時の反動を低減させるスタビライザーが取り付けられている。

初期の運用試験機では宇宙空間における核兵器運用も視野に入れており、ミサイル・ポッド側面の出っ張りに2発、計4発が取り付け可能である。本体の変更点は少ないが、両腕には機銃を備えている。腰部増加装甲に見えるキルマークが示すように、対艦戦闘を主目的としている。

RGC-90

## ジェガン重装型

武装 → ビーム・キャノン×2
ミサイル・ポッド×2

### 火力を追求し再設計した陸戦向けのジェガンタイプ

RGC-90ジェガン重装型は、RGM-89ジェガンのユーザブル・フレームを流用し、再設計した重武装タイプの機体。武装には肩部に大型ビーム・キャノンを備え、専用ハンド・マニピュレーターを装備する。任意にパージ可能。本機は、宇宙空間での戦闘も可能ではあるが、基本は陸戦主体の設計であり、推力そのものは強化されているが反面、バックパックのバーニア・ユニットはRGM-89よりも短く、タイプ的なため、機動性の上昇はあまり考慮されていない。

RGZ-91B

## リ・ガズィ・カスタム

| | |
|---|---|
| 全高 | 20.5m |
| 本体重量 | 25.9t |
| 全備重量 | 59.1t |
| ジェネレーター出力 | 2,550kW |
| スラスター推力 | 99,000kg |
| センサー有効半径 | 21,300m |

武装 → 60mmバルカン砲×2、ハイパー・ビーム・サーベル×2、ビーム・アサルトライフル、3連装グレネード・ランチャー×2、3連装ミサイル・ランチャー×2、ビーム・ガン×2、メガ・ビーム・キャノン

### BWSの使い勝手が向上した改修型リ・ガズィ

RGZ-91リ・ガズィの性能向上型。RGZ-91のBWSバックウェポン・システムの使い勝手の悪さを解消すべく、本機では背部に装備したままの状態で運用が可能だが、もちろん可能。武装面も純宙戦闘機時、機首部のメガ・ビーム・キャノンに加え、重用のハイパー・ビーム・サーベルを備え、重前大力また、脱装などに加えて、ビーム・ライフルにより、連動型ビーム・ライフルにより、連動型ビーム・ライフルにより、連動型

RX-93

# νガンダム

「ダブル・フィン・ファンネル装備型」

武装
- 60mmバルカン砲×2
- ビーム・サーベル
- ビーム・ライフル
- フィン・ファンネル×6

備考
- シールド装備

## フィン・ファンネルを左右に振り分けて装備する

地球連邦軍のニュータイプ専用機であり、初のサイコ・フレーム採用機でもあるRX-93 νガンダム。このRX-93の強化プランの1つとして考案されたのがRX-93 νガンダム「ダブル・フィン・ファンネル装備型」である。文字通り、RX-93の特徴といえる装備のサイコミュ兵器、フィン・ファンネルを左右に分けてマウントさせるという案である。

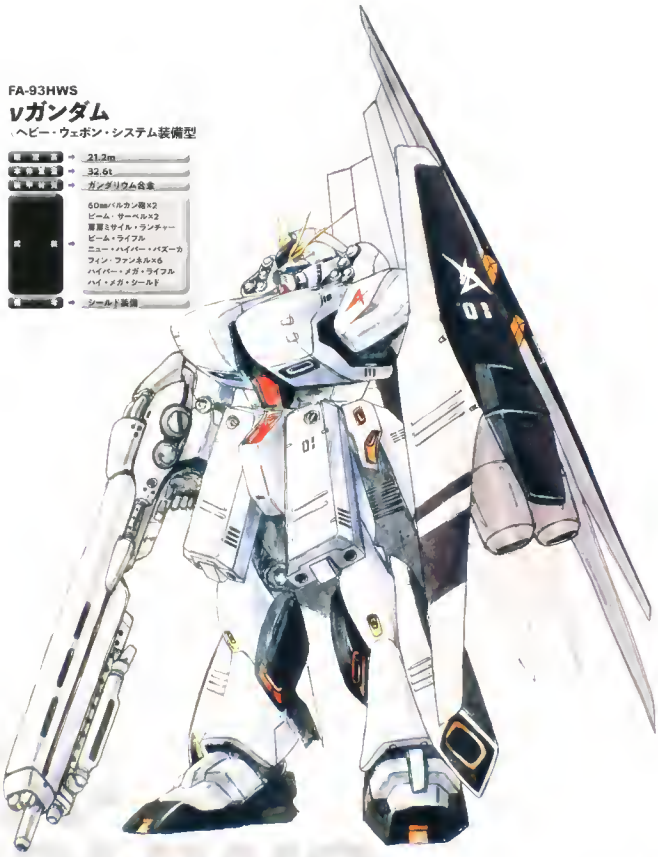
改装そのものは至極単純で、バックパックのビーム・サーベル用ラックをフィン・ファンネル用マウントに換えるというものである。専用のビーム・ライフルやシールドも備えるようだが詳細は不明だ。装備するフィン・ファンネルの搭載数と配置は、左右に3基ずつを基本としている。そのため装備数の合計はRX-93と同数となっている。火力面などは原型機と変わらないが、ただしビーム・サーベルの装備数は減っている。フィン・ファンネルを左右に分配配置することで重量配分や運動性は改善されたと思われる。さらに火力増強を狙って、左右に最大5基の、つまり合計12基のフィン・ファンネルを装備することが可能であったという。しかしながら、RX-93の実戦配備が急がれたことに伴ってフィン・ファンネル製造が間に合わず、本計画そのものが見送られることとなった。

FA-93HWS

# νガンダム

ヘビー・ウェポン・システム装備型

| | |
|---|---|
| 全長 | 21.2m |
| 本体重量 | 32.6t |
| 装甲素材 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>肩部ミサイル・ランチャー<br>ビーム・ライフル<br>ニュー・ハイパー・バズーカ<br>フィン・ファンネル×6<br>ハイパー・メガ・ライフル<br>ハイ・メガ・シールド |
| 特殊装備 | シールド装備 |



## 戦争の長期化をにらみフルアーマー化したνガンダム

一年戦争時からガンダムタイプの強化装備として、しばしば考案されているフルアーマータイプだが、第二次ネオ・ジオン戦争時でも、RX-93νガンダムに対するフルアーマー・プランが数案考案されている。

そのうちのHWS（ヘビー・ウェポン・システム）を装備したFA-93HWSνガンダム（ヘビー・ウェポン・システム装備型）である。

FA-93Sとは違い、本機の場合、胴体前面を覆った強化装甲に加え、脚部には機動性確保のスラスターユニットを装備するこの増加装甲の一部にはミサイルが内蔵され、一種のウェポンキャリアとしても機能する。武装面では、ハイパー・メガ・ライフルや、ニュー・ハイパー・バズーカ、両肩部のミサイル・ランチャー、さらにノーマルのシールドにマウントする形で、大型連装メガ粒子砲を内蔵したハイ・メガ・シールドなど、大幅に強化される。

こうした、徹底的とも思える装備の数々は、ネオ・ジオンの戦闘記録が長引くケースを想定したものであった。中には胸部装甲にコアブロックシステムを採用し、コアファイターとしての生存性を向上させるなど、さらなる強化も考慮されていたというが、第二次ネオ・ジオン戦争そのものが早期に終息したため、本機の一連の強化プランが実現することはなかった。

RX-93-v2

# Hi-νガンダム

| | |
|---|---|
| 全高 | 20.0m |
| 本体重量 | 27.9t |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>右肩部マシンガン<br>ビーム・ライフル<br>ニュー・ハイパー・バズーカ<br>フィン・ファンネル×6<br>ハイパー・メガ・<br>バズーカ・ランチャー |
| 固有装備 | ソールド装備 |

ヒツはHi-νガンダムには、2つの画稿（カラー設定画）が存在する。こちら（左図）の画稿は、21世紀に入りプラモデル（ハンダイのマスターグレード）用の開発画稿として起こされたものである（製品は07年に発売）

## 本来の機体ポテンシャルを熟成により発揮させる

ごく短期間で開発され、実質的には急造機であったRX-93νガンダムを改修し、本来の能力を持たせる製造されたニュータイプ専用機。

フィン・ファンネル用ラックに片側3基ずつマウントする形となった。原型機では、機体の中心から外れた位置に重量物をマウントし、運動性に与える影響も大きかったが、本機の変更により運動特性は改良された。また、射出後のフィン・ファンネルを回収し再マウントも可能である。原型機では機体自体が大型でかつフィン・ファンネルのスペースも必要なため運用が難しい面があったと思われるが、この改良はそういった実用面も向上してる。

クハノクには元基のプロトハラタンクを備え、稼働時間も同じくしている。フィン・ファンネル以外の武装として、ニュー・ハイパー・バズーカやビーム・ライフル、ビーム・サーベル、大口径のハイパー・メガ・バズーカ・ランチャーなどで、従来のイカ様子晩なとはない。

また、ビーム・サーベルはファンネルのラック部にもおずつ、さらに手腕にも装備されている。その態外観からは違い知れないが、本機では最も重要な基幹部分。サイコミュ機能の熟成も進められ、全体的な完成度は高められている。

MSN-04II

# ナイチンゲール

| | |
|---|---|
| 全高 | 27.8m |
| 重機重量 | 22.5m |
| 本体重量 | 48.2t |
| 全備重量 | 105.7t |
| ジェネレーター出力 | 6,760kW |
| センサー有効半径 | 23,620m |
| 武装 | ビーム・トマホーク<br>ビーム・サーベル<br>ミサイル<br>メガ・ビーム・ライフル<br>ファンネル×10<br>メガ粒子砲<br>隠し腕 |
| 備考 | シールド装備 |

## 新生ネオ・ジオン総帥の専用機に相応しいMS

新生ネオ・ジオン総帥シャア・アズナブル専用として開発された、サイコ・フレーム搭載のニュータイプ専用モビルスーツ（MS）。彩状は人型をややはずれ、前後に長い独特な形で、MSとモビルアーマーの中間的な機体といえる。主兵装のファンネルは新生ネオ・ジオンのニュータイプ専用MSが装備する円筒形のものとは異なり、NZ-333α・ユニコーンと同様の漏斗状のタイプだ。ただしファンネル自体は、ダウンサイジングされたものを採用する。

また、メガ・ビーム・ライフルは大型で出力が高いだけではなく、ビームの拡散・収束を変化させて状況に応じた使い分けが可能。銃身部にはハイポンド分付き、精密射撃にはスタビライザーの役目を果たす背部の大型ハインダーや機部アーマー裏には大型スラスターを多数内蔵しており、燃料消費に見合うブロペラントタンクも備えている。

本機はファンネルとメガ・ビーム・ライフルを主軸とした遠距離戦を行うが基本戦術だが、近接戦闘でも多彩な強さを誇る。機体には隠し腕も内蔵されており、初見でこれをかわすには、それこそニュータイプでもなければ難しいであろう。まさに、最後のシャア・アズナブル専用機と呼んで差し支えない威容を誇るMSである。

NZ-222
# サイコ・ドーガ

武装 ⇒ 有線サイコミュ式ビーム砲×2
ファンネル×6

## 後のα・アジールへ繋がる大型ニュータイプ専用機

NZ-222サイコ・ドーガは、新生ネオ・ジオンが開発したニュータイプ専用モビルスーツ＝MSである。左ページで紹介しているAMX-120Xキュラ・ドーガ・サイコ試験型の開発以来の課題の1つといえた、十分な性能を持つサイコミュ・システムの小型化、を進め、現状のシステムが収まる大型のボディに搭載することで、必要な性能要件を満たす、というのが本機のコンセプトであった。

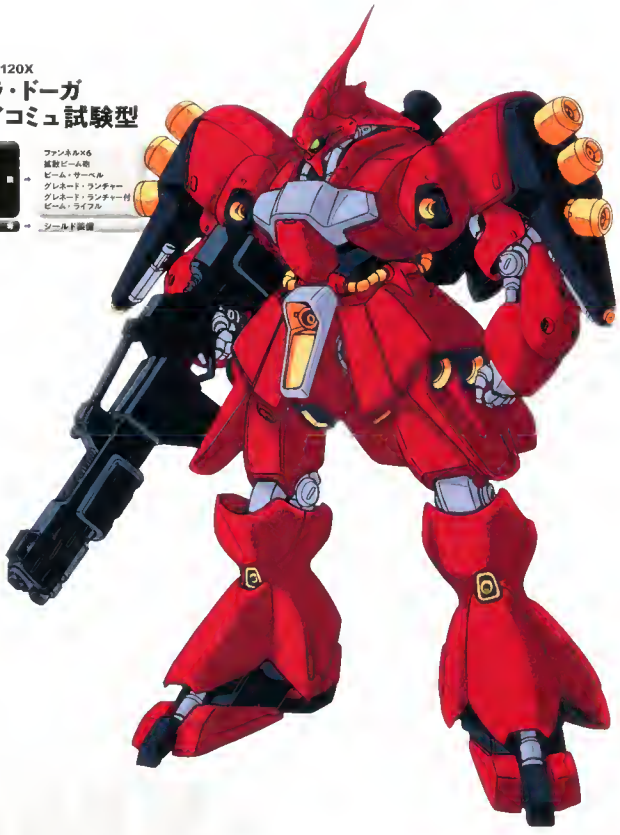
そのため、本機はMSとしてみても、機体サイズはかなり大型の部類となっている。詳細は不明、脚部もクロー形状の簡易型であり、急造感が窺える。かつてのシャア公国軍ニュータイプ専用機、MSN-02ジオングを彷彿とさせる姿である。

だが、同時期に開発が進められていたMSN-03ヤクト・ドーガや、その発展型といえるMSN-04サザビーにおいて、高性能かつ、それなりの機体サイズを実現していたため、そこから本機の開発計画は、路線を大幅に変更されることとなった。

それがMSからモビルアーマー（MA）への転換である。元々大型であった機体の再設計を行い、そのボディンシャルを十二分に活かせる強襲突撃用のニュータイプ専用MAとして生まれ変わったのである。それがNZ-333α・アジールである。

AMX-120X

# ギラ・ドーガ サイコミュ試験型



## ネオ・ジオンの ニュータイプ専用機の 源流となったモビルスーツ

ア・バオア・クー攻防戦後、ネオ・ジオンがニュータイプ専用機として開発する際、そのテストベッドとして製造された試作機。

本機をベースにMSN-04サザビーが開発されたことから、ギラ・ドーガのオーソドックスなフレームを流用しつつ、サイコミュ・システムを組み込み、ファンネルを搭載した機体構成はファンネル6基にビーム・ライフル、メガ粒子砲内蔵シールドを装備した場合はMSN-03ヤクト・ドーガと変わらないが、ファンネルのユニット方式、機器にメガ粒子砲を内蔵するなど、細部は異なる。装備しているライフル形状は、MSN-04サザビーにも似ており、新生ネオ・ジオンのニュータイプ専用機の原型であることが窺われる。

MSN-03と比べた場合、本機の性能は、火力などは優れるものの運動性は劣るとされている。公的にはMSN-03に劣るわけではないという評価は興味深いところである。それでも、本機が採用されなかったことを踏まえると、本機にはトータルバランスが悪いなどの判断をされたのであろう。なおネオ・ジオンでは、本機をはじめニュータイプ専用機の基礎設計は行っているが、サイコミュ小型化が難航し、最終的にはアムロ・レイクローズアップ計画、製造を依頼している。

AMS-119
# ギラ・ドーガ重装型

| | |
|---|---|
| 全　高 | 20.0m |
| 本体重量 | 28.0t |
| 全備重量 | 62.1t |
| ジェネレーター出力 | 2,160kW |
| スラスター推力 | 75,000kg |
| センサー有効半径 | 16,400m |
| 装甲材質 | チタン合金セラミック複合材 |
| 武　装 | ビーム・ソード・アックス<br>ビーム・マシンガン<br>グレネード・ランチャー<br>ラング・ブルーノ砲 |

## 装薬式の大型火砲を持つ遠距離射撃タイプ

新生ネオ・ジオンの主力モビルスーツであるAMS-119ギラ・ドーガの武装強化タイプ。AMS-119本体の仕様は変わらず、背部のバックパックには長距離用のランゲ・ブルーノ砲と、人型プロペラントタンクが一体化されたものを装備している。

特徴的なランゲ・ブルーノ砲は、装薬式の実体弾兵器であり、通常時はバックパックの背部分に折り畳む形で収納され、射撃時には砲身を展開する。また左肩分にはカウンターウエイトを備えている。このほかバックパックには、射撃時の反動を低減させるためにアポジモーターが備えられ、装薬類の冷却ユニットなども内蔵されている。

機体両側面に張り出している巨大な物体はプロペラントタンクであり、本体には対弾板が装備されている。ビーム兵器対策用のシールドとは違されていないが、それ以外の装備は、AMS-119と同じで、ビーム・ソード・アックスやビーム・マシンガンなどを携行している。

本機の装備の成果のほどは、第一次ネオ・ジオン戦争が早期に終結したこともあり、判然としないが、後年にはネオ・ジオン残党組織などで運用された例もあるため、一定の効果はあったのかもしれない。

AMS-119S

# ギラ・ドーガ改

機甲部隊 ⇒ ガンダリウム合金

## 指揮官向けに高性能化を図ったギラ・ドーガ

AMS-119ギラ・ドーガには、数多くの派生機がある。AMS-119Sギラ・ドーガ改もそのバリエーションの1つであり、指揮官などの使用を前提とした性能向上型だ。

本機の開発製造は、別ページでも紹介している、AMS-120Xギラ・ドーガ サイコミュ試験型と同時期に行われている。(別ページ参照)本体に使用するムーバブル・フレームはAMS-119と同一タイプだが、アビオニクスが高性能化されている。また、外装部分にも細かい改修が施され、機体のシールド形状なども原型機とは異なる。

さらに本機の装甲材にはガンダリウム合金が用いられている。通常はチタン合金セラミック複合材だ。ただ、モビルスーツのビーム兵器が標準化した時代背景を踏まえると、それほどのアドバンテージがあるのかには疑問も残る。しかし標準的なチタン系合金素材に比べ、ガンダリウム合金は強度も高く、軽量という可能性は考えられるものの、武装も専用装備に至る秩序的にはビーム・マシンガンが用意されていた。

こうした本機は高性能機という位置づけで計画されたが、開発リソースがNZ-333α・アンジールなどのニュータイプ専用機に振り分けられたため、量産化はされず、数機が製造されたにとどまった。

【 MSV後の潮流 ❶ 】

# ガンダム・センチネルの描いた軌跡

初代 MSV 以降のシリーズで、MSVは変容せざるを得なかったが、80年代において、もっとも「初代MSV」的な展開を見せたものこそ、カンダム・センチネル といって過言ではないだろう

Sガンダムは分離合体機構を備えているだけでなく、開発時から多くの追加オプション装備も並行して開発されていた。下図のSガンダム（ブースターユニット装備型）は、高機動型を目指したタイプ 高い機動力を誇る反面、稼働時間が短い。

エゥーゴとアナハイム・エレクトロニクス社によるMS開発計画である「ZII計画」によって開発された機体 ZZガンダム同様にコア・ブロック・システムを備え2機の戦闘機に分離・合体ができる。開発コードネームは「γ（イオタ）ガンダム」

## 新時代の「MSV」というべきセンチネル

ガンダム・センチネル」とは、元は「機動戦士ガンダムZZ」と「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」の間の商品的な空白を埋めるべく、バンダイと模型誌「月刊モデルグラフィックス」（大日本絵画刊）の共同企画として、同誌で展開された形でスタートしたが、後に「逆襲のシャア」のプラモデル展開が早まり、主に雑誌媒体で展開された作品だ。『ガンダム・センチネル』の特徴は、ガンダムの世界（宇宙世紀）の中という範囲で、徹底的にリアリティを追求したこと、といっていいかもしれない。これはある種、究極の「ガンダムごっこ遊び」でもあるだろう。また、雑誌連載時に模型作例と連動して記事展開され、キャラクターやストーリーも同時に発表されるなど、初代「MSV」のスピリットの正統な後継者といった内容であった。初代『MSV』がメカ設定のみならず、キャラクターとそれにまつわる散文的な展開だったのに対し、ひとつの作品といえるストーリーを持っていたのも特徴だろう。そしてそれを体現してクオリティーの高いビジュアルで見せたことも忘れるべきではない。MSVの一つといいながら、本作ではオリジナルの機体も数多く登場した。また「MSV」的なバリエーションモデルも、単なる○○用という派生型ではなく、それらを考証し、再構築したといってもよいほどに作り込まれていた。結果、Sガンダムや「ゼータプラス」といった、現在でも人気のある機体が数多く登場したのも頷ける。

その物語は時間軸的には「Zガンダム」から「ガンダムZZ」に移る頃のもので（宇宙世紀0088年1月25日から4月5日まで）、「ペズンの反乱」と呼ばれることになるエピソードを舞台としている。ティターンズの地球至上主義者「ニュータイプ」の反乱に対抗する地球連邦軍の特殊部隊、さらに月面都市のエアーズなどが参戦する、という構図であった。

これは「Zガンダム」「ガンダムZZ」の数多くの機体を登場させることができ、さらに精鋭部隊という設定から最新兵器として実現度メカも投入可能という構造で、結果的にメカバリエーションを豊かにすることに成功している。また、初代「MSV」で「ニュータイプ」の一員であった高橋昌也が参加 本作によりメカニカルデザイナーのカトキハジメが注目されることとなったことも、記憶にとどめておくべきだろう。

## 『ガンダム・センチネル』に登場するMS

MSA-0011 [Ex-S]
### Ex-Sガンダム

Sカンダムの強化型 ・フィールド発生器やブースター・ユニットの増設など戦闘の性能を高める。ビーム・スマートガンやリフレクター・インコムなど武装面の強化も図られている。

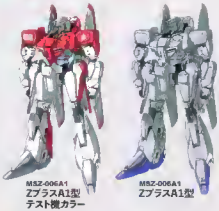
変形

### Gクルーザー

Ex-Sガンダムの基本形態。展開能力と行動半径の拡大を解消するために開発された。分離による合体変形は本来想定されていないが、各部のパーツを換装することでSガンダム本来の持つ分離 合体機能は使用可能である。

## Zプラスシリーズ

Zガンダムの有用性に着目して開発されたZプラスには いくつかの仕様の異なるタイプが存在する。C型は航宙戦闘機としての能力を向上させたタイプで、A型は大気圏内における性能の向上を図ったタイプ また A型はエゥーゴの支援組織カラバが C型は地球連邦軍が というように それぞれ開発を主導した組織が異なっている



MSZ-006A1
ZプラスA1型
テスト機カラー

MSZ-006A1
ZプラスA1型

ウェイブ・ライダー

変形

MSZ-006C1
ZプラスC1型

ORX-013
### ガンダムMk-V

連サイコ・ュ」を搭載した試作機。ガンダムの名前を冠しているものの ガンダムタイプの量産は滞い。開発段階数も多くないが、っち1機がアウンズの手に渡りドーベン・ウルフの原型機にな たといわれる。

MSA-007
### ネロ

Z計画で開発された「A ラムダ」ガンダムのと半身とSガンダムの下半身を組み合わせて作られた量産MS。様々なオプションの装備により 偵察型や武装強化型という 幅広い任務要求に容易な構造となっている。

RMS-142
### ゼク・ツヴァイ

ゼク・アインとは異なり 高火力 高機動化を推進した量MS。様々な兵装が用意されている。クリプス戦役期のMS群の中でもとりわけ大型の部類に入る。

RMS-141
### ゼク・アイン

地球連邦軍が開発した汎用MS。ジオン公国軍から接収した技術をベースにしているため ジオン系機体の影響が色濃い ニュータイプの生力機

FA-010A
### FAZZ

ZZガンダムの増加試作機に重火力支援システムを搭載した試験機ただし合体可変機構などはすべてオミットされている。少数ではあるが生産された

# M-MSVの世界

MSV機体解説 MSV M-MSV編

## M-MSVのベースとなった作品

- 機動戦士ガンダム

作品データ
放送　1979年4月7日～80年1月26日
総話数　全43話
　　毎週土曜日　17：30～18：00
キー局　名古屋テレビ

- MSV&MS-X
- 機動戦士Zガンダム
- Z-MSV
- 機動戦士ガンダムZZ
- 機動戦士ガンダム 逆襲のシャア
- ZZ.CCA-MSV

これまで展開されてきたガンダム［　］の映像作品やMSV［　］した企画を内包する形で構成されるのがM-MSVの特徴といえる。そのため対象となる作品も7作品と多い。（当時の）最後発のMSV企画らしい内容といえるだろう

### 『M-MSV』とほぼ同時期に展開された『0083』との関係性は!?

『M-MSV』では「それまで情報統制のために発表されていなかった、法律が変わり発表された機体」という設定により「機動戦士ガンダム　機動戦士Zガンダム　機動戦士ガンダムZZ、機動戦士ガンダム　逆襲のシャア　の世界観および、それらの作品の間で展開された関連企画の機体もラインナップに含まれている。

「歴史の闇に消えた機体」という点では、機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY における、GPシリーズの設定が想起される。しかし M-MSV の掲載誌「SD CLUB」の休刊は91年2月で「0083」のリリースは91年5月から92年9月であり、実際の関連性は薄いと考えるべきだろう。

GPシリーズの記録抹消という結末は、その後の世界を描いた 機動戦士Zガンダム が先に制作されていたため、設定的整合性を合わせるための手段であった。一方で、フィルムという「正史」に登場しない M-MSV、の機体については、そこまで気を使う必要がなかった、という部分もあるだろう　その頃は今ほど「カンダム史」的な考えが厳格ではなく 時代に求められていた姿でもあったといえる。

### ラインナップの拡充を図り時代の要請に応えた企画

『M・MSV』とは「ミッシングモビルスーツバリエーションの略で、メカデザイナーの大河原邦男が描き起こしたデザインイラストを中心とした企画だ　モビルスーツコレクション 大河原邦男MS最新設定集」の表題で、90年代はじめにバンダイ　当時　が発行したムック SD CLUB」誌上にて、1990年1月～7月にかけて発表された一連の機体群である

この企画の主眼は、モビルスーツというキャラクターのラインナップの拡充にあった　また、この企画が「SDガンダム」を中心に扱う「SD CLUB」で掲載されていた点も、当時のガンダムシーンを反映していた　当時『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』と『機動戦士ガンダムF91』の間の時期で　OVA作品も展開中、ガンダム人気は、ある意味落ち着いており、集行展開の SDガンダム」がガンダム人気を支えていた時代でもある　その主力商品の一つにガシャポンにおけるスペンサー書店　通信入形やカードダスの存在があった　そしてガシャる　SDガンダム」は好きなラインとなり、

## プロトタイプのプロトタイプ？ ザクIとプロトタイプザクの関係性

M-MSVのラインナップには、「プロトタイプ（試作型）」を冠した機体が少なくない。その中にはプロトタイプザクもいるが、そもそも「ザクの試作型は旧ザクことザクIでは？」と発売当時は満足するファンもいた。ただ、開発当初のプロトタイプザクは「ザク」という名もなく、ザクIが制式採用されたことで後天的に「ザクの試作型」として名前が付けられたと考えれば間違は……ないか

MS-05
ザクI

MS-04
プロトタイプザク

## M-MSVが展開された SDクラブ CLUB とは!?

88年5月からバンダイ（メディア事業部出版課）より発行されたアンソロジーコミック集。創刊当初は SDクラブ（1号～7号まで）で、8号から最終号の20号までは SD CLUB の英字表記。カラーページでは「SD大図鑑」、「プラモクラブ」、「モビルスーツコレクション大河原邦男MS最新設定集」などが掲載され、モノクロページでは ダブルゼータくんここにあり（こいでたく）や「機動戦ガンダムF90 （神田正宏）といったガンダム漫画以外に、「からくり剣豪伝ムサシロード（穴久保幸作）などのコミカライズ作品も掲載されていた。

◆ SDクラブ 第1号 1988年の5月バンダイより発売！ タイトルに「SD」と冠しているだけあって 当初はSDガンダムを中心に構成されていたが、「大河原邦男コレクション」などを掲載されるようになる頃には全20号が刊行された

## アレックスは4号機なのか!? ガンダム4号機事件の真相

RX-78-4
ガンダム4号機 G04

RX-78NT-1
ガンダムNT-1 アレックス

SD CLUB」が展開される前の88年、ガンダム作品初のOVA 機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争がリリースされていた 作品の主役メカであるガンダムNT-1アレックスは、ニュータイプ専用機であり 劇中設定でも「アムロに届けられるはずだったガンダム」という位置づけだ 加えて設定画の肩部分のナンバリング「4」の数字にファンは色めきたった。

なぜか？ それは、ガンダムの製造数に起因する。先のMSVでも触れられていた「ガンダムは全部で8機制造され2号機にアムロは搭乗した」という文言である（大正は、みのり書房の 宇宙開ける戦士達 GUNDAM CENTURY で書かれた文字設定）。この時点でガンダムは3号機（G-3ガンダム までが世に出ていたため 誰もが「今度のOVAに出るガンダムは4号機らしいぞ」と噂していた そして M-MSVでガンダム4号機が発表されると「どちらが真の4号機か」論争も起きたが、しばらくするとガンダムNT-1アレックスは別系統（オーガスタ系）の機体として認知されるようになった

たなモビルスーツ キャラクター の積極を増やすこと が重要課題だった つまり、それ の新たなラインナップに説得力を持たせるために、リアルサイズの設定が必要ということなのだ そうした背景から生み出されたのが、本来は秘匿されていた 情報公開法の改正によって 公開された という設定だ これにより、年齢幸から遡りの 偉 歌木オ・ジオン戦争まで、様々な年代のバリエーションモデルを生み出すことができ、まさにアイアの勝利といえる その裏側は、元がより低年齢層向け企画であったため、「何でもアリ のカオス状態なこと ラインナップにも当時の状況が表れている

原初の「MSV」と比較すると、かなりデラティブでバリエーションモデルの選択よりプロトタイプ や「量産型」が多い 傾向だ これはある意味、人気機種の「焼き直し」でかつ「子供っぽく も映るもちろん、それが時代の要請なのは当然で、結果的にその後のゲームや、機動戦士ガンダムUC」にも登場したことは忘れるべきではないだろう 現在のガンダム史から評価すると、さらにモビルスーツの可能性を広げた存在ともいえるのだ

MS-04
# プロトタイプザク

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 17.5m |
| 本体重量 | 57.4t |
| 全備重量 | 72.5t |
| ジェネレーター出力 | 953kW |
| スラスター推力 | 43,000kg |
| センサー有効半径 | 2,950m |
| 装甲材質 | 超硬スチール合金 |
| 武装 | 100mmマシンガン |

100mmマシンガン
サク マシンガン同様にドラムマガジンを採用しているが、口径は120mmではなく、100mmと小さい

## 新型熱核反応炉を搭載したザクの原型機

宇宙世紀0073年、ジオン公国軍は、核融合誘導兵器を無効とするミノフスキー粒子下でも有効な新型機動兵器の開発に着手する。軍部の要求に対して開発を手掛けるジオニック社は、ZI・XA3クラブマンを作り上げた。これが後にモビルスーツ（以下MS）と呼ばれる兵器の始祖となった。その後、ZI・XA3からMS-01へと型式番号を改め、さらなる改良が加えられることとなった。当初は各自上、宇宙作業機械とされていたが、兵器使用を想定した開発を重ね、数々の問題点の克服を目指したのがMS-04プロトタイプザクである。前身にあたるMS-03では、機体の重量増による機動性、運動性の低下が問題視されていた。

これに対して本機では、コクピット脱出システムの廃止で軽量化を進めていた。MS-03試作3号機をベースにしつつも、機体のモノコック構造化や新型のミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉ZAS・X7を搭載することで対応している。武装面においても口径100ミリのマシンガン（連射銃）が用意されていたが、威力の面が不安視されより強力な人口径の火器類、ハーカの開発が検討されたという。こうした改良、改修はさらに進められ、本機をベースにしてMS-05ザクIが実用化されることになったのである。

MS-06R-3S

# 高機動型ザクII

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 19.0m |
| 重量 | 73.7t |
| ジェネレーター出力 | 1,390kW |
| スラスター推力 | 56,600kg |
| センサー有効半径 | 6,200m |
| 装甲材質 | 超硬スチール合金 |
| 武装 | 50mmバルカン砲×2<br>ヒート剣<br>ビーム・ライフル |

ビーム・ライフル

MS-14ゲルググ用・ビーム・ライフルと形状は似ているが全体的に小型な印象を受ける

## MS-14開発の礎となった高機動型ザク

一年戦争初頭、ジオン公国軍の度重なる敗戦を支えたMS（モビルスーツ）ザクIIではあったが、地球連邦軍もMSを開発、戦線へ投入してくるようになると事態は一変することになる。とある第13独立部隊、ホワイトハーツ隊で知られる、RX-78ガンダム（試作1号機）の実用化は、ジオン公国軍を大いに動揺させ、RX-78に対抗しうる新型機、次期主力機開発を促したのは、当然の結果といえた。

こうした経緯の中で開発されたのがMS-06R-3S高機動型ザクIIだ。「R」形式番号からもわかるように、ハイパー専用機のMS-06R高機動型ザクIIの系列機だ。中でもR2型と呼ばれるタイプをベースに、MS-14アクト・ザクの開発に用いられている、新型の高出力ジェネレーターを搭載し、ビーム兵器の運用を可能としている。

試験運用テストパイロットはトマス・マイヤー事務官では、連邦軍と連邦に戦果も挙げたという本機だが、新型機開発が優先されたため量産化には至っていない。本機は機構試作用の機体であるので当然の結果だろう。ただ、本機で得られた運用データなどは、MS-14ゲルググの設計開発に活用されたという。また、本機は別名とってゲルググ先行試作型、とも呼ばれている。

MSM-03-1
# プロトタイプゴッグ

| | |
|---|---|
| 全高 | 17.5m |
| 本体重量 | 58.4t |
| 全備重量 | 79.6t |
| ジェネレーター出力 | 2,690kW |
| スラスター推力 | 4,300kg |
| センサー有効半径 | 3,200m |
| 装甲材質 | チタン・セラミック複合材 |
| 武装 | 拡散メガ粒子砲×2<br>ハンド魚雷ポッド×2 |

ハンド魚雷ポッド

前腕部に装着する外付け式の魚雷ポッド。MSM-03コックピットでは内蔵式となっている

## 初の本格的水陸両用機 ゴッグの開発試作機

地球侵攻作戦を展開するジオン公国軍にとって、水陸両用モビルスーツ（以下MS）の開発は急務といえた。ここで軍部は陸戦用のMS-09ドムの開発で定評のあるツィマット社に対し、水陸両用MSの開発を命じた。そうした経緯で開発されたのがMSM-03-1プロトタイプゴッグだ。航空母艦用機のMSM-03ゴッグとの最大の違いは、腕部形状だろう。これは、本機の初期試験がスペースコロニーで行われていたことに起因している。実際に運用する地球、リフォルニアベース（での試験を行った際、通常MSと同様の構造をした純部では、抵抗の増大により長距離航行の際、支障をきたすことが判明した。そのため、MSM-03では腕部の構造が改められ、伸縮機構を備えた多重関節式となっている。この影響から、本体の火力を補うために開発されていた腕部に装着する魚雷ポットの採用は中止となり、内蔵式に変更されている。

また、本機においてMSサイズでは初搭載された核融合炉は、機体が運用される場所にある水（海水）を冷却用触媒として利用するため、水陸両用MSとしての効果は大きい。この方式は使用環境に対する依存度は高いが、ジオン公国軍の思惑が叶う瞬間なのかは疑いようがないだろう。

MSM-02

# 水中実験機

| | |
|---|---|
| 全高 | 17.7m |
| 本体重量 | 58.3t |
| 全備重量 | 93.4t |
| ジェネレーター出力 | 1,370kW |
| スラスター推力 | 61,400kg |
| センサー有効半径 | 3,150m |

| | |
|---|---|
| 装甲材質 | チタン・セラミック複合材 |
| 武装 | 胸部バルカン砲<br>収納式70mm<br>バルカン砲×2<br>6連発ミサイル・<br>ランチャー×4<br>対艦・対空ミサイル・<br>ランチャー×4 |

## ザク・マリンタイプを発展させた水陸両用機

ニオン公国のツィマット社が開発した、水中戦用MSで、しつはMSM03ゴトルタイプゴッグと同時期に開発されていた試作機でもある先行量産されていたMS・06MSM-01「ザク・マリンタイプ」をベースに開発され、ハイドロ・ジェット推進による水中航行能力が強化されたいっぽうで、陸上での要求を満たせずMSM-07「ズゴック」が採用されることとなった。

収納式70mm
バルカン砲

対艦・対空
ミサイル・ランチャー

RX-77-1A

# ガンキャノンA

| | |
|---|---|
| 全高 | 17.5m |
| 本体重量 | 51.0t |
| 全備重量 | 72.0t |
| ジェネレーター出力 | 1,380kW |
| スラスター推力 | 51,800kg |
| センサー有効半径 | 6,000m |

| | |
|---|---|
| 装甲材質 | ルナ・チタニウム合金 |
| 武装 | 60mmバルカン砲×2<br>キャノン砲×2<br>ビーム・ライフル<br>3連ミサイル・ポッド |

## 装甲と機動力のバランスを採ったRX-77のバリエーション

RX-77「ガンキャノン」の試作段階のモデルの1つで、RX-77-1の改良型と考えられている。元々RX-77は、近接戦闘用の装備は持たず、重厚な装甲で防御する中距離支援機だったが、それらしたコンセプトを実践した機体といえ、機体各部、特に胸部などは増加装甲により重装甲化されている。こうしたぶん、本体の機動力を可能な限り落とさないようギリギリのバランスを探っていたことが窺える。腰部には3連ミサイル・ポッドを装備するなど、新武装の運用テストも兼ねていたようだ。

メガ・ビーム・ランチャー
本機の専用装備であり、展開サイトアーマー、マウント元エネルギーパックから成る本体とチューブを接続する形で使用する。

RX-78-4
## ガンダム4号機（G04）

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.0m |
| 本体重量 | 42.6t |
| 全備重量 | 80.2t、86.5t（メガ・ビーム・ランチャー装備時） |
| ジェネレーター出力 | 1,550kW |
| スラスター推力 | 70,500kg |
| センサー有効半径 | 6,190m |
| 装甲素材 | ルナ・チタニウム合金 |
| 武装 | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ハンド・ビーム・ガン<br>ハイパー・ビーム・ライフル<br>ハイパー・バズーカ<br>メガ・ビーム・ランチャー |
| 備考 | シールド装備 |

### 大火力のビーム兵器を扱うガンダムタイプ

地球連邦軍が開発した、RX-78の型式番号で知られるガンダムは、合計8機が製造され、1号～3号がファーストロット、4号～8号がセカンドロットと呼ばれている。RX-78-4ガンダム4号機は、セカンドロットの4号機を宇宙戦仕様に改装した機体である。ただ、型式番号末尾の「-4」は機体の名称ではなく、4番目の仕様を表している。本来ならばセカンドロットと呼ばれる機体は、いずれも上方量産機であるRGM-79ジムの母体（ベース）となるはずであったが、来るべき宇宙への反攻作戦を電撃的に行なうために、本機は宇宙戦用の機体へと改修されることとなった。

上半身各所に高出力のジェネレーターを搭載による高火力のビーム兵器の運用と、それに伴う冷却システムの強化であった。そのため、本機ではコア・ブロック・システムは廃され、それにより発生した余剰スペースを関連するシステムに転用している。上半身のメガ・ビーム・ランチャーは、全長12メートルという巨大なもので、艦隊単位の敵に対応可能という驚異的な性能を誇った。

完成した機体は、第16独立戦隊の「ホワイトベース」に配備され、アムロ・レイ戦前に戦闘で大破、ただちに修復や、重事に改修されたと記録もあり、その詳細は右頁。

**ハイパー・ビーム・ライフル**

RX-78-4ガンダム4号機
RX-78-5ガンダム5号機
の共通装備。通常タイプよりも高出力の携行式ビーム兵器である

RX-78-5

# ガンダム5号機（G05）

| | | |
|---|---|---|
| 頭頂高 | ⇒ | 18.0m |
| 全備重量 | ⇒ | 42.9t |
| 本体重量 | ⇒ | 80.5t |
| ジェネレーター出力 | ⇒ | 1,480kW |
| スラスター推力 | ⇒ | 70,500kg |
| センサー有効半径 | ⇒ | 6,190m |
| 装甲材質 | ⇒ | ルナ・チタニウム合金 |
| 武装 | ⇒ | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>バント・ビーム・ガン<br>ハイパー・ビーム・ライフル<br>ハイパー・バズーカ<br>ジャイアント・ガトリング |
| 特殊装備 | ⇒ | シールド装備 |

## ジャイアント・ガトリングによる強力な弾幕で僚機を支援

前項でも紹介しているRX-78-4ガンダム4号機同様に、地球連邦軍司令本部のあるジャブローにて、量産仕様に改修されたのがRX-78-5ガンダム5号機である。5号機の仕様を施した本機だが、RX-78-4と共通する部分も多い。

ジェネレーターの搭載、給排気システムの強化をはじめ、機動性を目指したマグネット・コーティング・スラスターとフロスペラントタンクを一体化したコンポントタンク・ユニットの採用などほとんど同じといって過言ではない。通常型ビーム・ライフルと比して、40%も出力のハイパー・ビーム・ライフルも共通装備の1つである。

ただ、一点異なるのは口径90ミリの弾丸を毎秒50発射撃可能なジャイアント・ガトリングだ。この実体弾兵器は、量産機といえるRX-78-3の十兵衛・メガ・ビーム・ランチャーの低い連射性を補うための装備といえる強力な弾幕を張り、敵機の接近を許さない、いわば僚機の援護が目的といえるだろう。初の実戦参加では、RX-78-1と同火力のメガ・ビーム・ランチャーを運用する案もあったという。

RX-78-1と同じ部隊に配備されたRX-78-5は、ハヤシ・ク戦に参加したとされるが、詳細な記録は不明である。

ビーム・ライフル

RX-78-6
# ガンダム6号機
マドロック

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.0m |
| 本体重量 | 47.3t |
| 全備重量 | 84.4t |
| ジェネレーター出力 | 1,480kW |
| スラスター推力 | 70,500kg |
| センサー有効半径 | 5,900m |
| 装甲材質 | ルナ・チタニウム合金 |
| 武装 | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>300mmキャノン砲×2<br>グレネード・ランチャー×2<br>ハイパー・バズーカ<br>ハイパー・ハンマー |
| 備考 | シールド装備 |

## 固定武装強化を狙ったキャノンタイフのガンダム

型式番号RX-78を冠し、セカンドロットと呼ばれるガンダム系列機は、いずれもRGM-79ジムのテストベッドになる機体であった。しかし、その多くに仕様の変更が施され本来とは異なる道を歩んでいる。

RX-78-6ガンダム6号機もそうした機体の1機である。本機の場合、RX-78-4ガンダム4号機やRX-78-5ガンダム5号機のような宇宙戦仕様への改修ではなく、固定武装の強化が主眼だ。先に実戦に投入されていたRX-78-2ガンダムのデータを採り入れつつ、高威力ながらエネルギー関連に対する課題を抱えていたビーム・ライフルを補うことが要求された。当然、携行するビーム・ライフル自体のエネルギーCAPの改善も含まれている。

これに対し、本機は本体の固定武装としてRX-78-300ミリキャノン砲（一説にはビーム兵器とも）と、腕部にグレネード・ランチャーを装備することで解決を図ろうとしていた。このキャノン砲はランドセルと一体式で、機動性の低下を避けるため、脚部にはビーム・サーベルのホルダーを備えたスラスターユニットを装備。こうした新機軸の機能実現のためか、開発は長期化し実戦には参加しなかったとされる。ただ、一部では未調整状態でジオン公国軍と交戦し大破……という説もあり、不明な点も多い。

シールド

RX-78-2ガンダムとは異なる形状の専用シールドを携行する

RX-78-7

# ガンダム7号機

| | | |
|---|---|---|
| 全高 | ⇔ | 18.3m |
| 本体重量 | ⇔ | 39.2t |
| 全備重量 | ⇔ | 78.7t |
| ジェネレーター出力 | ⇔ | 1,670kW |
| スラスター推力 | ⇔ | 70,800kg |
| センサー有効半径 | ⇔ | 6,130m |
| 装甲材質 | ⇔ | ルナ・チタニウム合金 |
| 武装 | ⇔ | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>グレネード・ランチャー×2<br>ハイパー・バズーカ |
| 備考 | ⇔ | シールド装備 |

## 各所にマウント・ラッチを装備するフルアーマーガンダムの素体機

RX-78-7ガンダム7号機もセントロットと呼ばれる機体の1機7号機で、RGM-79ジム開発コンペ試作機だったが、その後、仕様変更と改修が施された機体だ。その特徴は、当初から各種オプション増加装甲、武装などの追加装備が可能なように、機体各部にはマウント・ラッチや各種インターフェイス用オプションポートを備えることだ。

これは、1年戦争末期に地球連邦軍が実施したRX-78ガンダムの強化プランFSWS計画（別名フルアーマー・オペレーション）を推進めた形といえ、ファーストアーマーと呼ばれる増加装甲、セカンドアーマーと呼ばれる追加装甲と武装類を一体化したユニットなどが用意された。こうした装備の追加に対応するため本体にマグネット・コーティングを施し、コクピットは試作型のマルチモニターが導入されている。

実際には設計段階で終戦を迎えた形といえ、ファーストアーマーと呼ばれる増加装甲、セカンドアーマーと呼ばれる追加装甲と武装類を一体化したユニットなどが用意された。こうした装備の追加に対応するため本体にマグネット・コーティングを施し、コクピットは試作型のマルチモニターが導入されている。

実際には設計段階で終戦を迎えたが、開発は継続され、機体の完成は終戦後の宇宙世紀0081年のこと。記にはペーパープランのみで終戦を迎えたとされるが、その後本機はオデッサ公国軍残党狩りの任務に就き、かつてRX-78-4ガンダム1号機とRX-78-5ガンダム5号機が配備された、ペガサス級サラブレッドに配備されたといわれる。

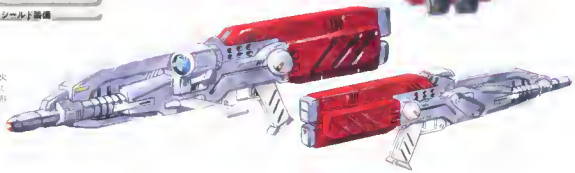
FA-78-3

# フルアーマー ガンダム7号機

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.3m |
| 本体重量 | 39.2t |
| 全備重量 | 88.7t |
| ジェネレーター出力 | 1,850kW |
| スラスター推力 | 78,450kg |
| センサー有効半径 | 7,210m |
| 装甲材質 | ルナ・チタニウム合金 |
| 武装 | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・スプレーガン<br>ハイパー・ビーム・ライフル<br>背部長距離ビーム・キャノン<br>ハイパー・バズーカ<br>腰部2連装<br>ビーム・スプレーガン<br>マイクロミサイル×4<br>3連装ミサイル・ポッド×2<br>4連装ミサイル・ポッド×2 |
| 備考 | シールド装備 |

**ビーム・ライフル**

フルアーマー化する
器を積るRX-78-7ガンダム7号機が
が携行するビーム・ライフルの形
状は独特なタイプとな
る。



HFA-78-3

# 重装フルアーマーガンダム7号機

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.3m |
| 本体重量 | 39.2t |
| 全備重量 | 120.8t |
| ジェネレーター出力 | 3,110kW |
| スラスター推力 | 95,450kg |
| 装甲素材 | ルナ・チタニウム合金 |

| | |
|---|---|
| 武装 | 60mmバルカン砲×2、ビーム・サーベル×2<br>ビーム・スプレーガン、ハイパー・ビーム・ライフル<br>ハイパー・バズーカ、複数2連装・ビーム・スプレーガン<br>マイクロミサイル×4、3連装ミサイル・ポッド×4<br>4連装ミサイル・ポット×2、メガ・ビーム・キャノン、キャノン砲×2 |
| 備考 | シールド装備 |

## フルアーマー・ユニットを装備したガンダム7号機の完成形

RX-78ガンダムシリーズの7番目の仕様にあたるRX-78-7ガンダム7号機には、FA-78-1フルアーマーガンダムのような増加装甲ユニットの装着が開発当初から予定されていた。それがFA-78-3フルアーマーガンダム7号機だ（フルアーマー3号機という呼称もある）。

機体各部には増加装甲と長距離用ビーム兵器やミサイルなどの武装類に加え、装甲内部にサブジェネレーターを搭載して出力を補い、テールスタビライザーによる機動性向上を図ったために、これらはファーストアーマーとも呼ばれる。また長大なメガ・ビーム・キャノンをはじめとして各種ミサイルやキャノン砲を搭載した武装キャリアと、さらなる増加装甲を一体化したユニット、セカンドアーマーの装備も可能だ。もちろん機動性低下を防ぐためスラスターなども増強されている。

使用法としては、ビーム兵器による長距離射撃の後、各スラスターの大推力を活かして目標に接近し、持てる火力で撃破するというもので、強襲突撃機といったところだろう。

ファーストアーマー、セカンドアーマーとも被弾時などは、機体からパージが可能だった。当時としては、本機は破格な性能を有した怪物級の機体といって過言ではないだろう。

RGM-79F

# 陸戦用ジム

| | |
|---|---|
| 全　高 | 18.0m |
| 本体重量 | 48.2t |
| 全備重量 | 61.5t |
| ジェネレーター出力 | 1,250kW |
| スラスター推力 | 53,800kg |
| センサー有効半径 | 6,100m |
| 装甲材質 | チタン・セラミック複合材 |
| 武　装 | 60mmバルカン砲<br>ビーム・サーベル<br>ビーム・スプレーガン<br>レール・キャノン |

レール・キャノン

ビーム・スプレーガン

右腕部
スモールシールド

## 被弾率が高い部分の装甲を増強 欧州仕様の陸戦機

RGM-79F陸戦用ジムは、一年戦争後期のヨーロッパ戦線に投入された地球連邦軍が開発した陸戦用モビルスーツ（MS）である。市街戦や森林戦においてMSは、建造物との関係から比較的に被弾する傾向が強かった。こうした事態打開のため、軍部では被弾率の高い上半身や頭部を防御するため共用の増強を図っている。この改修指示によって機体重量は増加したものの、スラスターを6基備えた専用ランドセルで重量増による機動性の低下に対応している。

また本機のハードポイントは、RGM-79Cの後期生産型であり、東南アジア戦線などに配備されていた先行量産型のRGM-79（G）陸戦型ジム（以下、同系統の機体である機体名称）が使われているため比較的入手しやすく、機体系統一の関連性はない。

武装面はビーム・スプレーガンを標準装備とするが、RGM-79とは別タイプのもので、大気圏内においてビームの威力の減衰に対応するため収束率を高めた仕様である。さらに、ビームサーベルではなく、レール・キャノンを装備しているのも特徴的だ。この装備は名前の通り、電磁投射砲であり、実弾兵器で、作業を利用した水素爆発弾頭を使用した水素爆発弾頭を使用した水素爆発弾頭を使

RGM-79F

# デザート・ジム

| | | |
|---|---|---|
| 全高 | ： | 18.0m |
| 本体重量 | ： | 44.7t |
| 全備重量 | ： | 59.5t |
| ジェネレーター出力 | ： | 1,250kW |
| スラスター推力 | ： | 57,800kg |
| センサー有効半径 | ： | 6,100m |
| 装甲材質 | ： | チタン・セラミック複合材 |
| 武装 | ： | ビーム・サーベル<br>専用ビーム・スプレーガン<br>8連装ミサイル・ポッド付<br>レール・キャノン<br>ハイパー・バズーカ |

8連装ミサイル・ポッド付
レール・キャノン

専用ビーム・
スプレーガン

←初し型武装群なから陸戦用ジム、デザート・ジムとともに使用機体に応じて専用装備が用意されている

## 陸戦用ジムを改修し砂漠戦に対応させた局地戦機

一年戦争も後期になると、地球連邦軍でもモビル・スーツ（MS）配備に対する要望は日増しに高まっていた。それはヨーロッパ戦線だけでなく、アフリカや中近東といった戦線でも陸戦用MSの配備要望は高かったとされる。そこで軍部ではRGM-79F陸戦用ジムの開発と同時期に、同機を砂漠戦用（トロピカル仕様）に改修した局地戦用MSの開発にも着手した。それがRGM-79Fデザート・ジムである。

型式番号が他の陸戦機と同じというのは不可解な点ではあるものの、本機の場合、局地戦用機の仕様変更機であるため、書類上は同じ機種、すなわち陸戦用ジムの砂漠型として扱われていたのだろう。実際の運用は完全に別であったと考えられ、製造番号等で管理されていたのかもしれない。

本機の改修点は、装甲の増強と防塵処理である。装甲強化はRGM-79F陸戦用ジムと同じだが、こちらは爆発反応装甲リアクティブ・アーマー着用時に装甲内の圧力を調整することで、被弾時に発生する衝撃を緩和する特殊装甲を各部に採用している。また、砂漠での活動や機関の吸排気口などにはフィルターも施されている。武装は専用のビーム・スプレーガン、8連装ミサイル・ポッド付レール・キャノン、ハイパー・バズーカを装備している。

ビーム・ピック

RAG-79

# アクア・ジム

| | |
|---|---|
| 全高 | 18.0m |
| 本体重量 | 49.5t |
| 全備重量 | 64.3t |
| ジェネレーター出力 | 1,280kW |
| スラスター推力 | 8,950kg |
| センサー有効半径 | 4,300m |
| 装甲材質 | チタン・セラミック複合材 |
| 武装 | ビーム・ピック×4<br>ハンド・アンカー<br>ミサイルランチャー・ガン<br>魚雷ポッド×2<br>マイクロミサイル×8<br>ハープーン・ガン |

ミサイルランチャー・ガン

両側面部に5連装のミサイル発射筒・中央に対艦大型魚雷を備えている水中戦用の武装上のビーム・ピックは水中戦用の近接格闘兵器

## ジオン公国軍の水陸両用機に対応するための急造機

ジオン公国軍が地球侵攻に用いた水陸両用モビルスーツに対抗すべく、地球連邦軍でも水陸両用機の開発に着手する

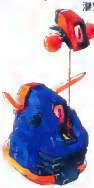
1号機であるRGM-79ジムを母体に改修を加え、水中戦能力を付与したのがRAG-79アクア・ジムだ

水中におけるメインの推進力は、両脚部に内蔵されたハイドロジェット・ユニットである。頭部形状は、潜水用の水中マスクを付けたような独特の形をしている

武装面も水中戦に特化した装備となっており、対艦大型魚雷を発射可能な複合射撃兵器のミサイルランチャー・ガンを携行する。これ以外に1型の銛、銛自体に爆薬が装填されていて着弾と同時に炸裂する撃ち出す射突式ハープーン・ガンを装備する例も見られた。中でもユニークな装備がビーム・ピックだ。これは格闘戦用装備の柄で、水中ではビーム・サーベルなどは効果が半減してしまうので、それを解消するために柄の先端部にビームを収束、敵の装甲に接触時のみビームが形成されるという仕組みだ

もかく、敵対象にかなり接近する必要があるため、現場からの評価はあまりよくなかったという

また、焼ガと機体という印象ではあるが、戦後も地球連邦軍において、なりの量が造られたようだ




RAG-79-G1

# 水中型ガンダム

| | |
|---|---|
| 全　高 | 18.3m |
| 本体重量 | 47.7t |
| 全備重量 | 58.5t |
| ジェネレーター出力 | 1,330kW |
| スラスター推力 | 9,670kg |
| センサー有効半径 | 4,600m |
| 装甲材質 | チタン・セラミック複合材 |
| 武　装 | ビーム・ピック×2<br>ハンド・アンカー<br>水中偏向ビーム・ライフル<br>魚雷ポッド×2<br>炸裂式ハープーン・ガン |

## エースパイロット用に能力向上されたアクア・シム

水中戦用機として、定評の高かったRAG-79アクア・シムだが、ジオン公国軍のMSM-03ゴッグやMSM-07ズゴックなどの水陸両用機相手には、またまだ苦戦を強いられる場面も少なくなく、現場からの手直しも多いものではなかった。

それら満や不備を解消すべく、エース専用機として改修されたのがRAG-79-G 1水中型ガンダムだ機体名に「ガンダム」とあるが、型式番号からわかるように、本機はRAG-79のカスタムタイプである基本性能の強化に加え武装強化も一部刷新され、水中用にビーム兵器を高め減衰を抑えた、水中偏向ビーム・ライフルの装備が最大の特徴となる。

これには水中移動時に抵抗を減らすカバーが設けられ、使用時にはカバーを外す仕組みだ。また、低評価だった近接戦闘用のビーム・ピックの装備数は減じられている。

そもそも地球連邦軍にとって、戦況が有利になって以降、海上戦闘は戦略上あまり重要ではなくなっていたため、敵の本拠地は不明だがこうした背景から、水陸両用機開発が後手に回ったのは、ある意味仕方のないことだろう。しかし、新型の通信技術などは重要であり、本機のような改修された機体は、実戦でも戦果を挙げることができたという。

RX-81ST

## RX-81スタンダード

（ジーライン・スタンダード）

| | |
|---|---|
| 全高 | 19.2m |
| 本体重量 | 37t |
| 全備重量 | 72t |
| ジェネレーター出力 | 1,580kW |
| スラスター推力 | 71,800kg |
| センサー有効半径 | 8,000m |
| 装甲材質 | ルナチタニウム合金 |

バルカン砲×2、
ビーム・サーベル
ショート・ビーム・ライフル
【オプション兵装】
ミサイル・ランチャー×2
ガトリング・スマッシャー×2
アサルト・キャノン×2
シールド装備

### カンダムの完全量産を目指した試作機

RX-81ST RX-81スタンダートは、RX-78ガンダムの完全量産化を目指し開発された試作機だ。しかし実現までには紆余曲折があり、戦後、計画は一度白紙化されている。そこから後、機体の仕様を改め「ジーライン」の名称を与え復活したという経緯がある。本機の期待の高さが窺い知れる。本機の基本フレームに戦況を打開に比して差異物を機装するシステムも、開発がA-78ブルゲーマーンに携わっていた技術だ。ただ、実機の戦果や記録等の詳細は不明。

RX-81LA

## RX-81ライトアーマー

（ジーライン・ライトアーマー）

| | |
|---|---|
| 全高 | 19.2m |
| 本体重量 | 36t |
| 全備重量 | 66.5t |
| ジェネレーター出力 | 1,580kW |
| スラスター推力 | 71,800kg |
| センサー有効半径 | 11,000m |
| 装甲材質 | ルナチタニウム合金 |

バルカン砲×2、
ビーム・サーベル
狙撃用ヘビー・ライフル
【オプション兵装】
ミサイル・ランチャー×2
ガトリング・スマッシャー×2
アサルト・キャノン×2
シールド装備

### 一撃離脱戦法に特化した高機動仕様のRX-81

RX-81LA RX-81ライトアーマーは、先に紹介したRX-81STと同様、RX-81の基本フレームに高機動タイプの装備を換装した機体だ。一撃離脱戦法を主眼とするが、その分、機体は軽量化を図るために装着する装甲を制限しており、通常機体よりも防御面は著しく低下している。

元用性の高いマルチロール機を目指していたRX-81だが、詳細な記録はない。一説には実戦に投入されたとする記録もあるが、不明のシステムの効果のほとんどが不明である。

FA-007GIII

# フルアーマーガンダムMk-Ⅲ

| | | |
|---|---|---|
| 頭頂高 | → | 19.5m |
| 本体重量 | → | 47.2t |
| 全備重量 | → | 62.1t |
| ミノフスキー動力 | → | 3,040kW |
| スラスター推力 | → | 141,200kg |
| センサー有効半径 | → | 11,500m |
| 固有特質 | → | ガンダリウム合金 |
| 武装 | → | 可動ビーム・キャノン搭載ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>グレネード・ランチャー×2<br>可動ハイパー・ビーム・キャノン×2<br>シールド・ビーム・サーベル×2<br>シールド・キャノン×2 |
| 備考 | → | シールド装備 |

ビーム・ライフル

## オプション装備により ガンダムMk-Ⅲを高火力化

エゥーゴがティターンズから強奪したRX-178ガンダムMk-Ⅱから得た技術データを発展させ開発したMSF-007ガンダムMk-Ⅲ。宇宙世紀0087年当時のモビルスーツ（MS）の中でも高い性能を誇るが、この機体にはさらなる強化プランが用意されていた。

それが、FA-007GIIIフルアーマーガンダムMk-Ⅲである。基本的なコンセプトは、MSF-007の性能を落とすことなく、機動性の強化や火力増強を図ることだ。そのため、機体各部の増加装甲類も、スラスターを搭載しプロペラントタンクも内蔵するなど、防御機能を付加した推進ユニットを装備している。武装面では、両肩部にビーム・キャノンを装備、こうした火力の増強により、エネルギー供給と機体のジェネレーター出力低下が懸念されたか、問題の解消のため、ジェネレーターを内蔵したシールドを携行する形で解決を図ることとなった。実際、これはほとんどの効果が期待できるかは不明だが、データ上の問題はなかったようである。

ちなみに、結局のところ本機は、MSZ-006Zガンダムに代表される第3世代MSの台頭により一気に陳腐化が加速してしまったため、バランス調整・実現することはなかった。

FA-100S

# フルアーマー百式改

| | | |
|---|---|---|
| 頭頂高 | ⇨ | 19.2m |
| 本体重量 | ⇨ | 39.2t |
| 全備重量 | ⇨ | 79.8t |
| ジェネレーター出力 | ⇨ | 2,015kW |
| スラスター推力 | ⇨ | 113,000kg |
| センサー有効半径 | ⇨ | 12,500m |
| 装甲素材 | ⇨ | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ⇨ | ビーム・バルサーガン×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>2連装ミサイル・ポッド<br>メカ粒子砲<br>ビーム・キャノン×2<br>作業ネット<br>ロング・メガ・バスター |

## 武装と防御の強化を図った百式改の強化プラン

ベース専用機として開発されたMSN-00100百式を再設計し、推力強化と軽量化を図った試S R100S百式改には、さらなる強化プランがあった。このFA-100Sフルアーマー百式改は、アナハイム・エレクトロニクス社が開発したもので、その内容は、防御の向上と武装強化であり、一年戦争時の地球連邦軍のFSWS計画（フルアーマーオペレーション）を彷彿とさせるこうした重装備機の宿命として、各種装備による重量増で機動性や運動性は低下。しかし本機では、この弱点を補う施策として、胸部上面のム甲部にリフレクター・パネルを設置し、ハイフィールドの展開を可能とコクピットの防御力向上を図った。武装面もビーム兵器を主に、ビーム・ライフル・背部に装備するビーム・キャノン、胸部のメカ粒子砲、腰部と脚部の2連装ミサイル・ポッドなどに豊富だ。さらに大口径のビームを携行する。前腕部の近接戦闘用の仕掛ボルトは、接敵時に散弾のように撒弾を浴びせる実体弾兵器だが、威力は低く効果的な使用には熟練を要する特殊装備だ。

本機は、可変機をはじめとした第二世代モビルスーツが主流となった為、実証実験用の試作機の製造のみに留まったようだ。

## メイト・イン・カラバによる百式改の陸戦仕様機

カラバが運用するRGM-79RジムⅡ やMSA-003ネモだけでは、ティターンズが繰り出す新型機に対抗するのは次第に難しくなっていた。そこで協力関係にあるエゥーゴから各種ゲーの提供を受けて開発されたのがMSK-100S陸戦用百式改である。こうしたデータの提供で開発ベースは短縮され、短期間の試作機完成に漕ぎ着けているMSR-100S百式改を陸戦仕様にすべく宇宙用装備を除外し、機体各部にシーリングの強化や防塵処理を施している。これにより短時間であれば水中戦も可能だったという。

背部のバックパックも専用設計のものが用意され、この新規バックパックと脚部に増設したスラスターにより、自由落下時による戦闘機動やバリング走行時でも十分な機動力を発揮できた。本機は、極めて高い地形適応能力を獲得したといえる。

武装面では、ビーム・ライフルか主兵装だが、銃身下部にレールガンを備えたタイプを揃う。オプションとして3連装ミサイル・ポッドと中距離ビーム・キャノンをハックパックに装備可能。また防御用にマイクロミサイル内蔵のシールドを携行する。

機体の配色はグリーン系であった。機体性能そのものは高い本機だが、その製造数や戦果といった詳細な記録は不明である。

MRX-007

# プロトタイプサイコ・ガンダム

| | |
|---|---|
| 全高 | 19.3m |
| 本体重量 | 77.4t |
| 全備重量 | 130.9t |
| ジェネレーター出力 | 3,700kW |
| スラスター推力 | 81,100kg |
| センサー有効半径 | 11,300m |
| 耐弾装甲 | チタン合金セラミック複合材 |
| 武装 | 拡散メガ粒子砲<br>ビーム砲×2 |

## シャン系の技術も採り入れ最強のガンダムを目指したか

MRX-007サイコ・ガンダムは、RX-78ガンダムの戦技試験機として開発された、RX-78ガンダムMk-II系列の最終発展型機である。有線式オールレンジ攻撃兵器「ファンネル」を搭載し、脳波増幅メカ搭載ヘルメットを備えるなど、ニュータイプ専用機としての性格が強い。しかし、出力は安定せず、パイロットに過剰な負担を強いるため、実戦投入は見送られた。

RX-098

# プロトタイプリック・ディアス

| | |
|---|---|
| 全高 | 19.0m |
| 本体重量 | 40.5t |
| 全備重量 | 59.7t |
| ジェネレーター出力 | 1,790kW |
| スラスター推力 | 78,500kg |
| センサー有効半径 | 11,500m |
| 耐弾装甲 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ハイパー・ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ピストル<br>クレイ・バズーカ |

## エゥーゴの主力を担ったリック・ディアスの原型機

RMS-099リック・ディアスの原型機。アナハイム・エレクトロニクス社内のジオン系技術者が中心となって開発した、鹵獲材「ガンダリウム合金」を使用し、機体重量の軽減を図った。背部のバーニア・スラスターなどは高い機動性を発揮したが、量産化にあたり改修された。

MRX-011

# 量産型サイコ・ガンダム

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 27.2m |
| 本体重量 | 83.0t |
| 全備重量 | 136.4t |
| ジェネレーター出力 | 15,280kW |
| スラスター推力 | 91,100kg |
| センサー有効半径 | 10,300m |
| 装甲素材 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ハイパー・ビーム・サーベル（ビーム・キャノン装備）×2<br>インコム・ユニット×2<br>有線ビーム砲×2<br>拡散メガ粒子砲×3<br>収納式ハイ・メガ・バスター<br>グレネート・ランチャー（榴弾砲?）×2 |

収納式ハイ・メガ・バスター通常時

インコム・ユニット

有線ビーム砲

## 巨大機から小型化を図る！ティターンズの決戦兵器

大型モビルアーマー（MA）のMRX-010サイコ・ガンダムMk-IIの小型化を図り、量産化を目指したMA。エゥーゴとの短期決戦を期したティターンズがエース・パイロット用の機体として開発された……とはいえ、オリジナルは40メートル級の可変MAで、小型化には相当な苦労が伴ったはず。装置として大型なサイコミュ・システムを廃し、インコムを導入している点や、非可変機なのもそのあれだろう。

武装面はオリジナルを踏襲しつつ、不安定になりがちなサイコミュ兵器は廃し、ビーム兵器を主体とする。こうした点も一般パイロットの搭乗を前提とした決戦兵器らしい。機体各所にはビーム・キャノンや拡散メガ粒子砲などを備え、胸部には人口仔の収納式ハイ・メガ・バスターを搭載。これはハイ・メガ・ランチャーに匹敵する威力を誇るが、射撃後は全次弾が使用不能になるという欠点もあった。

余談ではあるが、1号機はアナハイム・エレクトロニクス（AE）社の工場から強奪された、という記述も見られるが、機体の開発系統を考えるとハマーメ研究所が開発を主導していたと考える方が自然であろう。AE社に奪還を試みた可能性も考えられるが、推測の域は出ない。

MSZ-009

# プロトタイプZZガンダム

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全高 | 19.02m | スラスター推力 | 100,300kg |
| 本体重量 | 29.5t | センサー有効半径 | 15,480m |
| 全備重量 | 60.3t | 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| ジェネレーター出力 | 3,140kW | | |

## ZZガンダム実用化に向けた実証実験用の試作機

MSZ-010ZZガンダムの合体システムなどの検証用試作機だが、合体も式は異なるテストでは、試作ダブル・ビーム・ライフルが試射中に暴発、ハイ・メガ・キャノンの出力不足も判明し、十分な成果は得られなかった。合体中に爆発事故を起こしたという説もある。そのため合体方式も変更されたなお、本機にはB型もあり、こちらは搭載ジェネレーターを新型に換装し、ハイ・メガ・キャノンの使用が可能で、装備類も見直されている。詳細は不明である。

MSZ-009B

## プロトタイプZZガンダムB型 スペックのみ

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全高 | 19.02m | 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 本体重量 | 31.7t | 武装 | ハイパー・ビーム・サーベル（ダブル・キャノン装用）×2<br>ダブル・ビーム・ライフル<br>ハイ・メガ・キャノン |
| 全備重量 | 63.0t | | |
| ジェネレーター出力 | 7,200kW | | |
| スラスター推力 | 100,300kg | | |
| センサー有効半径 | 15,480m | | |

MSZ-013

# 量産型ZZガンダム

| | | | |
|---|---|---|---|
| 全高 | 18.5m | 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 本体重量 | 29.2t | 武装 | 50mmバルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、マイクロミサイル、ミサイル・ポッド×2、ハンド・グレネード×3、腕基ハイ・メガ・キャノン、基地ハイ・メガ・キャノン、ミサイル（オプション）、ビーム・キャノン（オプション） |
| 全備重量 | 53.5t | | |
| ジェネレーター出力 | 2,210kW | | |
| スラスター推力 | 97,500kg | | |
| センサー有効半径 | 11,300m | | |

## ZZガンダムの量産化を目指した試作機

第4世代モビルスーツの中でも破格の性能のMSZ-010ZZガンダムの量産化を目指したのが、MSZ-013量産型ZZガンダムだ。まず整備が複雑化する傾向にあるユニット・ブロック・システムを廃し、ハイ・メガ・キャノンは使用回数を制限した簡易型に変更し、ビーム・サーベルも小型化・搭載ジェネレーターも汎用タイプの採用を目指したが、機体の出力不足を招いたため見送られた。その結果、思うようなコスト削減には繋がらず、製造は試作の4機にとどまり開発は中止された。

RX-94

# 量産型νガンダム

| | | |
|---|---|---|
| 頭頂高 | ⇨ | 21.2m |
| 本体重量 | ⇨ | 25.4t |
| 全備重量 | ⇨ | 64.5t（フィン・ファンネル装備時）<br>56.0t（インコム装備時） |
| ジェネレーター出力 | ⇨ | 2,590kW |
| スラスター推力 | ⇨ | 87,000kg |
| センサー有効半径 | ⇨ | 19,400m |
| 装甲材質 | ⇨ | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ⇨ | 60mmバルカン砲×2<br>ビーム・サーベル<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・スプレーガン<br>ビーム・キャノン<br>ミサイル×4 |
| 備考 | ⇨ | オプションパックとしてインコム・ユニット、ファンネル・ユニット |

ビーム・スプレーガン

## エース専用機として量産化されたνガンダム

第一次ネオ・ジオン戦争において、ネオ・ジオンに対する地球連邦軍のロンド・ベル隊は、戦力面で大きな不安を抱えていた。同隊の絶対的エースパイロット、アムロ・レイ大尉の乗機であるRX-93νガンダムの配備は、間に合う目算が立った。

だが、RGZ-91リ・ガズィやRGM-89ジェガンでは、ネオ・ジオンのMSN-03ヤクト・ドーガやMSN-04サザビーといったニュータイプ専用機に対抗するには力不足だった。この状況の打開のために開発されたのがRX-94量産型νガンダムだ。開発はアナハイム・エレクトロニクス社が行い、装甲やフレームといった部材も原型機のRX-93よりランクを下げているものの、基本性能はRX-93の80%を維持したという。

本体にはサイコ・フレームを使用しているが、フィン・ファンネルなどのサイコミュ兵器以外にインコム・ユニットも用意されていた。あくまでも機の仕様は、ニュータイプ搭乗を前提としないエース専用機のため、搭乗パイロットの素養に合わせて装備の換装が可能であった。

しかしながら実際には戦闘状況が短期で終わり、想定されていたよりも早く終息したため、本機の量産化計画は白紙となり、試作機1機が完成したのみで終わった。

【 MSV後の潮流 ❷ 】

# ダブルフェイク アンダー・ザ・ガンダムが遺したもの

[illegible]サ・カ[illegible]が開設時の[illegible]90年代末[illegible]M[illegible]情報[illegible]上[illegible]世[illegible]送出された MSV 的な[illegible]ガライズ作品[illegible]一[illegible]斬鉄矢[illegible]作画[illegible]ゆう[illegible]今[illegible]はあまり知[illegible]ておでないかもある種、その個性はカタム史上でも ひ きわ異彩を放[illegible]ているともいえるでろう

RGX-D3
**Dガンダムサード**

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 19.1m |
| 本体重量 | 41.5t |
| 全備重量 | 55.5t |
| ジェネレーター出力 | 2,528kW |
| スラスター推力 | 64,296～119,412kg |
| センサー有効半径 | 14,200m |
| 装甲材質 | ガンダリウム・コンポジット |
| 武装 | 胸部バルカン砲×2<br>Cブラストナックル<br>ビーム・サーベル<br>バスターショット<br>バズーカ<br>シールドライフル |
| 備考 | シールド装備 |
| 搭乗者 | ダリー・ニエル・ガンズ |

NWS-1905TG
**Dガンダムファースト**

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.9m |
| 本体重量 | 39.2t |
| 全備重量 | 53.4t |
| ジェネレーター出力 | 1,820kW |
| スラスター推力 | 52,050～98,350kg |
| センサー有効半径 | 9,800m |
| 武装 | マグネット・アンカー<br>リヘットガン<br>ドリルカン<br>大型トリモチ弾<br>各種有線式爆雷<br>ナックルクラッシャー<br>ダミー |
| 備考 | シールド装備 |
| 搭乗者 | ダリー・ニエル・ガンズ |

NWS-1905TG-2
**Dガンダムセカンド**

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.9m |
| 本体重量 | 42.2t |
| 全備重量 | 52.8t |
| ジェネレーター出力 | 2,002kW |
| スラスター推力 | 53,580～99,510kg |
| センサー有効半径 | 11,700m |
| 装甲材質 | ガンダリウム・コンポジット（試装量産） |
| 武装 | 有線式爆雷<br>ナックルクラッシャー<br>ビーム・サーベル<br>コードネクテッドビームライフル（グレネードランチャー付）<br>バズーカ |
| 備考 | シールド装備 |
| 搭乗者 | ダリー・ニエル・ガンズ |

改修

改修

主人公（ダリー）が掲るDガンダムは　元々はガンダムに似ているだけの作業用モビルワーカーだ（個人的趣味でカンダムっぽい形に製作された）物語中、戦うたびに改修を受けて、やがて地球連邦軍が誰い上げる形で（この辺りが作品の揺かれた90年代っぽさかり）、軍用機へと転身する。コミックというメディアの特性を活かした特異なガンダムの1つといえるのかもしれない。

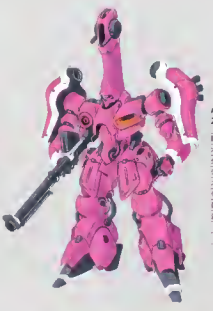
## きわめて個性的なMSV的作品

「ダブルフェイク アンダー・ザ・ガンダム」は1988年に「M　模型情報」で連載されたガンダムの世界観をベースとした漫画作品だ。「M」とは、ハンダイが発行していた自社情報雑誌その「模型情報」で、1988年7月から1994年1月まで「MJ」という名で発行されていた、ガンダムをはじめとするハンダイの関連製品の作品情報を中心に、ときおり「MSV」史を同誌抜きに語ることができないのはご存知の通り、機型やアニメ「特撮」作品の情報以外に、本作のような漫画作品や、ハンダイが玩具展開していたスパイラルゾーンの小説やコミカライズ作品も掲載されていた「ダブルフェイク アンダー・ザ・ガンダム」はそういった流れの中にあり、「MJ」の連載であるからして、「MSV的なものを想起しがちだが、ある種の独特さがある作品だ。

ガンダムの世界観、時代的には「機動戦士ガンダムZZ」と「機動戦士ガンダム　逆襲のシャア」の間の物語である　物語中には両作品との接点も描かれ、「ガンダム」の世界観の中にあることが明示されている「MSV」的な視点としては、両作

AMX-102C
**ズサ改 カスタム**

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.0m |
| 本体重量 | 22.5t |
| 全備重量 | 61.8t |
| ジェネレーター出力 | 2,250kW |
| スラスター推力 | 129,800kg |
| センサー有効半径 | 10,800m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ビーム・サーベル<br>ガン・スピア<br>改修型バックAK-90S |
| 搭乗者 | アルヴェニシカ・キースト |



AMX-003S
**ガザC改**

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.5m |
| 本体重量 | 29.2t |
| 全備重量 | 75.2t |
| ジェネレーター出力 | 2,020kW |
| スラスター推力 | 100,059kg |
| センサー有効半径 | 9,989m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ナックル・バスター<br>ビーム砲×2 |

MSN-X4
**バギ・ドーガ**

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 18.5m |
| 本体重量 | 21.7t |
| 全備重量 | 48.3t |
| ジェネレーター出力 | 3,110kW |
| センサー有効半径 | 16,400m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | 試射付ヒーム・ライフル<br>モビル・ビット×2<br>スプラン・ビット<br>(ビクセル)×8 |

AMX-011C
**ザクⅢ後期型**

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 21.0m |
| 本体重量 | 42.5t |
| 全備重量 | 69.2t |
| ジェネレーター出力 | 2,950kW |
| スラスター推力 | 212,800kg |
| センサー有効半径 | 9,850m |
| 基準材質 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | ビーム・サーベル着用<br>ビーム・キャノン×2<br>メガ・マシンガンSP5<br>ザクⅡ・バズーカ |
| 搭乗者 | エルレコ・バイエ |

RGM-89B
**ジェガン改**

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 19.5m |
| 全高 | 22.3m |
| 本体重量 | 22.2t |
| 全備重量 | 49.2t |
| ジェネレーター出力 | 2,350kW |
| スラスター推力 | 52,500kg |
| センサー有効半径 | 14,200m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |
| 武装 | バルカン・ポッド・システム<br>ビーム・サーベル<br>ビーム・ライフル<br>ニードルショットバック<br>ハンド・グレネード<br>2連装ミサイルランチャー×2<br>(シールド装備)<br>背部ロケットランチャー<br>(オプション装備) |
| 備考 | シールド装備 |
| おもな搭乗者 | ラケン・カサヤ中尉 |

「ダブルフェイク」の物語設定として、舞台となるのは第一次ネオ・ジオン戦争～第二次ネオ・ジオン戦争の間　宇宙世紀0090年のこと。作品としては「ガンダムZZ」と「逆襲のシャア」を繋ぐような位置付けとなる。そのため登場するMSも、2作品から馴染みのある機体のバリエーションモデルなどが登場した。また、作中後半になるとヤクト・ドーガなどもゲストメカとして活躍したりしている。

登場機体のバリエーションモデルが数多く登場する。

しかし、物語はかなり独特の展開だ。話の中心は、コロニー公社の下請け会社、モノトーン・マウス社で、同社はコロニー再生事業に従事していた。すなわち「ガンダム」世界のお約束である「戦争」は、物語背景でしかなく、むしろコロニーの再生という「戦争」とは正反対のことが軸である。当時は現実では冷戦が終結しつつあり、時代性も垣間見える。

さらに主役メカのDガンダムはオリジナルメカで、「ガンダム好き」の主人公であるダリー「ニュータイプと噂されている」が、ジャンクパーツから組み上げた機体をガンダム的な外見に作り上げたもので、基本的に作業用メカだ。後に兵器化されるが、そのため従来のガンダムと比べ、イメージはガンダム的だが、かなり違ったシルエットと意匠を持つ。作品のメデザインは「CCA・MSV」などを担当。当時帯金所属の福地仁で、後に「機動戦士ガンダム00」でもユニオン・フラッグなどユニオン系の機体の多くを担当している。本作のメデザインであるいはガンダム作品としての「MSV」的なユニークさは、デザイナーの個性による部分もまた、大きいのだろう。

# F91シリーズの世界

機動戦士ガンダムF90、F91-MSV、SILHOUETTE FORMULA 91

M.S.V 機体解析 MSV F90&F91編

## シリーズのベースとなった作品

機動戦士ガンダム F91

**作品データ**

公開　※平3月16日
配給　松竹系

**STAFF**

| | |
|---|---|
| 企画・製作 | サンライズ |
| 原案 | 矢立肇 |
| 原作・監督 | 富野由悠季 |
| 脚本 | 伊東恒久、富野由悠季 |
| キャラクターデザイン | 安彦良和 |
| メカニカルデザイン | 大河原邦男 |
| 美術 | 池田繁美 |

**主題歌**

WIND ～ほほえみ充る風の中へ～

### 新時代の宇宙世紀とモビルスーツを描いた『機動戦士ガンダムF91』

機動戦士ガンダム　逆襲のシャア」より3年後に公開された劇場作品。モビルスーツの小型化と　新たな宇宙世紀の世界を描き　新たな「ガンダム世界」を築いた　作品は宇宙世紀0123年が舞台。長く続く平和な時代、地球連邦政府は権威と腐敗を貪っていた　そこに「コスモ貴族主義」を掲げるロナ家が、私設軍隊のクロスボーン・バンガードを使いスペース・コロニー「フロンティアIV」を占拠。「コスモ・バビロニア」建国を宣言する、民間人の少年シーブックは、仲間とともに地球連邦軍の練習艦『スペース・アーク』に逃げ込む。そこには試験中の試作モビルスーツ「F91」があり、危機を脱するためシーブックはF91に乗り込まざるを得なくなる。一方、クラスメイトのセシリー・フェアチャイルドは、実はロナ家のベラ・ロナであり、コスモ・バビロニアの象徴に祀り上げられていった。

作品に登場するおもなMS

F71
G・キャノン

RGM-109
ヘビーガン

XM-04
ベルガ・ダラス

XM-07
ビギナ　ギナ

RX-
ガンダムF91

←物語の背景設定として、MSは小型化しつつある、という時代ゆえ、作中に登場するMSは基本サイズが小さい。そこに旧時代のジェガンが同盟軍で採用されることで対比となる。いいようにあしらわれる旧式大型MSの「ヤラれっぷり」も見どころといえる。

## 新時代のガンダムの新MSVプロジェクト

1991年3月に公開された「機動戦士ガンダムF91」は「機動戦士ガンダム　逆襲のシャア」以来3年ぶりの「ガンダム」の劇場作品であり、「モビルスーツの小型化」という大改革が行われた。これは主に劇中での、人間とモビルスーツの乖離をより直接にするための措置だが、商品企画まで刷新する大変革であった。一方で劇場作品は公開期間が短いため、模型などの関連商品のプローションとしては、短期間というデメリットもあった。こうした状況を踏まえ企画として、MSV的なものが映像制作のサンライズを巻き込んだ一大プロジェクトとして、映像制作に並行して展開されることになった。これが「機動戦士ガンダムF90」である。

これまで「MSV」は、バンダイを中心にした緻密と緩認メディアによる「後追い」企画であり、いわばムービーブメントの後期に注入される「ガンプラ剤」的な存在であった。しかし「F90」は「オフィシャルの」ものとして、同時並行で展開したため、あえてMSVという名前は使われなかった（実際、F91・MSVは別に展開されている）。本プロジェクトの主役機である

## 機動戦士ガンダムF90とは？

1：100スケール「ガンダムF90」
増加ウェポン・バリエーション
タイプA.D.S.3点セット
90年10月発売
価格　2,500円（＋税）

機動戦士ガンダムF91
フォーミュラー戦記0122
スーパーファミコン用ソフト
91年7月6日発売
価格　9,500円（＋税）

本文中にも触れているが、『機動戦士ガンダムF90』は、『機動戦士ガンダムF91』の前日譚だ。一応、作品内の主人公（デフ）も設定はされているが、物語として『F91』との連続性はない。ちなみに『F91』公開後に発売されたスーパーファミコン用ソフト『機動戦士ガンダムF91フォーミュラー戦記0122』も『F91』と連動はしているが関連性はない（こちらの主人公はベルフ・スクレット）。また当時は、家庭用ゲーム機の隆盛期といえ、ゲームによる展開も時代を反映している。まさにメディアミックスの走りといえるだろう。劇場作品である『F91』の事前告知と宣伝という使命を担っていた『F90』は、バンダイ系出版物の『SD CLUB』や『B-CLUB』以外に、講談社の『コミックボンボン』や、ほぼほぼ『F91』の専用専門誌といって過言ではない『ガンダムマガジン』といった出版メディアでも取り上げられていた。

## MOBILE SUIT GUNDAM SILHOUETTE FORMULA 91とは？

1／100スケール
ネオガンダム
92年9月発売
価格　1,700円（＋税）

作品の位置付けとしては、『F91』前後のエピソードといえ、内容としては、プラモデル展開を主眼にしているため、メカにフィーチャーした企画といえる。ちなみに製品ラインナップは全7種類（『F91』は全9種）という、それなりのボリュームで展開されている。

おもな物語は2部構成で、まずアナハイム・エレクトロニクス社がサナリィに奪われた主力MS開発企業の座を取り戻すために始動する『シルエットフォーミュラプロジェクト』と、危険宙域として知られる『ゼプラゾーン事件』が第1部にあたる。主人公はトキオ・ランドール。続く第2章は、主人公にあるウォルフ・ライル少尉がサナリィからの命を受けて、様々なミッションをこなすというもの。これはプラモデルのシリーズ最後発の『F90Ⅲ-Yクラスターガンダム』（93年3月発売）を主役メカに据えた展開である。

## F90とF91

F90は、F91の初期案デザインがベースとなっており、『F90』の物語も、『F91』の物語の3年前という設定であり、実際の作品展開作とプロジェクトがリンクする形となっている。

F91のデザインは、劇中外はガンダム的な記号を極力排除した「新しい」ものを目指していたが、F90はオーソドックスなデザインともいえ、「継ぎと革新」のバランスが取られている。また『F90』の展開は、MSV同様模型だけでなく、出版メディアやゲームなども巻き込んだメディアミックスとして展開され、実際に『F91』の公開の半年以上前にスタートしており、『F91』の「温め役」であったといえる。中でも重要なのは漫画の取り入れ方で、『F90』の展開は漫画を手に入れ、より幅広い層に訴求することになった。

一方で『F91』の模型販売は好調であり、公開後には『機動戦士ガンダム シルエットフォーミュラ91』が、これも『F90』のようにメディアミックス式で展開された。当然『F90』、『F91』を踏まえた作品系統としては連続性のあるもので、本来のMSV的な役割を担い、その世界の拡大、継続に一役買った。以降、MSV関連企画はオフィシャルな存在というフォーマットで進められることになる。

MSV最強伝説
MSV
F90&F91編

F90
# ガンダムF90

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 14.8m |
| 本体重量 | 7.5t |
| 全備重量 | 17.8t |
| ジェネレーター出力 | 3,160kW |
| スラスター推力 | 74,760kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル |
| アジャスター数 | 51 |
| 備考 | シールド装備 |

## MSの次世代を担う性能検証用実験機

第二次ネオ・ジオン戦争以後、地球連邦軍は主力機のRGM-89ジェガンを近代化改修し延命を繰り返しながら使ってきたが、それにも限界が生じ始めていた。そこで、宇宙世紀0111年、地球連邦軍はポスト・ジェガンとなるMSの開発を企図した。しかし、ここで出された要求は「性能を落とさず、調達容易な小型MSを作成せよ」という困難なものだった。

このコンセプトに挑戦していくつかのプランの中から、最終候補となったのはサナリィ（S.N.R.I.＝海軍戦略研究所）が開発したF90と、アナハイム・エレクトロニクス社が開発したMSA-120の2機種である。この2機によるコンペが行われ、F90が勝利する。これによりサナリィは新たな高性能小型MS開発計画「フォーミュラ計画」プロジェクト）をスタートさせた。

F90は計画の根幹をなす性能検証機として、メイクモデルで、機体各所に設けられたハードポイントに、26種類のミッション・パックを装備可能にすることにより機体そのものを開発することなく、装備の変更だけであらゆる検証を可能とした。これにより得られた開発データは、後継のF91の開発にフィードバックされている。

また本機はハック装備していないが、基本形態でも機動性に優れ、高い

を発揮した。

F90A

## ガンダムF90 アサルトタイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 9.8t |
| 全備重量 | 90.3t |
| ジェネレーター出力 | 3,160kW |
| スラスター推力 | 184,800kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | マシン・キャノン×2<br>ビーム・キャノン×2<br>メガ・ビーム・バズーカ<br>※本体武装は除く |
| アポジモーター数 | 61 |
| 備考 | 長距離侵攻用ミッションパック |

長距離侵攻仕様と呼ばれるハ ク。コンセプト的には敵陣深く侵入し 重要拠点をピンポイントで攻撃するタイプである。そのため補給不要で長時間活動及び戦闘を行うことに適しており 優れた継戦能力を持つ。大出力の増加機動ユニ トは 一説にはミノフスキー・クラフト方式を先んじて採用したといわれる。また搭載プロペラント量も大幅に増加している。メイン武装は、要塞破壊兵器のビーム・バズーカのみで 拠点攻略に特化している。

F90D

## ガンダムF90 デストロイタイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 8.9t |
| 全備重量 | 21.3t |
| ジェネレーター出力 | 3,160kW |
| スラスター推力 | 140,800kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | 4連グレネード・ラック×2<br>5連ロケット弾バック×2<br>メガ・ガトリングガン<br>MSクラッカー×2<br>※本体武装は除く |
| 備考 | シールド装備、遠近戦用ミッションパック |

接近戦仕様と呼ばれるハ クで 高い機動性と重武装を併せ持つタイプ

基本的に一撃離脱戦法に秀で、敵主力に対する面制圧を運用目的とし 火力で主要目標を制圧後 格闘戦で敵を掃討する というのかコンセプトとなっている 武装は、グレネード MSクラ カー ロケット弾 メガ・ガトリングカンなど 実体弾兵器が主体となっているものの 本機の全ハ クの中でも随一の火力を誇る装備である

MSV編 MSV F90&F91編

F90S
## ガンダムF90 サポートタイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 11.3t |
| 全備重量 | 25.2t |
| ジェネレーター出力 | 3,160kW |
| スラスター推力 | 74,760kg |
| 装甲特性 | ガンダリウム合金セラミック積層材 |
| 武装 | 2連ミサイル・ポット<br>4連ビーム・キャノン×2<br>メガ・ビーム・キャノン×2<br>クルージングミサイル×2<br>※本体武装は除く |
| アポジモーター数 | 57 |
| 備考 | 長距離支援用ミッションパック |

長距離支援仕様と呼ばれるパック。かつての支援用モビルスーツ、RX-75ガンタンクやRX-77ガンキャノンのような、後方支援を目的として開発された。胸部にはミサイル・ポット内蔵型のハント・キャノン、両肩部に大口径のメガ・ビーム・キャノン、脚部には汎用誘導兵器のクルージング・ミサイルなどの長距離兵器と、長距離用複合照準器を持つ。背面に備えたアウトリガー・ユニットは、攻撃時に接地させ射撃精度を向上させる装置だ。

F90H
## ガンダムF90 ホバータイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 8.6t |
| 全備重量 | 21.1t |
| ジェネレーター出力 | 3,160kW |
| スラスター推力 | 122,470kg |
| 装甲特性 | ガンダリウム合金セラミック積層材 |
| 武装 | 4連ミサイル・ポッド×2<br>ビーム・ピストル<br>2連グレネードパック<br>※本体武装は除く |
| アポジモーター数 | 53 |
| 備考 | 陸戦強襲戦闘用ミッションパック |

ホバータイプのコンセプトはMS-09ドムで、ホバーの高速移動による一撃離脱戦法を主眼とする。地上の1G下では時速480km/hという最高速度を実現したが、ホバーの最大稼働時間は4時間まで。マリンタイプは水中航行様でバックパックには大型ハイドロ・ジェットを備え、コンバットナイフ、水中銃、魚雷などの専用装備を持つ。

F90M
## ガンダムF90 マリンタイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 9.5t |
| 全備重量 | 22.5t |
| ジェネレーター出力 | 3,160kW |
| スラスター推力 | 74,760kg（ノーマル時）<br>66,540kg（ハイドロジェット時） |
| 装甲特性 | ガンダリウム合金セラミック積層材 |
| 武装 | コンバットナイフ<br>3連マリンロケットパック×2<br>ホーミングトーピード×4<br>6連アローシューター<br>※本体武装は除く |
| アポジモーター数 | 64 |
| 備考 | 最大滞航速度90ノット<br>最大滞航深度400m<br>水中戦用ミッションパック |

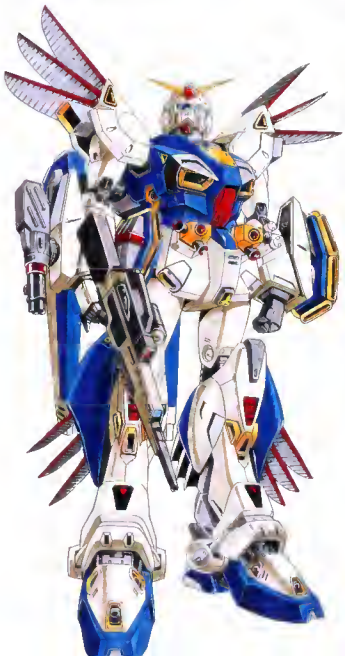
大気圏突入時

F90P

## ガンダムF90 プランジタイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 10.7t |
| 全備重量 | 32.5t |
| ジェネレーター出力 | 3,160kW |
| スラスター推力 | 197,960kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | 連装バルカン砲<br>ビーム・キャノン<br>※本体武器は除く |
| アポジモーター数 | 71 |
| 備考 | 大気圏突入用ミッションパック |

大気圏突入仕様。PはPLUNGE＝突入の意味。開発には MS単機での大気圏再突入を実現したMSZ-006 Zガンダムを参考にするが MSZ-006がウェイブ・ライダーに変形しリフティング・ボディを形成したのに対し 本機は材質強化とウイング形状の設計変更で、大規模な変形は不要 再突入形態への移行は、マグネット・コーティングを応用し2秒で可能とする。



F90V

## ガンダムF90 ヴェスバータイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 8.7t |
| 全備重量 | 21.5t |
| ジェネレーター出力 | 4,420kW |
| スラスター推力 | 95,850kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | ヴェスバー×2<br>メガ・ガトリングガン<br>※本体武器は除く |
| アポジモーター数 | 66 |
| 備考 | 新型火砲試験用ミッションパック |

新型火器ヴェスバー（V.S.B.R.＝Variable Speed Beam Rifle）の試験用パック 本体ジェネレーターから直接電力の供給を受けて放つヴェスバーは、これまでのビーム兵器とは比較にならないほどの威力を持つ。また様々な性質のビームを撃ち分けることが可能で、本兵器が実用化した際には、これまでのビーム・ライフルは不要になるとさえ言われている。限りなくF91に近い仕様であり、ビーム・シールドの併用も可能であった。

F90Ⅱ
## ガンダムF90Ⅱ

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.1m |
| 本体重量 | 7.7t |
| 全備重量 | 18.6t |
| ジェネレーター出力 | 3,880kW |
| スラスター推力 | 80,960kg |
| 装甲素材 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル |
| アポジモーター数 | 58 |
| 備考 | シールド装備、ハードポイント数11、クモボジラック1 |

### アクシデントからの再生で性能向上を果たした2号機

F90 2号機は、宇宙世紀0122年の「実験中に火星独立ジオン軍「オールズモビル」に強奪され、同軍仕様機として、独自の改修が施されてしまった。

OMS-90Rガンダム F90火星独立ジオン軍仕様では、脆弱機最大の特徴である現行のミッションパック換装システムをすべてオミットし、モビルスーツとしての単一性能の向上が図られている。これには、組織的にオールズモビルではミッションパックの運用は現実的ではなく、ジオン公国系の保守パーツを転用可能とする意図が込められていた。さらにオールズモビルの本拠地の火星のオリンポス基地でF90 1号機と交戦し、その際に機体の60%、頭部、胸部、両足二が失われた。だが、回収された機体は、ジェネレーターやメインコンピュータなど、機体の根幹部に致命的なダメージはなく、サナリィによる再生計画がスタートする。

この時期には、すでに後継機のF91の基本設計が終了していたこともあり、ジェネレーターや胸部フレームに設計データがフィードバックされたほか、制御コンピュータにも良が施されている。さらにミッションパック機構も再書入された。計画を経て再生された本機だが、結果的にこの性能は、F90 1号機を上回ることとなった。

F90IIL

## ガンダムF90II ロングレンジタイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 11.5t |
| 全備重量 | 27.2t |
| ジェネレーター出力 | 4,290kW |
| スラスター推力 | 109,980kg |
| 装甲素材 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | ロングレンジ・ライフル<br>誘導ミサイル・ランチャー×2<br>※本体武装は除く |
| アドバンテージ | 58 |
| 備考 | サーモスコープ<br>誘導装置用複合センサー装備<br>長距離砲撃用ミッションパック |

長距離攻撃を目的としたミッション・パック主武装のロングレンジ・ライフルはビーム、実体弾の選択式。ビームは極限まで拡散率を抑えた超長射程仕様であり、その射程は100kmにも及ぶ。また実弾は弾体の周囲及び尾部に爆発式のバーニアペレットが設けられ、これを炸裂させることによって、角度は限定されるものの、弾体を一度だけ方向転換できる本オプションは主にF90-2号機によってテストが行われたが、装備自体は1号機と共用。

F90III

## ガンダムF90II インターセプトタイプ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 9.7t |
| ジェネレーター出力 | 4,150kW |
| スラスター推力 | 188,080kg<br>(内フライトシールド60,800kg) |
| 装甲素材 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | ビーム・ランサー<br>マシン・キャノン×2<br>※本体武装は除く |
| アドバンテージ | 58、フライトシールド5 |
| 備考 | フライトシールド装備<br>迎撃戦用ミッションパック |

迎撃、追撃仕様のミッションパック。宇宙、地上問わず あらゆるシチュエーションで敵に即時対応することがコンセプト 機体に装備する追加パーツは脚部の推力増加ユニットのみだが 最大の特徴であるフライトシールドは サブ・フライト・システムとして機能し ウェイブ・ライダーへの変形機構を備えている フライトシールドを使用した際の大気圏内移動最大速度は実に1800km/h、地上ホバー移動時は約700km/hを記録した

OMS-06RF

# RFザク

| | |
|---|---|
| 全高 | 18.0m |
| 全備重量 | 45.8t |
| ジェネレーター出力 | 2,750kW |
| スラスター推力 | 62,550kg |
| センサー有効半径 | 18,300m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |

武装
- ビーム・アックス
- ビーム・ライフル
- ビーム・スプレーガン
- ビーム・バズーカ
- シールド・マシンガン
- クラッカー
- 蛇ヘビ

## ザクのイメージを継ぐゲリラ組織の主力機

次星に本拠地を置く「オールズモビル」の主力モビルスーツ。かつてジオン公国軍の傑作機、MS-06ザクIIを思わせるシルエットだが、すべて新規設計された高性能機で性能的にもAMS-119ギラ・ドーガを上回っている。ただ、ビーム・シールドなどの最新装備の採用にはいたっていない。

外観の動力パイプなどもグリーンで、あくまでザクのイメージを踏襲。武装はビーム兵器を主体としているが、旧来のザクIIと同様にクラッカーなども装備する。

OMS-07RF

# RFグフ

| | |
|---|---|
| 全高 | 18.7m |
| 本体重量 | 26.3t |
| 全備重量 | 65.2t |
| ジェネレーター出力 | 2,750kW |
| スラスター推力 | 64,800kg |
| センサー有効半径 | 18,300m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |

武装
- 5連装フィンガー・バルカン
- ヒート・ロッド
- ビーム・ソード
- ビーム・ライフル
- ビーム・ランチャー

## 陸戦型MSグフをモチーフにした新型機

「オールズモビル」の陸戦、宇宙戦兼用のモビルスーツ。MS一07B年戦争時の陸戦機、MS-07Bグフをモチーフにするが、OMS-06RFRF-ザク同様、設計はまったくの新型機である。そのためビーム兵器も使用可能で、宇宙での運用にも対応している。またOMS-06RFと多くの部品を共用しているが、本機の方がより格闘戦や陸戦に特化した機体となっている。ヒート・ロッドもMS-07Bから継承するが、先端部にビーム発生器を内蔵しており、攻撃力は大幅に向上している。

OMS-09RF

# RFドム

| | |
|---|---|
| 全高 | 19.1m |
| 本体重量 | 30.9t |
| 全備重量 | 56.4t |
| ジェネレーター出力 | 3,230kW |
| スラスター推力 | 76,900kg |
| センサー有効半径 | 18,300m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |

武装

胸部拡散
メガ粒子砲×2
ビーム・セイバー
ビーム・バズーカ
グレネード・ランチャー
ビーム・ライフル
ビーム・ランチャー

## ドムのマインドを継承する宇宙用新型MS

オールズモビル（ユーラシア連邦の一企業体）がつくったMS。かつてのジオン公国軍MSを管轄する組織らしく、MS-09ドムをモチーフとした機体として開発された。他のオールズモビル製MS同様、外観はニュールトルツーカラー。内部は宇宙世紀0120年代の技術で設計された新型機であるため、武装はビーム・バズーカがメインであり、他にも多数のビーム兵器を備える。背にはドム系では初めて、ほぼ実現できなかった脚部拡散メガ粒子砲も、実用的な性能を持たされて基装備する。

OMS-09DRF

# RFデザート・ドム

| | |
|---|---|
| 全高 | 19.1m |
| 本体重量 | 31.7t |
| 全備重量 | 58.2t |
| ジェネレーター出力 | 3,450kW |
| スラスター推力 | 67,800kg |
| センサー有効半径 | 10,700m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |

武装

胸部拡散
メガ粒子砲×2
ビーム・セイバー
ビーム・バズーカ
グレネード・ランチャー
ビーム・ライフル
ビーム・ランチャー

## 陸戦に特化させたRFドムの改修機

オールズモビルが使用するOMS-09RF RFドムのバリエーション機。宇宙戦闘ではなく、地上、特に熱帯戦を想定した機体としてリファインが行われている。姿勢制御スラスターのオミットや、冷却用ダクトの追加といった地上用の改修が各部に施されているほか、脚部ホバーユニットの出力向上により、旧来機よりも高速のホバー移動が可能となっている。武装はOMS-09RFと同様、ビーム・バズーカを主体として、ビーム・セイバーなど多彩な武装を装備する。

OMSM-07RF

# RFズゴック

| | |
|---|---|
| 全高 | 18.4m |
| 重量 | 57.9t |
| ジェネレーター出力 | 2,830kW |
| スラスター推力 | 67,900kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |

武装
- ヒート・クロー×2
- ビーム・カノン×2
- ビーム・シャワー
- 対艦対空ミサイル×6

## より陸戦型に特化したズゴックイメージの機体

オールズモビル　の機体で、ジオン国軍の水陸両用MS・07ズゴックをモチーフとする　たが、本機や内部は1年戦争後の1220年代の技術で作られた別物の新型機だ。また、元々、MSM-07が水陸両用機なのに対して、本機の場合、陸戦機としての性能に　眼が置かれている。はいえ、ホバーユニットやスラスターを搭載しており、水中活動も対応　脚部は　装備する。

OMS-14RF

# RFゲルググ

| | |
|---|---|
| 全高 | 19.6m |
| 重量 | 43.6t |
| ジェネレーター出力 | 3,230kW |
| スラスター推力 | 84,100kg |
| センサー有効半径 | 16,300m |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |

武装
- ビーム・セイバー、ビーム・ライフル、アーム・ミサイルグレネード・ランチャー

特殊装備
- シールド装備

## ゲルググをイメージしたオールズモビル最新鋭機

オールズモビル　の高性能モビルスーツ。かつてのジオン公国軍のMS・14ゲルググと同様に、オールズモビルの宇力機の中では、もっとも高機能な機体だ。性能もOMS・06RF・RFザクを大きく上回るが、生産コストが高く、部上官やエースパイロットのみに配備される。

OMS・06RF・RFドムをベースにパーツや装備の共用化を図り、極力運用コストの抑制を行っている。1力武装はビーム・ライフルだが、他に指揮官機や機体色の異なるバリエーションタイプも存在する。

OMS-14SRF

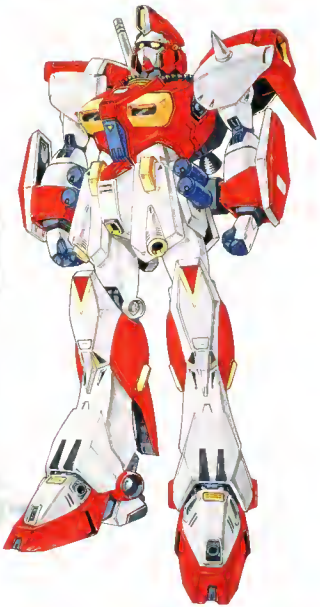
## RFゲルググ

### シャルル・ロウチェスター専用機

| | |
|---|---|
| 全長 | 21.0m |
| 全高 | 20.2m |
| 重量 | 55.7t |
| ジェネレーター出力 | 3,870kW |
| スラスター推力 | 98,300kg |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・ランチャー |
| 備考 | ビーム・シールド装備 |

**シャルル専用機として大幅な改修を実施**

オールズモビル のエースパイロット、シャルル・ロウチェスターの専用機。OMS-14RF RFゲルググをベースとするが、クロスボーン・ガンダムからの技術供与を受けており、原型機をはるかに凌駕する機体となった。本体にも大規模な改修が施された結果、原型機からかけ離れたシルエットとなり、肩部バインダーや増設されたスラスター、頭部形状などに違いが見て取れる。小型モビルスーツが主流となりつつある時代においても、サイズは大型ながら出力を取らない高性能機だ。



OMS-90R

## ガンダムF90
## 火星独立ジオン軍仕様

| | |
|---|---|
| 全高 | 15.2m |
| 本体重量 | 8.9t |
| 全備重量 | 20.22t |
| ジェネレーター出力 | 3,160kW |
| スラスター推力 | 95,850kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル<br>ウェポンラック付<br>マシンガン<br>対MS用<br>グレネード×4 |
| アポジモーター | 62 |

**オールズモビルによるF90の独自改修型**

火星に拠点を置く、オールズモビルが奪取したF90。2号機に大幅な改修を施した機体。原型機の特徴的なミッションパックも同進機では運用が非現実的なため、システムを排除、外装も8割が変更された。カラーリングも水、白が主体へと変えられている。性能面ではセンサーの大型化やアポジモーターの増設により、機体単体のポテンシャルはF90を凌ぐという。一方でオールズモビル独自のハードポイントが設けられており、原型とは別の換装用パーツ装備が想定されていた。

MSV最強戦記
MSV
F90&F91編

## OMAX-01
# グラン・ザム

| | | |
|---|---|---|
| 全　　高 | ⇒ | 18.4m |
| 本体重量 | ⇒ | 105t |
| 全備重量 | ⇒ | 176.9t |
| ジェネレーター出力 | ⇒ | 22,600kW |
| 武　　装 | ⇒ | メガ粒子砲<br>対空機銃<br>対空ミサイル<br>対艦メガ粒子砲 |
| 特　　殊 | ⇒ | ビーム偏向バリア搭載 |

オールズモビルの次戦用大型モビルアーマー。ノオン公国のMA-08ビグ・ザムをベースとして陸上用に再設計された。脚部を廃して巨大なホバーユニットに置き換えられ、サブアームを備えるなどMA-08とはシルエットが大きく異なる。シャルル・ロウチェスターが搭乗予定だったが、開発が遅れたため、実戦配備されなかった。



## RXR-44
# ガンタンクR-44パワードウェポンタイプ

武　装 ⇒ フィンガー・ランチャー、2連ビーム・キャノン、モーターガンユニット（20mmガトリングガン、35mm機関砲、20mm機関砲×2）、4連マシン・キャノン、3連スモークディスチャージャー

RXR-44ガンタンクR-44の武装充実化プランの1つ。頭部にスモークディスチャージャー、右肩には長銃身の4連マシン・キャノン、右腕部に2連ビーム・キャノンと、手首部にフィンガー・ランチャー、左腕部には20mm8銃身ガトリングカノン、35mm機関砲、20mm機関砲×2で構成される、複合兵装のモーターカンユニットを装備する。

サンドカラータイプ

F91
## ガンダムF91バックキャノン装着型
〈パワードウェポンタイプ〉

武装 → バルガン砲×2、ビーム・サーベル×2、メガ・マシン・キャノン×2、4連ビーム・ガトリングガン×2、ミサイル・ランチャー（対艦ミサイル）×2、ビーム・ライフル、ビーム・ランチャー

装備 → ビーム・シールド装備

### ヴェスバーの代替えとして考案されたバックパック

F91ガンダムF91が装備するヴェスバーは、革新的なビーム兵器であるが、万一、想定した出力を実現するまでに、技術的に多くの壁がのちはだかっていた。そのためヴェスバーが完成しなかった場合の代替装備として考案されたのが本件装備である。ヴェスバーの代わりに4連ビーム・ガトリングガンと、対艦ミサイル・ランチャーをそれぞれ装備したユニットで構成される。またシールドバインダーも改良され、形状修正とともにアポジ・モーターが増設され、運動性の向上に貢献している。

F91
## ガンダムF91
## ツイン・ヴェスバー装着型

武装 → バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、メガ・マシン・キャノン×2、頭部ヴェスバー×2、ビーム・ライフル、ビーム・ランチャー

装備 → ビーム・シールド装備（2個装備が可能）

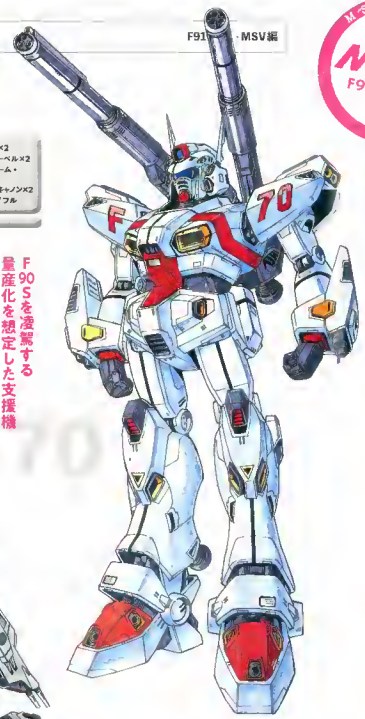
### ヴェスバーを4門備えた攻撃力強化型バック

F91ガンダムF91のヴェスバーを4門に増設した仕様で、背部にソイン・ヴェスバー・ユニットを装備する。ヴェスバーにはサブスラスターを内蔵し、これにより機動性の向上にも繋がっている。また、大出力ビーム兵器であるヴェスバーの4門同時発射はF91の搭載ジェネレーター出力をもってしても実現不可能であった。また、ツイン・ヴェスバーそのものの小型化の可能性が模索された結果、このユニットが生まれた。

F70

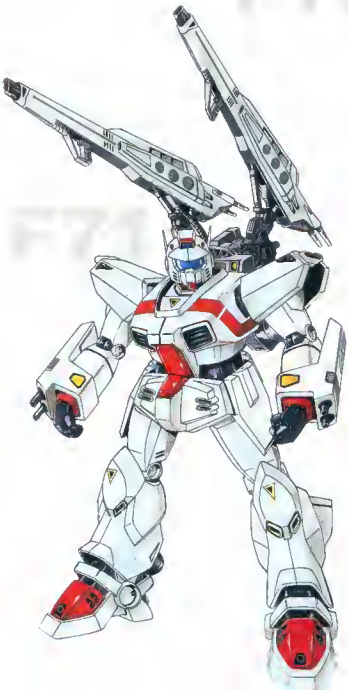
## キャノンガンダム

| | |
|---|---|
| 全高 | 14.8m |
| 本体重量 | 8.2t |
| 全備重量 | 22.5t |
| ジェネレーター出力 | 3,850kW |
| スラスター推力 | 27,640kgf |
| 装甲材質 | ガンダリウムα合金<br>セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ダブル・ビーム・ガン×2<br>3連マシン・キャノン×2<br>ビーム・ライフル |
| アポジモーター数 | 48 |



### F90Sを凌駕する量産化を想定した支援機

サナリィが「F90Sガンダム F90サポートタイプ」の章亨を視野に入れて開発した試作機。F71・G・キャノンのプロトタイプに位置づけられる。F90Sでは換装用装備であった武装が固定化されたほか、並行して開発中だったF91のスラスターやコクピット機器を導入。機体各部にハードポイントが残されるなど、F90Sの利点を継承した発展機となっただが生産自体はアナハイム・エレクトロニクス社に委託され、最終的には生産性や運用コストを抑制したF71へ再設計された。



F71

## ヴェスバー装着型G・キャノン

（新型火器試験仕様）

| | |
|---|---|
| 武装 | バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ダブル・ビーム・ガン×2、ヴェスバー×2 |

### ヴェスバー実用化に貢献した支援テスト機

F91のメイン武装であるヴェスバーの試験用として開発された試作機。最新の武装であるヴェスバーは、実用化に至るまでに様々なプロセスを経ていた。F90ガンダムF90でのテストが進められる一方、F71G・キャノンもテストベッドとして駆り出されていたのだ。

だが、本機には武装としてヴェスバーは装備されているが、そのままでは本体ジェネレーターの出力不足で使用できない。そのため、ヴェスバー用にF91相当のジェネレーターがバックパックに搭載されている。

F71

## G・キャノンパワードウェポンタイプ

武装 → バルカン砲×2、ビーム・サーベル、左電部ガンユニット、2連電磁レールガン、地対空ミサイル×2、ツイン・ビーム・キャノン

備考 → 簡易センサー、対空管制照準システム搭載

### 全身に武器を増設したフル装備仕様

F71 G・キャノンの重武装仕様。機体各部のハードポイントすべてに武装を装備している。その内訳は、ハックパックにツイン・ビーム・キャノン、左肩に地対空ミサイル、右腕にガンユニット、左腕に2連電磁レールガンを装備している。これら増加した武装をサポートすべく、対空管制照準システムや照準センサーが増設された。また武装の増加による機動性の低下を補うべく、アポジモーターを増設、両脚部にはスラスター・ユニットが追加された。

RGM-109

## ヘビーガン重装攻撃型

| | |
|---|---|
| 全高 | 15.8m |
| 本体重量 | 9.5t |
| 全備重量 | 23.5t |
| ジェネレーター出力 | 2,870kW |
| スラスター推力 | 82,260kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金 |

武装 → バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ダブル・ビーム・ガン、2連電磁レールガン、5連装ミサイル・ポッド、ビーム・ライフル、6連グレネード・ランチャー×2、バズーカ、4連マシン・キャノン

アポジモーター数 → 59

備考 → シールド装備

### 攻撃力不足を補う全武装装備型

RGM-109ヘビーガンの武装強化プラン。上半身を中心に様々な武装（主に中距離支援用）を備えるが、本体は標準仕様なため、全装備状態では出力不足と重量増加による機動力低下を招く可能性があった。そのため必要に応じて装備を選択するという限定運用が行われた。

F91-MSV編

XM-05
## ベルガ・ギロス武装強化型

武装 → 3連対艦ミサイル×2
ASAT（対地直攻兵用ミサイル、ブースターパック内蔵）×2

武装 → ビーム・シールド装備　シェルフノズルではなく、ブースターパックを装備（推力8,950kg）

### 対艦攻撃に特化したカスタムMS

クロスボーン・バンガードのXM-05ベルガ・ギロスのカスタム機。対艦用撃破型というコンセプトで、両脚部には新たに対艦用ミサイル（×6）を装備。また背部のシェルフノズルに変わって、新規ブースターパックを備える。出力向上以外に、このブースターパックには衛星攻撃用ASAT（Anti SATellite weapon）を搭載、バウ・ウェポンタイプやベルガ・ギロスカスタムと呼称されることもある。

XM-06
## ダギ・イルス長距離偵察型

武装 → 固定型ヘビー・ライフル

武装 → ビーム・シールド装備　シェルフノズルではなく、ブースターパックを装備（推力8,950kg）

### 偵察任務を重視し電子戦装備を強化

XM-06ダギ・イルスの早期量産、指揮管制型。長距離偵察型オプションを装備した機体で、F91ガンダムF91に匹敵するバイオ・コンピュータを搭載。単機での長距離任務を想定し、背部にプロペラントタンクを増設。これはAMBACユニットとしても機能する。また脚部スラスターユニットが新設され、機動性も向上。電子装備に特化し、武装は左腕固定のヘビーライフルのみ。バウ・ウェポンタイプとも呼ばれる。

## デッサ・タイプMS

作業用トーチ
複合式センサー搭載

### クロスボーンMSの原型となった機体

ブッホ・コンノ・ルンの航空機部門ノホ・エアロダイナミクス社が開発した作業用モビルスーツMS。宇宙世紀0115年に量産が発表、宇宙世紀0122年のMSショーに出展、一般公開された。表向きは作業用だが、MSの小型化による性能向上を実現した機体で、クロスボーン・バンガードの戦闘用MSの始祖。装備はトーチと作業用マニピュレーターのみだが、ブロック型センサーや各部ハードは、すでに汎用MSの面影がある。

MS-06MP
## マニピュレイションシステム装着型ザク

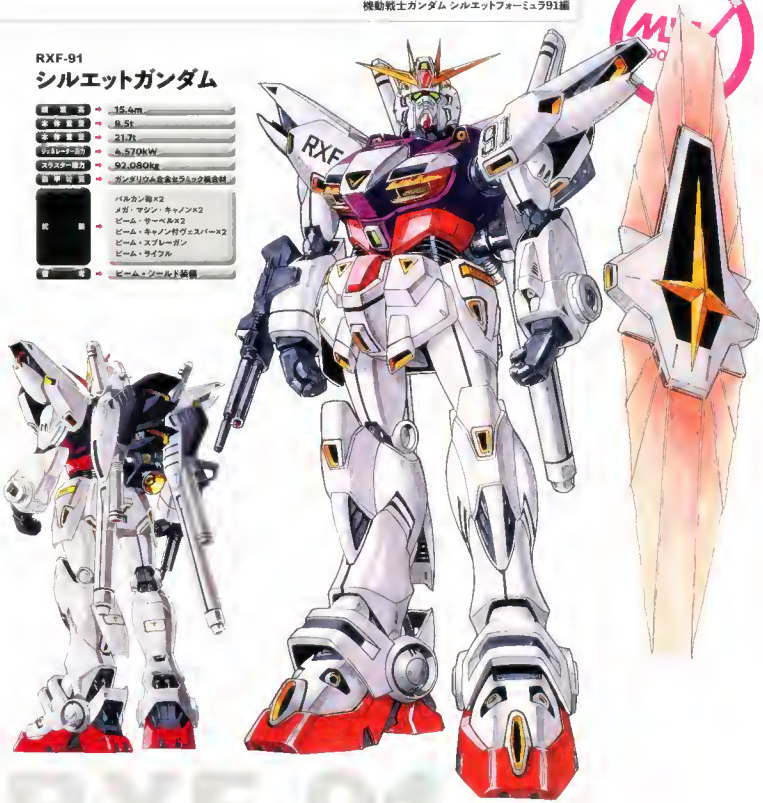
装着 作業用マニピュレーターx4

### 作業用パックパックを装備しソーラ・レイの改造に従事

MS（MP）ザクIIをベースとした作業用タイプ。一年戦争時にはMS（MP）Fをベースに、様々な作業用機体が開発されたが、本機もその1機だ。4本の作業用マニピュレーターを備えたバックパックを装備、乗員は2人で、機体操縦は通常のコクピットで行い、マニピュレーター操作は、胸部から張り出した外部操縦席で行う。生産数はわずか3～4機程度と極端に少ない。すべて、年戦争時のソーラ・レイ改造作業に投入された。

RXF-91
# シルエットガンダム

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.4m |
| 本体重量 | 8.5t |
| 全備重量 | 21.7t |
| ジェネレーター出力 | 4,570kW |
| スラスター推力 | 92,080kg |
| 装甲素材 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>メガ・マシン・キャノン×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・キャノン付ヴェスバー×2<br>ビーム・スプレーガン<br>ビーム・ライフル |
| 備考 | ビーム・ソード装備 |




## F91のデータを転用したアナハイム製ガンダム

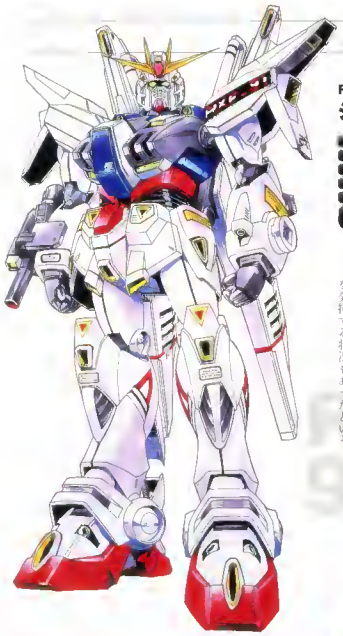
次期主力モビルスーツ開発コンペで敗れたアナハイム・エレクトロニクス（以下AE）社は、非合法手段によって入手した、サナリの開発データをもとに、シルエットフォーミュラプロジェクト（以下SFP）をスタートさせる。

SFPによって開発されたRX F91シルエットガンダムは、サナリのF91ガンダムF91の設計基本データを流用したもので、機体の構造やバランスはほぼ同じものとなった。素材はAE社製の物を使用して開発されているが、ジェネレーター出力などはF91を上回っていたため、コピー品の領域を超えていた。

その一方でAE社が大幅発の技術は、オリジナルのF91との違いとして表れているたとえば完全なビーム・シールドの開発という点でAE社は遅れを取っており、腕部に装着するシールドからビームを放出するタイプとなっている。

また、AE社ではバイオ・コンピュータの開発技術がなく、それに代わって高性能教育型コンピュータが搭載されていた。これはパイロットの特性やパターンを学習し、フィードバックするという装置だ。

あくまで本機は、データ収集用として開発された機体であるため、プロペラントの搭載量は少なく、実戦を想定した機体ではなかった。



RXF-91A

## シルエットガンダム改

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.4m |
| 本体重量 | 9.2t |
| 全備重量 | 21.4t |
| ジェネレーター出力 | 4,890kW |
| スラスター推力 | 91,680kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |

武装
- バルカン砲×2、メガ・マシン・キャノン×2、ビーム・サーベル×2
- グレネード・ランチャー、ビーム・ライフル付ヴェスパー×2、拡散型ビーム・スプレーガン、連装ビーム・ライフル

背中
- ビーム・シールド装備

### 大破したRXF-91を強化した改修型

クロスボーン・バンガードのダークタイガー隊との戦闘で大破したRXF-91シルエットガンダムに改修、修復を施した機体。大きな変更点としては、コクピットハッチを含めた胸部ブロックの装甲強化、メイン・ジェネレーターの出力アップなどが挙げられる。

メイン武装はRX-99ネオガンダムのG・B・R・Dの技術をフィードバックした新型ヴェスパーを装備。あくまで試験用の機体だが、これら改修によりRX-99を上回る性能を発揮する状況もあったという。

F90IIIY

## クラスターガンダム

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.0m |
| 本体重量 | 9.7t |
| 全備重量 | 26.5t |
| ジェネレーター出力 | 4,550kW |
| スラスター推力 | 120,760kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金<br>セラミック複合材 |

武装
- バルカン砲×2
- ビーム・バルカン×2
- ビーム・サーベル×2
- ビーム・ライフル
- メガ・ビーム・バズーカ

アポジモーター数
- 46

背中
- ビーム・シールド搭載
- ハードポイント数10
- ウェポンラック1

### フォーミュラ計画の集大成 F90の最終形態

F90IIIYクラスターガンダムは、F90シリーズのYタイプ、ヤンゲスター・のミッションパックを実現するために開発された、フォーミュラ計画の集大成として、F90ガンダムF90の3号機をベースに改修は進み、同計画の高性能機、F91ガンダムF91と同時期に開発されている。

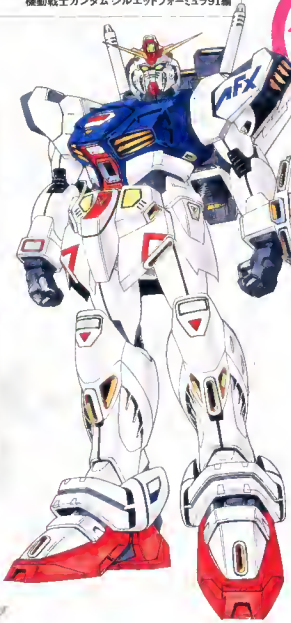
最大の特徴はデータ回収とパイロットの生存率を高めるコア・ブロック・システムの採用で、コア・ファイターはA体ハックパックと合体し、コア・ブースターとして使用可能である。また武装面も充実しており

MSV最終決戦
MSV
F90 & F91編

RX-99(AFX-9000)

# ネオガンダム

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.1m |
| 本体重量 | 7.9t |
| 全備重量 | 20.7t |
| ジェネレーター出力 | 4,710kW |
| スラスター推力 | 95,200kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル<br>(ビーム・バルカン<br>ビーム・ガン装備)×2<br>G-バード(B.R.D) |
| 備考 | ビーム+シールド装備 |



## 次世代のMS開発を担う高性能ガンダム

ハイム・エレクトロニクス社がモビルスーツMS開発の主導権を奪取すべく、宇宙世紀0130年を目指し開発された、RX-F91シルエットガンダムの開発データのフィードバック改修とパイロット負荷を軽減するためのコアファイター・システムを採用した次世代機体。

銃本体にシールドを内蔵するG.B.R.D(General Beam Rifle Device)を持つ

F71B

# G・キャノン・マグナ

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 14.3m |
| 本体重量 | 8.8t |
| 全備重量 | 22.4t |
| ジェネレーター出力 | 3,580kW |
| スラスター推力 | 56,050kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ダブル・ビーム・ガン×2<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・キャノン×2 |

## サナリィの技術を投入した新型ビーム・キャノンを採用

F71G・キャノンの改修型。サナリィから各種データを非合法に入手したアナハイム・エレクトロニクス社は、ウェスハーの周辺技術を獲得し、衛電筒子の可変制御や収束距離の高速変換処理が可能となった。これらのノウハウを投入し、小型ヴェスバーともいえる、本機の新型ビーム・キャノンは実現された

RGM-111

## ハーディガン

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.9m |
| 本体重量 | 9.8t |
| 全備重量 | 24.1t |
| ジェネレーター出力 | 3,540kW |
| スラスター推力 | 99,680kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル<br>ダブル・ビーム・ガン×2<br>3連グレネード・ランチャー×2<br>メガ・マシン・キャノン×2<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・ランチャー |
| 備考 | シールド装備 |

### ヘビーガンをベースにサナリィの技術を転用

RGM-109ヘビーガンの強化型。F71G-キャノンの生産で得たノウハウと連合軍データをベースにアナハイム・エレクトロニクス社で開発された。機体各所のハードポイント設置と、新型ジェネレーター搭載により、性能は高機動機を一回り

XM-05B

## ベルガ・バルス

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.6m |
| 本体重量 | 9.4t |
| 全備重量 | 27.6t |
| ジェネレーター出力 | 5,410kW |
| スラスター推力 | 107,190kg |
| 装甲材質 | チタン合金ハイセラミック複合材 |
| 武装 | ビーム・サーベル<br>デュアルビーム・ガン<br>ショット・ランサー<br>(ヘビー・マシンガン×4) |
| アポジモーター数 | 73 |
| 備考 | ビーム・シールド装備 |

### 全面的に改良されたベルガ・ギロスの最終形

クロスボーン・バンガードの指揮官用モビルスーツ。XM-05ベルガ・ギロスの最終型。あらゆる面で原型機を上回る改良が施されている。ムーンゾーズはウイング状に配されると、細部にわたり改修されている。ゲーク・タイガー隊配備機は、全身赤色の配色となっている

MSV最強伝説
MSV
F90&F91編

XM-07G
# ビギナ・ゼラ

| | |
|---|---|
| 全長 | 15.6m |
| 本体重量 | 9.4t |
| 全備重量 | 21.2t |
| ジェネレーター出力 | 4,980kW |
| スラスター推力 | 92,400kg |
| 装甲材質 | チタン合金セラミック複合材 |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>ヴェスバー×2 |
| メガ粒子砲 | 51 |
| 備考 | ビーム・<br>シールド装備 |

▲本機は通常タイプのほかにカラータイプのヘッドユニットも同梱されていた。クロスボーン・バンガードによるプロパガンダのために作られたとされる。

## F91の技術を投入したヴェスバー搭載型

XM-07ビギナ・ギナと同様、XM-06ダギ・イルスから発展したクロスボーン・バンガードの機体。アナハイム・エレクトロニクス（AE社と関係が深かったクロスボーン・バンガードでは、シルエットフォーミュラプロジェクトの概要も入手しており、本機にはその技術も投入されている。

具体的なポイントとしては、XM-07で採用されていたシェルフ・ノズルに代わり、F91ガンダムF91の代表的な装備ヴェスバーが採用されている。従来型ビーム・ライフルと異なり、本体シェルター直結されたヴェスバーは、運用面でも威力でも、次代を担うビーム兵器といえた。それだけにAE社、クロスボーン・バンガードとも、その解析には積極的だったが、完全再現というわけにはいかなかった。F91版は内蔵のメガコンデンサ搭載により、ヴェスバーを本体から切り離してもある程度は使用可能だが、本機版はコンデンサの解明ができず、切り離しての使用はできない。

その力で、ヴェスバーユニットを利用したAMBACや、スラスターの設置などにより、F91を凌ぐ機動性を発揮していた。またヴェスバー自体のセンサーユニットも増設されており、F91で問題視されていた照準精度のブレを解消している。

ジョイント部

←F91シ ュメス テンサは分離 く 本体から直接エネルギー供給を受 ける方式 そのため 本体から分離 、 この使用はできない ただ 全中精度の向上が図られ ウェスバー ユニ ト自体も本体の機動性向上に寄与している

ヴェスバー

ビギナ系MSのベースとなったビギナ・ギナ

## XM-07
## ビギナ・ギナ

| | |
|---|---|
| 頭頂高 | 15.8m |
| 本体重量 | 8.9t |
| 全備重量 | 22.5t |
| ジェネレーター出力 | 4,790kW |
| スラスター推力 | 99,720kg |
| 装甲材質 | チタン合金ハイセラミック複合材 |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・ランチャー |
| アポジモーター数 | 87 |
| 特徴 | ビーム・シールド装備 |

クロスボーン・バンガードの母体といえるブッホ・コンツェルンが開発した高機動試作機。偵察任務に特化した電子戦機のXM-06ダギ・イルスの発展型。搭載するジェネレーターはXM-05ベルガ・ギロスと同型で背部に搭載したフィン・ノズルにより高い機動性を発揮する。総合性能ではサナリィの開発したガンダムF91に匹敵するとされる。ベラ・ロナ搭乗機は連邦軍に投降する形で失われたが（後に戦闘により大破） 機体の汎性の良さから派生機モデルが多数開発されている。

XM-07ヒキナ・キナをベースとした発展型。F91ガンダムF91との戦闘データを元にしたとされるが、開発経緯や時期などには不明な点が多い。装備面ではフレキシブルウイングスルやショルダーフィンなど、ヒキナ・キナからの進化を感じさせる。ガンダムフェイスを採用した意図は謎である。本機は「レト・ハンカート隊へ配備される予定だった」「搭乗パイロットはトレル・ロナを予定していた」などとされるが、詳細は不明である。

ビギナ・ギナのさらなる発展を目指す

XM-07B
## ビギナ・ギナII

標準装備 → チタン合金ハイセラミック複合材

武装
- バルカン砲×2
- ビーム・サーベル×2
- ビーム・ライフル
- ショット・ランサー（ヘビー・マシンガン×2）
- ビーム・ランチャー

防御 → ビーム・シールド装備

ベラ・ロナ専用機としてカスタマイズされた高性能機

XM-07S
## ビギナ・ギナ
「ベラ・ロナスペシャル」

防御 → ビーム・シールド装備

クロスホーン・ハンカートの高性能モビルスーツ（MS）。XM-07ヒキナ・キナをベースにロナ家の一員であるベラ・ロナ（セシリー・フェアチャイルド）の搭乗を想定したスペシャルMS。カラーリングは赤をベースとし、全身に金色のエングレービングの装飾が施されている。頭部カメラアイは、XM-07の仕様とは異なり、XM-01テナン・ゾンやXM-05ベルカ・キロスと同様のゴーグル状のデュアルセンサータイプを採用している。

# Reading material & Interview

読み物／インタビュー

MSV

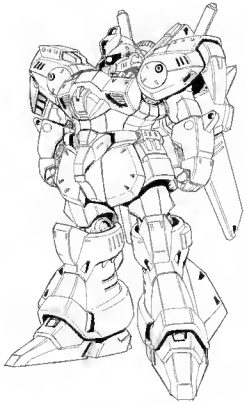
The Second Generation
1986-1993

Interview

渡辺利浩／井上幸一
伸宣会　元サンライズ企画室

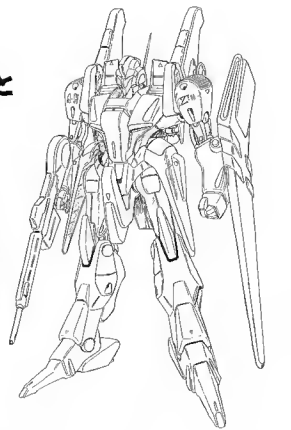
安蒜利明（あんびる）
元バンダイ出版課

川口克己／岸山博文
BANDAI SPIRITS:ホビー事業部



# MSV以降のMSVとリアリティ

## 「物語なき」兵器バリエーションたち



「機動戦士ガンダム」で描かれた、モビルスーツの「現実の兵器のメタファー」という部分をさらに推し進めて描かれた初代MSV。一方続編である「機動戦士Zガンダム」以降のMSVで企画されたモビルスーツたちは、初代とは違ったコンセプトで描かれていくことになる。ここでは、そうした「MSV以降のMSV」の機体群と、現実の兵器の例も交えながら、その関係を考えてみたい。

文：小高正稔

### 兵器開発における「神話」とその再現としてのMSV

近代以降の人類の技術開発において、その一断面ともいえる兵器開発は、ある種の物語性を示すことがある。もちろん個々の兵器開発は、単純に軍のドクトリンや戦略、戦術的要求を満たすべく行われるものであり、現在伝えられているような「過酷な要求性能への技術者の挑戦」といったストーリーは、本来は散文的なものでしかない。しかし軍用兵器の持つ、ある意味で幼児的ともいえるロマンチシズムは、兵器開発行為を、ある種の物語性を持つかのように錯覚させることがある。

例えば、太平洋戦争中の日本海軍の「大和」型戦艦は、造艦技術的な視点で見れば、約20年ぶりに建造された新造戦艦であり、今後建造される戦艦のプロトタイプという意味では、エポックなものであった。だが、本質的にはそれだけのものでしかない。

しかし太平洋戦争における戦艦大和（大和型戦艦の一番艦）の神話的な最期、日本の旧国号を冠した巨大戦艦が、大日本帝国に殉ずるかのように出撃し、戦艦の時代の幕を引くように新時代を象徴する航空機の攻撃によって沈められる」によって、まるで「最後の戦艦」として建造され、失われたかのように語られている。戦艦大和の物語は、国家の興亡や、「戦艦」という艦種の歴史が重層的に織り込まれた結果、後世ではあたかも「昭和の平家物語」的な趣をもって語られることになった。

このような例は、同じく日本海軍の戦闘機である「零戦（零式艦上戦闘機）」や、イギリスを軍の戦闘機「スピットファイア」などいくつもある。これらの機体は、第二次世界大戦直前に出現し、後継機の登場が遅れたこともあり戦争を通じて使用され、勝利の栄光と敗北の悲劇が、その名と分かちがたく記憶されている。ハトル・オブ・ブリテンにおける英国勝利の栄光は「救国戦闘機」たる、スピットファイアの名と共に記憶され、太平洋戦争における日本の勝利と敗北の記憶は零戦の記憶でもある。英国の航空評論家Wグリーンが、「大日本帝国におけるゼロ戦は、英国におけるスピットファイアと同じか、それ以上のものだ」と語るのは、このためだ。

こうした兵器開発の物語性を「機動戦士ガンダム」における「モビルスーツ（MS）」は、ある程度意識的に内包していたが、いわばスピンオフ企画として成立したMSVとともなると、相当程度に再現していたといえる。表面上は散文的なモビルスーツのバリエーション企画にすぎないMSVであるが、現実における実在の兵器や人物をモチーフとすることで、歴史に埋もれた架空の技術体系を作り出し、「民族の神話」のような「大きな物語」として再構築したのだ。

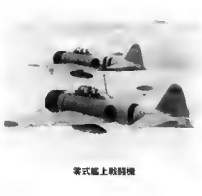
一例を挙げれば、サイコミュ試験型ザクに代表される「ビンソップ計画」関連機は、明らかにジオングの存在から連綿したジオン公国におけるニュータイプ用MS開発史を構築するものであり、架空の技術体系の存在を匂わせる。作中、シャアに向かって「足なんて飾りです」と言う技術士官の発言は、そのシーンのみを切り取ってみれば、未完成の試作機を実戦投入しなければならない末期的戦局への開き直りにも見える。しかし一連の試作機群を見渡せば、前述の発言はザク改造機の運用実績を受けての自信にも思える。サイコミュ試験型ザクは「足」があるデザインから「足など飾り」という方向に開発を進めているからだ。確かに空間戦闘に歩行脚は不要だし、姿勢制御によるABACE肢としての機動性もオールレンジ攻撃が可能な機体なら、攻撃海来の自由度により優先順位は下がるだろう。MSVで語られたビンソップ計画関連機は、これといった挿話を持たないが、ジオン公国の国力を冠した次期のMSと位置づけられるジオングに至る技術的な道程のドラマ性を含んでいる。

しかし、すべての兵器開発が神話的エピソードを持つわけではない。むしろ現実には、散文的に語もれた架空の技術体系を作り出し、「民族の神話」のような「大きな物語」として再構築したのだ。

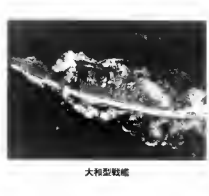
一例を挙げれば、サイコミュ試験型ザクに代表される「ビンソップ計画」関連機は、明らかにジオングの存在から連綿したジオン公国におけるニュータイプ用MS開発史を構築するものであり、架空の技術体系の存在を匂わせる。作中、シャアに向かって「足なんて飾りです」と言う技術士官の発言は、そのシーンのみを切り取ってみれば、未完成の試作機を実戦投入しなければならない末期的戦局への開き直りにも見える。しかし一連の試作機群を見渡せば、前述の発言はザク改造機の運用実績を受けての自信にも思える。サイコミュ試験型ザクは「足」があるデザインから「足など飾り」という方向に開発を進めているからだ。確かに空間戦闘に歩行脚は不要だし、姿勢制御によるABACE肢としての機動性もオールレンジ攻撃が可能な機体なら、攻撃海来の自由度により優先順位は下がるだろう。MSVで語られたビンソップ計画関連機は、これといった挿話を持たないが、ジオン公国の国力を冠した次期のMSと位置づけられるジオングに至る技術的な道程のドラマ性を含んでいる。

しかし、すべての兵器開発が神話的エピソードを持つわけではない。むしろ現実には、散文的に語

スーパーマリン　スピットファイア



零式艦上戦闘機



大和型戦艦

られ、忘れられていったものが大半である。「MSV以降のMSV」で語られた機体群とは、そうしたものたちへあるだろう。そしてそれらの機体群は、MSVとは異なる視点を提供してくれるのだ。

以下、プロトタイプ／量産型と戦域対応型に分け「MSV以降のMSV」について見てゆこう。

## 「MSV以降のMSV」の物語を試作機たち

「MSV以降のMSV」の機体群を見渡して気づくのは「プロトタイプ○○」という機体の多さである。これはMSのバリエーションをフェイクヒストリーとして、機体の開発体系の中に組み込もうとした場合、もっとも簡単にかつ無理なく着想できるからだろう。

一定程度複雑な機械の場合、開発された機体が、いきなり量産されることはまずありえない。初期の試作機によって問題点を洗い出し、修正や改良を加え実用的な機械としての体裁を整えてゆくプロセスが必要だからである。よって「MSV以降のMSV」の多くの機体に「プロトタイプ」すなわち試作機の存在が設定されていることは、自然なことではある。

例えばZ・MSVでは「プロトタイプZガンダム」や「ZII」など、複数デザインのプロトタイプのZガンダムが設定されている。これは複雑な可変機構を持つ上で、動力配置などで従来のMSとは大きく異なるZガンダム開発には、テーマごとの技術実証機が必要であったことを反映しているとも言えるだろう。こうした例は、実際の航空機開発などでもよく見られる。フランス軍が開発した第4世代戦闘機ダッソー・ラファールは最初の製造機はA型とされるが、この機体は事実上の技術実証機であり、アメリカ製エンジンを搭載し、全長、全幅も後の量産機とは異なっている。1機のみ製造されたA型によって検証されたデータにより、空軍と海軍向けの各型式のラファールが完成したのだ。

またリック・ディアスは、当初名称として「ガンダム」が予定されていたが、クワトロ・バジーナ大尉の意見により変更された、という挿話が知られているため、M・MSVに登場したプロトタイプリック・ディアスは、本来的にはプロトタイプ・ガンダムだった、といった推測もできる。プロトタイプリック・ディアスという名称は、リック・ディアスの制式化後に遡って設定された名称という発想である。

生産が進みバリエーションが誕生することで、過去の生産機に遡って型式が振られることは現実にもしばしば見られるので、ゾガンダム試作機がある時点でリック・ディアス試作機に変化することはあり得ることである。「MS-06R-3S」が「高機動型ザクII」とも「ゲルググ先行試作型」とも評称され混乱を見せているのも、高機動型ザクIIの発展機として計画されたMS-06R-3Sがゲルググ開発用の技術実証機に開発目的をスライドし、その途中で名称変更があった結果かもしれない。こうした可能性開発史における挿話としては興味深いものになるが、それだけでは機体を彩る魅力的な物語とはならない。そのためにはおそらく、もっと「大きな物語」が、例えば「大和」や「零戦」を彩った神話のようなものが必要なのだろう。

## 「量産型○○」は忘れられた試作機である!?

こうした問題は、試作機群と同時に「MSV以降のMSV」で見られる「量産型○○」といった機体についても、本質的には同じである。これらの機体は、その名称に反して本格的な量産には至っておらず、その時点で物語性を欠いている。例えば地球連邦軍を代表する量産機であるRGM-79ジムの魅力は、RX-78ガンダムの量産機として構想され、実際に量産された点にある、「あのガンダム」の「量産機」である、ことが、ジムの本質なのである。

ジェガン、ギラ・ドーガ、ゲーマルクなど、各所を徹底改良した発展型の試作機である。

この機体は、カタログスペックとしては最高速度時速680キロの高性能を発揮し、第二次世界大戦末期における日本軍相手に奮闘した初期型である日本／C型や北アフリカでMe-109を相手取ったF型などとなるだろう。しかしP-40には、枢軸国戦闘機の性能向上に対抗するための発展型が計画されていた例えばP-40Kは、2段式スーパーV-1710-121エンジン装備、水滴型風防の装備、冷却システムの更新など

カーチスP-40ウォーホーク

ダッソー・ラファールB

ダッソー・ラファールA

戦後半に実戦投入された日独の新型戦闘機にも対抗可能であった。しかしすでに開発が進んでいたP-51やP-47などの新鋭機と比較して十分な性能優位がないために制式採用されることなく終わっている。試作に終わった量産型MSにしばしば見られる「高性能ではあったが（性能に対して）高コストであったために量産は見送られた」を地で行く機体であるが、こうした機体は、実は珍しくない。

栄光や悲劇に彩られることのなかったこの機体は、神話的な物語を持たないがゆえに、現在では飛行機マニアにしかその存在を認識されていないのである。「MSV以降のMSV」に見られる「プロトタイプ○○」や「量産型○○」は、栄光や悲劇の神話を持たない、半ば忘れられた試作機の系譜に連なるものといえるかもしれない。

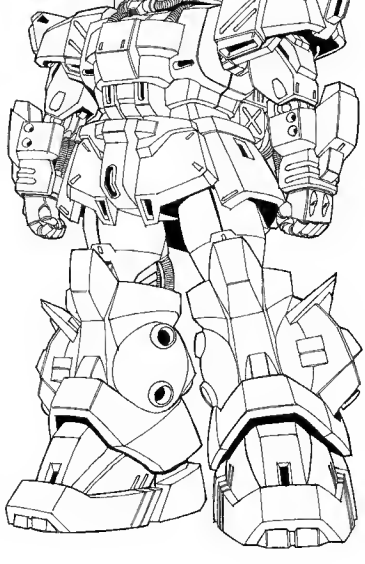
## 汎用性が売りのはずのMSに登場した戦域バリエーション機

一MSV以降のMSV」にはもう一つ、戦域の拡大とともって開発されたバリエーションモデルを中心とした一群のMSが存在する。例えば「陸戦用ジム（M-MSV）」や「デザート・ジム（M-MSV）」、各種の水中用MSなどである。これらの機体は、MSが様々な領域で運用可能な汎用性を持つ兵器ニジオン公国軍製MSも連邦軍製MSも、その開発の初期段階から宇宙空間と重力下での戦闘能力を持つ、人類の活動環境全般で稼動できる兵器として構想されていることを考えれば、ややナンセンスである。特に汎用性がさほど高くないはずの「陸戦用」という戦域想定は、事実上、MSの持つ汎用性を否定しているだろう。

とはいえ、これがまったくのナンセンスかというと、そうでもない点には兵器開発の面白さがある。兵器は技術改良によってアップデートされることもあるし、運用者の事情にあわせてバリエーションが誕生することもあるからだ。

第二次世界大戦中のアメリカ陸軍の主力戦車であるM4シャーマンは第二次世界大戦の米軍を代表する戦車であるが、その中にディーゼルエンジンを搭載したM4A2という型式がある。これは生産量を確保するためにM41のガソリンエンジンに代えてディーゼルエンジンを搭載した型式だが、他の車輌とは燃料体系が異なるとか、米陸軍ではほとんど使用されず、多くがソ連向けの援助に送られた。自国開発戦車にディーゼルエンジンを使用していたソ連軍にとっては、燃料体系の一致するM4A2は扱いやすい戦車であったからだ。

このため新型のM4A3の開発によって生産が停止された後も需要があり、M4A3車体にディーゼルエンジンを搭載したM4A2が製造されている。エンジンの異なる2種類の似たような戦車を製造することは、大量生産が軌道に乗りガソリンエンジンの供給に不安がなくなった時点で意味を失っ



レオパルドⅡA6

レオパルドⅡ試作型

カーチスXP-40Q

たが、ソ連向けという特殊事情によって生産されたものである。陸戦用ゴムやデザート・ゴムといった機体も地球連邦軍の大開発や連用が混乱していた時期の産物として考えれば、ある程度まで説明可能ではあるだろう。そしてこれらの機体は順次、本格的に量産された陸戦型のゴムやジム・コマンドに置き換わっていったのだろう。

あるいはまた、これらの機体は、標準型の機体に機動化された増加装備を追加した機体と考えることもできる。機体そのものは標準型と同一で、戦域の特徴に合わせて増加装甲や各種の通信機器を装備した形のバリエーションは、実際の戦闘機や戦車でもよく見られる。近年でも配備から長期間の経過した戦車などに、各種の電子機器や増加装甲などを追加することは各国が広く実施しており、ドイツ連邦軍のレオパルドⅡシリーズのように、原型車輌のシルエットを留めていないような例もあるが、アメリカ陸軍のM・1エイブラムスシリーズのように、比較的原型を留めているものもあり、その程度は様々である。

一般戦型○○」や「フルアーマー○○」は、原型機を戦域に合わせて抜本的に再設計した機体というよりも、こうした部分的アップグレード機と考えた方が妥当なのだろう。広義のMSVとして、その範疇に「F90」を含めるのなら、設定されたる各種のバリエーションも、これに含まれるであろう。前述の戦域への過剰な特化による汎用性の喪失に対する問題の一つとみなすこともできる。

また「デザート○○」といった砂漠戦仕様であれば、太平洋戦争中のドイツ空軍の戦闘機メッサーシュミットMe109や前述のスピットファイアには「トロピカルフィルター」などと呼ばれる砂漠用の防塵フィルターをエアインテークに追加した仕様がある。Me109F型やG型の機種左側についている細長い箱状のパーツがそれで、この砂漠戦仕様は形式番号に「/Trop」を付して区別された。映画『撃墜王アフリカの星』で有名なハンス・ヨアヒム・マルセイユの乗機もMe109F4/Tropであるが、残念ながら陸戦用ゴムやデザート・ゴムにはマルセイユに匹敵するようなドラマ性を持つ魅力的なパイロットが組つけられていないことが、その存在をマイナーなものにしているともいえるだろう。

## 物語という神話なるMSVそのリアリズムとは!?

アーサー王の存在がなければ、エクスカリバーは単なる「石に刺さった剣」にすぎない。MSVにおけるバリエーション機体の印象の薄さは、英雄の不在とも関係しているのだろう。

兵器開発の神話という側面からは単発の、兵器開発の物語が見えた時、「MSV以降のMSV」は、総じて「神話なきMSV」といえるだろう。MSVで描かれた第二次世界大戦をモチーフにした、栄光と悲劇の光彩を帯びた兵器やパイロットの物語を、それ以降のMSVは、意図的か偶然かは判然としない部分もあるが、相当程度まで排除している。それは結果的に「MSV以降のMSV」を構成する機体群は、ひどく散文的な存在に見せるが、一方でそれが、ある種のリアリズムを担保していることも事実である。

兵器開発の過程では、確かに各種の試作機が製造されるが、それらの試作機の多くは実戦投入されることもなければ、活躍することもない。試作機の任務はそうしたものだから。プロトタイプ・ゴッグ（M・MSV）は、デザインには各部の動力パイプを「強そう」と見るか「洗練されていない」と見るかで、評価が別れるだろうが、公式には一これといった特徴を持たない当然であり、試作機という設定にも関わらず、大活躍を見せたRX・78系の機体よりもリアルではあるのだ。

こうした「神話なきMSV」が描き出す「リアリズム」の中で唯一、例外といってもよいものが宇宙世紀というフェイクヒストリーに依存する、ミリタリズムに対する冷ややかな眼差しと、写実主義的眼差しの葛藤の中に秘められているのかもしれない。

# THE 夢の対決

## 頂上決戦!?
## MS 7番勝負

まさに百花繚乱という表現が相応しい、「MSV以降のMSV」を彩る機体たち。生まれた時代は違えども、長い歴史を通してみるとその中には、コンセプトや境遇が似ているMSも多数存在する。では、それらのMSを比べた時に、どのような結果が生まれるのだろうか？　スペックや武装といった設定面から検証してみよう。

VS

ROUND 01

### ポストZガンダム決定戦！

R0Z-91
**リ・ガズィ**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 24.7t |
| ジェネレーター出力 | 2,550kW |
| スラスター推力 | 67,600kg |
| センサー有効半径 | 18,900m |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>バック・ウェポン・システム<br>他 |

MSZ-006E1
**ZプラスC1型**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 36.1t |
| ジェネレーター出力 | 2,070kW |
| スラスター推力 | 124,200kg |
| センサー有効半径 | 21,000m |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・キャノン×2<br>ビーム・スマートガン |

MSZ-006
**ZⅡ（ゼッツー）**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 31.1t |
| ジェネレーター出力 | 2,130kW |
| スラスター推力 | 114,300kg |
| センサー有効半径 | 14,000m |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル×2<br>メガ・ビーム・ライフル<br>クレイ・バズーカ×2 |

### Zガンダムの後継者といえるMSはどれだ!?

可変MSとしての高い完成度を持つがゆえに、Zガンダムの量産化を企画するのは、ある意味自然な流れといえるだろう。

Zガンダムの性能を総括すると、ウェイブ・ライダー形態飛行での大気圏突入能力、飛行能力（機動性）、MS形態における戦闘力の3つに分けられる。ここで比べる3機種のうち、ZⅡとZプラスC1型は、Zガンダムで問題となった生産・運用に対する高コスト対策として、簡易的な変形機構を持ち、宇宙での機動性に焦点を当てるなど、コンセプトが似ている。細かなスペックは、Zプラスがやや勝り、性能差もそれに準ずるだろうが、変形機構の簡便さはZⅡの利点で、実際の生産・運用面でZⅡに軍配が上がる可能性はある。

後発のリ・ガズィはBWS（バック・ウェポン・システム）により、コスト面の解消と機動性の維持の両立を図った。実際やや旧式化しつつありながら、ネオ・ジオンのニュータイプ専用機ヤクト・ドーガとも渡り合っており（パイロットの技量もあるが）、万向性の正しさを証明した。ただし、どれも大気圏突入能力を持たない点は共通で、量産化のためにまず切り捨てられた機能が、Zガンダムを体現するものなのは面白い。

MSA-003
**ネモ**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 36.2t |
| ジェネレーター出力 | ⇨ 1,620kW |
| スラスター総推力 | ⇨ 72,800kg |
| センサー有効半径 | ⇨ 10,020m |
| 武装 | バルカン砲×2<br>⇨ ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル |

VS

MSZ-007
**量産型Zガンダム**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 30.9t |
| ジェネレーター出力 | 1,830kW |
| スラスター総推力 | ⇨ 73,700kg |
| センサー有効半径 | 11,900m |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル×2<br>メガ・ビーム・ライフル |

VS

MSN-1005
**量産型百式改**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 39.2t |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・カトリングガン |

ROUND 02

## ハイエンド量産型 三つ巴マッチ！

MSの高性能化が進んだグリプス戦役期には、量産機も同様に高性能化が進んだ。ネモは汎甲にガンダリウム合金系の金属を用いるなど、その端矢といえる存在だが、ネモ以外にも量産型Zガンダムや量産型百式改といった高性能な量産MSが企画されている。

これら3機の中で、ネモは最初から量産機として計画されている。他の2機は、より高性能で実験のある試作機を量産化に適合させた機体だ。当然、その過程においてヘース機が持つ特質は失われ、結局はネモと大差ない性能に落ち着いてしまう、という可能性は高い。それでも両機は、スペック上はネモよりも高性能と考えられるが、状況的にそこまでの性能が求められるか、という疑問もある。

また、ネモは宇宙世紀0090年代でも運用され、武装も多彩であった。すなわち拡張性や汎用性が高いといえ、長期間使われる量産MSには重要な要素だ。結局のところハイエンド機といえど、量産MSには状況への適合性と堅実さが求められる、ということなのだろう。

MSZ-006
**Zガンダム**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 28.7t |
| ジェネレーター出力 | 2,020kW |
| スラスター総推力 | 112,600kg |
| センサー有効半径 | ⇨ 14,000m |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル<br>ビーム・ライフル<br>ハイパー・メガ・ランチャー<br>他 |

VS

MSF-007
**ガンダムMk-Ⅲ**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | ⇨ 32.1t |
| ジェネレーター出力 | ⇨ 2,022kW |
| スラスター総推力 | ⇨ 107,500kg |
| センサー有効半径 | 11,500m |
| 武装 | 腰部ビーム・<br>キャノン腰ビーム・<br>サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>他 |

ROUND 03

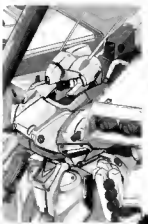
## ガンダムMk-Ⅱ杯 後継者は誰だ!?

初めて本格的なムーバブル・フレームを実現し、その後のMS開発に大きな影響を与えたガンダムMk-Ⅱ。

Zガンダムは、そのムーバブル・フレーム技術の解析があってこそ生まれた機体で、ある意味、後継機といえるだろう。また、ガンダムMk-Ⅲは、ガンダムMk-Ⅱで不十分だと判断された部分（主にムーバブル・フレームの剛性関連など）を改修しており、これもある意味では後継機といっていいだろう。

そんな両者を比較すると、スペックは若干だが、概ねZガンダムが優れている。しかし、ガンダムMk-Ⅲは機体構造が大幅に改良されており、MS形態における戦闘能力は、ガンダムMk-Ⅱより大きく向上しているだろう。ゆえに両者が直接戦った場合、一撃離脱戦法に徹すればZガンダムが有利で、インファイトに持ち込むことができれば、ガンダムMk-Ⅲにも勝機はあるだろう。

それにしても、これほどコンセプトの異なる2つの機体の源流となるとは、やはりガンダムMk-Ⅱの基礎設計は優れている、ということなのだろう。



RGM-89S
**スタークジェガン**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 28.4t |
| ジェネレーター出力 | 1,870kW |
| スラスター推進力 | 76,600kg |
| センサー有効半径 | 20,700m |
| 武装 | バルカン・ポッド・システム<br>ビーム・ライフル<br>3連装ミサイル・ポッド<br>ハイパー・バズーカ<br>他 |

VS

AMS-119
**ギラ・ドーガ重装型**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 28.0t |
| ジェネレーター出力 | 2,160kW |
| スラスター推進力 | 75,000kg |
| センサー有効半径 | 16,400m |
| 武装 | ビーム・ソード・アックス<br>ビーム・マシンガン<br>グレネード・ランチャー<br>ラング・ブルーノ砲 |

## ROUND 04
# 重武装量産機 頂上決戦0093

ジェガンとギラ・ドーガの2機は、第二次ネオ・ジオン戦争における地球連邦軍とネオ・ジオンの主力機ながら、どちらもアナハイム・エレクトロニクス社製だ。それゆえに、本質的なエンジニアリングレベルはほぼ同じといえる。そうした2機の武装面を強化したMSが、スタークジェガンとギラ・ドーガ重装型である。

同機が対決する状況として考えられるケースは、それぞれの母艦を狙う場合と、直接的に戦う場合、といった2つのパターンであろう。まず、前者で肝となる対艦攻撃力は、ミサイル搭載数の多いスタークジェガンが有利に見えるが、ミノフスキー粒子を高濃度で散布された状況下でも、装薬式のランゲ・ブルーノ砲で直接対象を狙えるギラ・ドーガ重装型が、安定した力を発揮できるであろう。

次に同機が直接戦った場合、ギラ・ドーガ重装型のランゲ・ブルーノ砲が、MSに対してどれほどの命中精度を維持できるのかは未知数ではあるが、基本的には、射程の長いギラ・ドーガ重装型の方が戦闘を有利に展開できるだろう。ただ、後年では、対MS戦に特化したスタークジェガンも運用されている。そのため、あらかじめ対MS戦装備を備えたスタークジェガンならば、有利に戦闘を展開できるとみられる。

RX-94
**量産型νガンダム**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 25.6t |
| ジェネレーター出力 | 2,500kW |
| スラスター推進力 | 87,000kg |
| センサー有効半径 | 19,400m |
| 武装 | ビーム・ライフル<br>ビーム・スプレーガン<br>ビーム・キャノン<br>ミサイル×4<br>他 |

VS

MSN-03
**ヤクト・ドーガ　ギュネイ・ガス機**

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 28.0t |
| ジェネレーター出力 | 3,340kW |
| スラスター推進力 | 82,000kg |
| センサー有効半径 | 20,500m |
| 武装 | ヒート・サイフ付ビーム・サーベル<br>ビーム・アサルトライフル<br>ファンネル×6<br>他 |

VS

NZ-222
**サイコ・ドーガ**

| | |
|---|---|
| 武装 | 有線サイコミュ式<br>ビーム砲×2<br>ファンネル×6 |

## ROUND 05
# 第二次ネオ・ジオン戦争延長戦!? ニュータイプ専用機決戦

第二次ネオ・ジオン戦争は、戦闘規模自体は大きくなかったが（影響は大きいが）、規模と比較して多くのニュータイプ専用MSが投入された。特にネオ・ジオンはギラ・ドーガ サイコミュ試験型を原流とするサイコ・ドーガやヤクト・ドーガ、その頂点たるサザビーを開発。対する地球連邦軍はνガンダムとその簡易型ともいえる量産型νガンダムの開発を計画。なお量産型νガンダムは、戦争の長期化を脱した機体とされる。この3機を比較すると、量産型νガンダムは武装や特性的にオールラウンダーで、「エース用の強力なジェガン」としても使用可能だろう。対するヤクト・ドーガやサイコ・ドーガは、投入できる場面がもう少し限定的だ。また量産型νガンダムには、インコム・ユニットもあり、必ずしもニュータイプ（強化人間）の搭乗が前提ではない。こうした点から、戦争長期化の場合でもパイロットは確保しやすい。

ゆえにもし本当に戦争が長期化し、量産されたヤクト・ドーガが戦場に現れても、地球連邦軍は十分に対応可能だったろう。

F91
## ガンダムF91

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 7.8t |
| ジェネレーター出力 | 4,250kW |
| スラスター総推力 | 88,400kg |
| 装甲材質 | ガンダリウム合金セラミック複合材 |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>ヴェスバー×2<br>他 |

VS

RX-99 [AFX-9000]
## ネオガンダム

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 7.9t |
| ジェネレーター出力 | 4,710kW |
| スラスター総推力 | 95,200kg |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル<br>(ビーム・バルカン、<br>ビーム・ガン展開)×2、<br>G-バード(B.R.D) |

VS

XM-07G
## ビギナ・ゼラ

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 9.4t |
| ジェネレーター出力 | 4,980kW |
| スラスター総推力 | 92,400kg |
| 武装 | ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>ヴェスバー×2 |

ROUND 06

# 新時代の主役は誰だ!? 小型MS三つ巴戦

宇宙世紀0100年代から始まったMS小型化の革新は、サナリィのガンダムF91を1つの頂点とする。これに対抗するために老舗といえるアナハイム・エレクトロニクス（AE）社が開発したのがネオガンダムだ。また、この時代に急速に頭角を現したブッホ・コンツェルンでも小型MSを多数開発しており、ビギナ・ゼラはその1つとなる。

これらの3機は、どれもハイエンドに属するMSといえるが、AE社とブッホ・コンツェルンは経びつきが強く、かつ、どちらも非合法な手段で入手したサナリィのデータを参照しているため、ビギナ・ゼラとネオガンダムの機体としての能力値は近い。この2機の違いは、コンデンサを解析しきれなかったヴェスバーを使うビギナ・ゼラに対し、ネオガンダムはジェネレーター直結式を採用している点。

一方「叩き台」となったF91は、通常時は2機に後れをとると思われるが、バイオ・センサー稼働状態におけるリミッター解除時の機動は、抜きん出ているであろう。

F71
## G・キャノン

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 8.7t |
| ジェネレーター出力 | 3,350kW |
| スラスター総推力 | 89,260kg |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル×2<br>ビーム・ライフル<br>4連マシン・キャノン×2<br>他 |

VS

RGM-111
## ハーディガン

| | |
|---|---|
| 本体重量 | 9.8t |
| ジェネレーター出力 | 3,540kW |
| スラスター総推力 | 99,680kg |
| 武装 | バルカン砲×2<br>ビーム・サーベル<br>メガ・マシン・<br>キャノン×2<br>ビーム・ライフル<br>ビーム・ランチャー<br>他 |

ROUND 07

# 新世代キャノンマッチ! 中距離支援MS対決

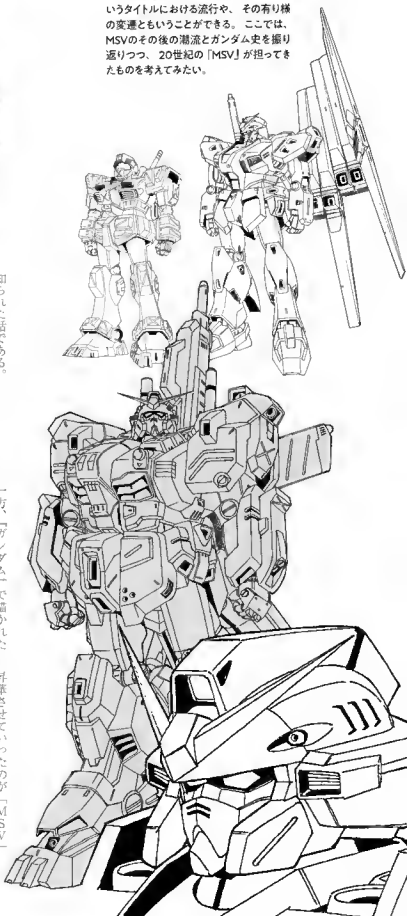
MSが小型化される過程において登場した、火力支援機のF70キャノンガンダムは、サナリィ開発による機体。一方、キャノンカンダム量産化に向けアナハイム・エレクトロニクス（AE）社が設計、製造を行い、ヘビーカンと部品共用を図り、再調整を加えたのがG・キャノンだ。そしてAE社が製造を担当する中で得たノウハウと、シルエットフォーミュラー計画によるノウハウを元に独自開発したのがハーディガンという、多少複雑な関係性がある。それゆえ総合的なスペック面ではハーディガンが上回るほか、G・キャノンの武装が本格的な対MS戦闘を考慮していないのに対し、ハーディガンは対MS用兵装を持っている。こうした点でもハーディガンが優位といえるだろう。G・キャノンも装備を変更すれば対MS戦は可能だが、ここはいっそ運用面で使い分けをするのが現実的だ。

キャノンガンダムを設計しながらも、AE社の事情に合わせることとなったサナリィには不満もあっただろうが、元々が研究機関で、兵器工廠や製造メーカーではないから、致し方ない部分もあるだろう。

# MSV10年史概論

## ～その曙からの変遷を追う～

MSVの変遷は、ある意味「ガンダム」というタイトルにおける流行や、その有り様の変遷ともいうことができる。ここでは、MSVのその後の潮流とガンダム史を振り返りつつ、20世紀の「MSV」が担ってきたものを考えてみたい。



### 現実の兵器がモチーフの一つになるという革新

モビルスーツの始祖といえば、設定的にも作品的にも「ザク」であることは論を待たないだろう。当時、『機動戦士ガンダム』に熱狂した若者たちは、「ザク」にこそ、新しさを感じていたのだ。

デザイン的には、富野由悠季監督の『ガンダム』第1話冒頭で、初見の多くの人が「これがロボットなのか宇宙服なのかわからなかった」という感想を持ったというが、名称に「スーツ」が冠されていることからも、ロボットとヒトの距離を意識的に近づけようという試みが垣間見える。もちろん『ガンダム』のイメージソースの一つとなった、ロバート・A・ハインラインのSF小説『宇宙の戦士』に登場するパワードスーツの影響もそれなりにはあるだろう。そしてそれは、それまでのロボットアニメにおいて、敵が繰り出す怪獣などと区別がつかないような、類型的な「侵略兵器」などから1歩も2歩も先を行った存在であった。

一方、『ガンダム』で描かれたモビルスーツのイメージは第二次世界大戦の兵器を彷彿とさせるものでもあった。ザクのイメージソースには、日本海軍の零式艦上戦闘機など、日本やドイツの兵器のイメージも透けて見える。実際、富野監督も、太平洋戦争中の航空機のファンでもあり、また作品の企画、制作スタッフにも、太平洋戦争中の兵器、戦後の漫画や文学、映画などのエンターテインメントを通じて馴染みの深いものだった。『ガンダム』の世界観創出における、モビルスーツの設定で、ある程度下敷きにされていたモチーフは「SF」と「現実の兵器のメタファー」であった。こうした要素をさらに特化させていき、昇華させていったのが「MSV」と言っていい。

### 大ヒットした初代「MSV」とその後継作「MS-X」

「MSV」の前身は、劇場版『機動戦士ガンダムI』公開直後、すなわち昭和56（1981）年の春に、講談社の『テレビマガジン』のムック『劇場版 機動戦士ガンダム アニメグラフィック』誌上で掲載されていた大河原邦男氏によるイラスト4点によるものだった。「海洋戦用ザク」「水中（深海作業）用ザク」や「砂漠戦用ザク」「ザクキャノン」のイラストから「MSV」につながっていった。このことは本誌の姉妹誌である「MSV-ザ・ファースト」（小社刊）

においても説明している。

これはロボットアニメという架空の存在に、「あるかもしれない」と想起させるようなイメージを与えるには、現実のメカや出来事をモチーフの一部にすることが効果的であることでもある。

世界観においては「リアリティのある」設定や、「子供だましではない」SFアイデアを投入することとし、メカの構築やそのデザインには、現実的なものをある程度下敷きにすることで、より物語やメカを身近に感じさせるのだ。そしてこれが『ガンダム』以降のいわゆる「リアルロボット」の作品へと繋がっていくことになる。

「MSV」は、『ガンダムZ』のモチーフの一つである第二次世界大戦などのミリタリーというファクターを、より特化させていった。そこに描かれた断片的なサイドストーリーは、まさに「ミリタリーファン」ならば、そのモデルがわかるような仕掛けを随所に散りばめており、ガンダムファンの中でも、よりコア、熱心な、な層に訴求するための、ある種、高度で真剣な「ごっこ遊び」でもあった。それらの選びに積極的に乗りたいファンは多く、結果的に「MSV」は大ヒットするのだ。

そして「MSV」のムーブメントは84年頃まで続き、ある意味、独自のオリジナル作品ともいえる「MS・X」へと移っていくことになる。「MSV」では、ある程度ストーリーめいたものはあったが、あくまでイラストが中心で、模型などがイメージを増幅させるためのツールであり、連続性はなく断片的なものであった（コンテンツとしてもシチュエーションが重視されていた）。

これに対し、「MS・X」では携帯に「ガンダム」でも中核的な脚本家の一人であった星山博之氏を迎えるという本格的なプロジェクトであったが、結果的に「ガンダム」の続編である「機動戦士Zガンダム」（'85年）の製作が決定し、道半ばで中止されることになる。これは模型商品を開発、発売するバンダイが「ZガンダムZ」と「MS・X」の双方を並行させるのが実上不可能であった、という事情も背景にあるが、この「Zガンダム」で、一年数年と呼ばれることになる「ガンダム」の作品世界観での「MSV」崩壊は一段落することになる。

## ミリタリーブームの終焉と『Zガンダム』の登場

「Zガンダム」における「MSV」はバンダイが発行していた小冊子である「模型情報（MJ）」から発展した、雑誌「B・CLUB」1986年3月号にて「Z・MSV（当時はZMSV）」が掲載されたことからはじまる。

これは当時の「B・CLUB」の誌面では、オリジナルの「MSV」同様、『Zガンダム』終了後に展開される予定だったと解説されているが、実質的には「B・CLUB」のオリジナルコンテンツと言っていい企画でもあった。

「B・CLUB」は「模型情報」よりさらにコアなターゲット、あるいはメーカーが送るアニメ（特撮）作品それに類する製品を紹介する専門誌といった位置づけで、当時流行の兆しを見せ始めていたガレージキットもフィーチャーしていた（B・CLUBブランドとして商品も展開していた）。そうした位置づけであるからこそ、『Zガンダム』でも「MSV」的なものを育成しておこう、と考えるのは当然の施策だったのかもしれない。発売時点では、プラモデルとして製品展開できずとも、ガレージキットとして製品化するという新たな道があったからだ。実際に「Z・MSV」関連のガレージキットは「百式改」「ガンダムMk・Ⅲ」「ZII」など、人気の高かったモビルスーツが製品化されている。

「Zガンダム」の頃には「ガンダム」あるいは「宇宙戦艦ヤマト」以降、業界入りした若い世代が台頭し、フィルム作りも変化しつつあったが、関連した模型界隈にも、楽艦や展開の進化が続いていたのだ。

この「Z・MSV」が前作である「MSV」との最大の違いは、「ミリタリーリアリティ」をそのモチーフにしなかったこと、と言って差し支えないだろう。

実際『ガンダム』よりはじまったといえる、アニメロボットにおけるミリタリーブームは、「太陽の牙ダグラム」（81年）がその頂点で、83年頃が潮目だったと言える。軍隊組織とその中のロボットを扱った作品は『装甲騎兵ボトムズ』『銀河漂流バイファム』など83年には華やかであった。しかし、その後の作品では背景として軍隊、あるいは軍事組織は登場するものの、「ミリタリー的」なメカを取り入れた作品は、それほど見られなくなっていった。

そして『Zガンダム』もまた、『ガンダム』の続編であることから、軍隊組織もある程度は描いているものの、ストーリー自体も軍隊内の抗争という、ややトリッキーな内容であり、登場するモビルスーツにしても、「ザク」などの量産型の活躍の場は少なく、実質的に物語世界の背景的な存在に埋没してしまった観がある。物語当初の主役メカであるガンダムMk・Ⅱやセティターンズのハイザック、あるいはラサイユの機体にしても、MSV的なリアル路線の延長線上にあるものの、物語中盤以降は、少数生産の特殊機が主流となり、物語上でもメインのキャラクターが搭乗する、可変モビルスーツの戦いが中心になっていく。

た。

新たな主役メカとして投入された、この可変モビルスーツは、「戦え！超ロボット生命体トランスフォーマー」（86年）に代表される、当時の変形玩具の流行が影響を与えており、一大ブームとなった「ガンダム」ですら、時代の流行に対応するということが不可避であったことを感じさせる。

これは一見、「ガンダム」という革新的作品タイトルが後退したようにも見えるが、実際、「ミリタリー」要素が抜けたことこそ、その後のガンダムの40年にわたる隆盛を形成した大きな要因でもある。つまり、表現の幅がより広がったのだ。そして「Z・MSV」はそういった流れの中で、「ミリタリー」とは違う形で形成されていったのである。

## 初代とコンセプトが変わった!?「Z・MSV」

実際、「Z・MSV」で描かれたモビルスーツのデザインを見ると、「リアルさを感じさせるロボット兵器」という、原初のモビルスーツのイメージとは、かなり離れたものという印象を受ける。それは本編の「Zガンダム」の可変機が登場した以降のデザインもまた同様であった。

一方、この頃のロボットアニメには、ミリタリーとは別の世の流行の影が透けて見える。それは80年代のバイクブームである。例えば「Zガンダム」のモビルスーツに採用されたムーバブル・フレーム（84年の「重戦機エルガイム」のムーバブル・フレームが起源）、これは内骨格とフレームが別の部品として構成される機構で、「ガンダム」でモビルスーツの設定として取り入れられた「モノコックフレーム構造」とは真逆の構造といえる。多分、モビルスーツにはモノコックフレームの方が無駄なくできる（軽くできる）だろうが（実物ではないので検証しにくい）、ムーバブル・フレームは、確かに魅力的なアイデアであった。それはおそらく、80年代のバイクブームと不可分ではないだろう。この頃のメカの特徴として、空力パーツであるカウル（フェアリング）が付き始めたことがある。カウルは風よけと保護部品」でしかなく、プラスチックなどの軽い素材が好ましかった。そして、このカウルがカッコよかったのだ。

「Zガンダム」以降の80年代中盤には、アニメ制作スタッフやデザイナーの中にも当然バイク好き数多く、ムーバブル・フレームが受け入れられた、こうしたバイクブームの影響もあった程度はあるだろう。

また、オリジナルの「MSV」が、「○○型」という、使用状況などに最適化された設定のモビルスーツであり、デザイン的なイメージの変更はそれほど大きくなかった機体が多かった。これに対して、「Z・MSV」では、オリジナルデザインをベースにしつつも、意図を大きく変えた能力向上型、あるいは特異機体が多いのが特徴ともいえるだろう。どちらもキャラクターの増加という意味では、同様の存在だが、その方向性が大きく違っている。言い換えればオリジナルの「MSV」が「ほんのわずかの差にこそ、カッコよさを見出す」ことが目的だったのに対して、もう少し純粋に「モビルスーツのカッコよさ＝新規の機体」を追求しているともいえる。機体を描く「線」も多くなり、そのシルエットも機体そのもののだけにとどまらず、様々な付加された部品も含めた上で構成されていた。要は情報量が増えて複雑化しているということだ。

これは先に挙げた「ミリタリー路線からの脱却」ということともちろんだが、新たなキャラクターの創出（増加ではない）でもあり、結果的に「機動戦士ガンダムUC」（10年）や、「ガンダムビルドダイバーズRe：RISE」（19年）といった、後年の作品に「Z・MSV」出身の機体が登場するなど、後世にも一定の影響を与えたといえるだろう。

## ミリタリーへの揺り戻しと新たな潮流の登場

一方で続く「機動戦士ガンダムZZ」（86年）および「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」（87年）の「MSV」は、元はといえば、プラモデルの組立説明書（インストラクション）用の企画としてスタートした、という経緯があり、若干出自が異なっている。

その背景には「ガンダムZZ」のモビルスーツが、本来のコンセプトであったミリタリー路線の要素が希薄になっていく中で、模型サイドからその面を強調するべく企画されたもので、主に既存の機体のバリエーションモデルとして世に出ることとなった一数もそれほど多くない。これは、「Z・MSV」とは正反対の方向性という、コンプト的にはオリジナルの「MSV」に近い物だったが、デザインイメージやシルエット的には、様々な機能付加を施す傾向であり、「Z・MSV」の構成要件に近い、いわば折衷的な企画だったといっていいだろう。このあたりは「ガンダムZZ」本編に登場したモビルスーツも含め、アニメロボットとしてのモビルスーツと、模型商品としてのモビルスーツの間に若干の乖離があったということもうなづける。

90年代に展開された「MSV」は、もとは「SDガンダム」のガシャポン商品のアイテムを増やすために展開された企画であり、これまでの「MSV」とは経緯や性格の異なるものとなった。それ

はつまり、ディフォルメしてもキャラクター性を失わないデザインということもあって、これまでにない独特なスタイルのものも多く見受けられる。また、SDベース＝対象となる児童層に受けるようなデコラティブな姿も特徴の1つであった。ここまで来ると、もはや同じMSVカテゴリーと括るのはどうか、という気にもなるが、その中のアクア・ジムなどは『ガンダムUC』に登場したばかりではなく、ゲーム作品ではお馴染みの機体となっている。

さらに別のゲーム作品では、ガンダムA1～7号機やRX-81なども登場している。さらに、その際には、アニメイティング用にリデザインも行われている。そういった意味では、「歴史的には一存在することに」が重要だった、といっていいかもしれない。

こうした流れの中で、もう一つのMSV的企画である、『月刊モデルグラフィクス』(大日本絵画)誌上で展開された『ガンダム・センチネル(87～90年)』では、ガンダムの描いた「リアリティ」をさらにクローズアップする形で、オリジナルのMSV的な展開を見せ、これは「ファーストガンダム」ファンたちに熱く迎えられた。つまり、「MSV的なもの」は、80年代末に多展化時代を迎えたのである。ここまでオリジナルの『ガンダム』より10年あまりであった。

## 『F91』より新たな時代を迎えたMSV

そして劇場作品である『機動戦士ガンダムF91』(91年)のサポート企画として、争前に展開された『機動戦士ガンダムF90』(90年)では、これまでとはまた違う展開をみせた。それは、『ガンダムF91』の企画を担当していた、サンライズ企画室が、このプラモデルを始めとしたメディアミックス企画にも参画したことだ。

もともと、サンライズ企画室は、ロボットアニメをはじめとしたアニメ作品の企画を作り上げる部署であった。それはアニメーションと玩具で展開される作品の企画を、監督やプロデューサーなどと、作品の骨子やロボットなどのメカデザイン、コンセプトを作り上げ、玩具メーカーなどのスポンサーにプレゼンした上で、企画を通すという専門部隊であった。

もともと『F90』は、『ガンダムF91』が劇場作品ゆえ、商品の旬の期間が通常のTVシリーズに比べて短い。これを補完すべく企画されたもので、F91としてデザインされたものの中で、没案を『F90』の前に試作されたビルストーア』として製品化する企画であった。

主役メカのF90に様々なタイプが存在する構成などは、『F90』の企画の立ち上げ直後、サンライズ企画室が中心となって作り上げた設定である。まさに『F90』は、本家による、商品企画もふみで作り上げられたMSVであり、現在に繋がる、映像制作元のサンライズが、外伝的にMSVを作る」という流れの源流にあたるものといえる。

そして『F90』と本命の『ガンダムF91』のプラモデル販売は好調であり、それを受けて後継といえる、MSV的な作品『機動戦士ガンダム シルエットフォーミュラ91』(92年)が展開されることになる。こちらも『F90』と同様に、漫画や小説なども展開されたメディアミックス作品となった。これらの3作品は、主人公メカが「ガンダム」である、という意味でもMSV企画ではあるが、異色の作品である。そのガンダムたちも、関連性はあるものの、まったく別の機体である。この一連の流れは、現在の『ガンダムシリーズ』の本編映像とは位置的に展開されるMSV企画の関係性に近く、ある意味、MSVが新たな時代を迎えたことを示したといえるだろう。

### 映像からはみ出た「MSV」だからこその自由さがガンダム世界を広げた

現在におけるMSVは文字通りバリエーションモデルとして、本編映像のファンであり、さらにガンプラのファンである著たちにとって、世界観をより楽しむためのサブアイテム的な存在であることは変わらない、定番企画である。しかし、その内容といえば、時代や状況、ターゲット層の推移などにより様々であり、現在では「MSVとは何か」という問いの答えは「バリエーション」とか答えようがない。

それは当たり前と思われるかもしれないが、つまり指向性が広がり続けたということであり、同時に「ガンダムシリーズ」という作品のイメージが広がり続けたのか、ということに対する一つの結果でもあるだろう。

現在のガンダム作品のMSV企画は、アニメ作品本編のスタッフもある程度参加した外伝的なものであり、『F91』以降の形を継承しているといえるだろう。しかし、80年代を中心としたMSV企画は、モビルスーツをデザインするデザイナーはとかく、そのコンセプト作りなどは、少なくともアニメ本編とはまったく別のところで作られていたものが多い。そして、そういった状況から生まれてきたからこそ、自由さがあり、それゆえにバリエーションの幅が広がった、といえるのかもしれない。

現在の感覚からすると、有象無象といった観もなくはないが、これが現在の『ガンダムシリーズ』の裾野を広げるのに重要な役割を果たしたことは間違いがないのだ。

MSV対談

# “その後”のMSVの成り立ちと現場 伸童舎とサンライズとバンダイの関係

伸童舎 元サンライズ企画室
渡辺利浩／井上幸一

『機動戦士ガンダム』の続編として『機動戦士Zガンダム』が放送され、ガンダムがシリーズ化の道を辿ると同時に、次のMSVを模索する動きもはじまっていた。そんな時に、その後のMSV企画に深く関わりを持つ企画会社、伸童舎が活躍していた。少し詳しいファンならば、一度は耳にしたことがある名前かもしれない、そんな伸童舎の実態を、当時を知るスタッフでもある渡辺利浩氏と、伸童舎をよく知る元サンライズ企画室の井上幸一氏に語っていただいた。

## Z・MSVの開始と伸童舎の関わり

――渡辺さんとMSVの関わりからお聞かせいただけますか。

**渡辺** Z・MSVが「B・CLUB」（バンダイ刊）で展開されていた86年～88年の頃ですが、私はサンライズに出向して『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』の宣伝の仕事を手伝っていました。なので「B・CLUB」本誌はもちろん、MSVを含むガンダムシリーズをまとめた、最初の「B・CLUBスペシャル 機動戦士ガンダムMS大全集」には関わってはいないんです。

「逆襲のシャア」の宣伝の仕事の後、サンライズで制作進行などの仕事を経て、伸童舎に戻ったのは改訂版の「新MS大全集」をまとめだしていた頃でした。

**井上** 「MS大全集」では、伸童舎が編集を行っていましたが、当時は横で見ていた感じ？

**渡辺** そうですね。千葉琥（伸童舎ディレクター。当時のタカラから刊行されていた「デュアルマガジン」編集長を務め、小説家として「重装機兵1092」シリーズなどを執筆）さんが当時言っていたのは、「ケイブンシャの大百科シリーズ（勁文社刊）など、それまでに出された「ガンダム」の図鑑ものをアップデートして、大人になりつつあった「ガンダムオタク」に刺さる内容にしよう、という感じでした。

それで現状世に出ているモビルスーツ（以下MS）を全部集めて、図録的に編集したのが「MS大全集」でした。

――現在も出版社は変わりながら、「MS大全集」ですが、その最初のアップデートの頃に伸童舎に戻られた、というわけですね。

**渡辺** 最初の「MS大全集」を再構成しつつ、MSVのロジックを90年代のフレーバーに書き直し、さらに「宇宙紛争史」や「機動戦士ガンダム MS IN ACTION!」などを補完していく感じで、MSにアプローチした本を作ろう、というのが「新MS大全集」でした。

そして私が戻ったのは、実務が始まっていた頃です。なので、あまりコンセプトですとか考えず、まとめていく作業に突入していった、という感じです。

**井上** まとめるにしても積み重ねてきたMSのアイデアやデータなどがないと、できないと思うのだけど、そうした資料などは伸童舎に十分ストックがあった？

**渡辺** 当時の伸童舎には、明貴美加さんや、その下に福地仁さんなどがいて「機動戦士ガンダムΖΖ」の頃には、ガンダムラのインストール組み立て解説書」などに記載されていた機体解説などで「こんなのあったらいいよね」的なアイデアを伸童舎で描き起こし、解説を書いたりしていたんです。その流れで「逆襲のシャア」のインストも伸童舎でやらせていただきました。そうした一環として、MSV的な方法を踏襲したもので「こういう先代機体はどうだろうか」とか、「これならバリエーションもありるよね」というのを考え、バンダイやサンライズのチ

エックも通して進めていきました。この方法は、例えば「機甲戦記ドラグナー」などでもやっていて、「機体の内部構造はこうでいう機能はこうい」とか、「この機能はこういうもの」とか、そういうちょっとした読み物などを伸童舎で作っていたんです。そこで、バンダイ出版から「そうした読み物や図版を流用して、まとめた本を作ったら売れたものになるのではないかというのが「MS大全集」の発想でした。

**井上**　当時の伸童舎には、様々な人材が集まってましたね。

**渡辺**　人の出入りが激しかったのは前の時代で、バンダイから出ていた新書サイズのムック「ENTERTAINMENT BIBLE」シリーズなどの頃には、スタッフはほぼ固定されていたと思います。以前は築山泊みたいな感じで絵描きやライターが散じて出入りしていました。それで1週間のうち10日飲んでた、という（笑）。

**渡辺**　会長の野崎欣宏（よしひろ）一虫プロダクションを経て「宇宙戦艦ヤマト」の企画などにも携わり、企画会社伸童舎を創業。17年逝去）さんなどは、プランナーの沼本清海（虫プロダクションを経て創映社、日本サンライズ（当時）の創業に関わり、後にタカラ（現・タカラトミー）などで多数のアニメ企画に参加）さんと毎晩飲み出していたので、現場の方もそうしなくてはいけないのではないか、みたいな（笑）。

　その後『ジ・アニメ』（近代映画社刊）など月刊誌に関わるようになって「やはり営業はこれからの時代だ」ということで、営業担当の方が入ってきたりしていました。

## 伸童舎は伸童舎としか言いようがない存在

**――伸童舎についてですが、企画会社と野崎さんが伸童舎を立ち上げた経緯などを伺えますか。**

**渡辺**　野崎さんは、出版関係と密な関係があって、児童書などの編集製作をやっていたんです。そうした関係でセル画を描く絵描きやライターが集まっていたんです。学研や朝日ソノラマなどとも仕事をしたりしていましたね。いろいろな編集部と仕事をしましたね。

**井上**　そうした中で、クリエイターと編集部の間を取り持ったり、人と人を結びつけたりされたのも野崎さんでした。

**渡辺**　そうういう人でしたね。野崎さんが開店に関わった、江古田にあった「漫画画廊」漫画喫茶であり、マニアックな多数のクリエイターたちが出入っていたわけです。そこに集まっていたマニアたちが、アニメ作品を深読みしたり別解釈を考えたりしていて、それが商業誌に結びついていった、というのがアニメ雑誌が多数創刊された背景にありました。「アニメ」という言葉に「遊ぶ」というフォーマットの出来上がっていったわけです。

**井上**　当時サンライズでは、オフィシャルのファンクラブを作って囲い込む、というのは反対で、「ファンの皆さんやアニメ雑誌の出版社など周りで盛り上げて下さい」というスタンスだったんです。自分たちで遊んでくれるということです。『機動戦士ガンダム』の時にアニメ本編のムックではなく、アニメの作品世界を扱った「GUNDAM CENTURY」などの本が出ていったのは、そうした事情もありました。そこから誘われてバンダイと組んでMSVをやる展開となっていったんです。

**――そうした当時の真ん中に伸童舎がいた、というのがわかり難い状況ですよね。**

**井上**　伸童舎は出版社でもないですし、アニメ製作会社でもない。伸童舎は伸童舎としか言えない存在でした（笑）。

**渡辺**　そうですね。スタジオぬえとも違って、正体がわかりにくい。

**井上**　今風に言うと「コンテンツを多岐多様な方面にいかに展開できるかということを考える、つまりマルチファンクションを考える会社といえると思います。

　関係といい点では、サンライズの広報などを担当していたのは企画室で、当時その長だったのが、3代目社長となる山浦栄二さんで、その相棒として企画室を取り仕切っていたのが野崎さんの弟子という、飯塚正夫、当時のサンライズ企画室デスク。作品資料の整理保管や素材提供などでサンライズ作品の出版展開の基礎を作った）さんだったんです。

　野崎さんは企画室にも協力していて、そうした繋がりの中で伸童舎が関わって「機動戦士ガンダム記録全集」（日本サンライズ刊）などでも活躍されていたわけです。

**渡辺**　当時の伸童舎のポジションが特殊だと思うのは「Zガンダム」の時に、「Zガンダムのデザインをした藤田一己さんを伸童舎に入れたい、社員として描いてもらう、というケースもあったことです。

**井上**　サンライズには、クリエイターやアーティストを社員として抱えるシステムがないんです。あくまで制作が中心で、他は外部に発注するシステムなんです。そこで野崎さんがその部分をやってくださる、ということでした。そして伸童舎をデザイン会社として、いろいろ協力いただこう、という形になっていったわけです。サンライズではデザインを管理できないですし、制作からの発注であっても無茶な発注に対しては、野崎さんが拒絶するなど、そうした管理もしていただけるだろう、というのがあったと思います。

**渡辺**　「Zガンダム」の仕事をメイ

ンに、スケジュールによっては『アニュアルマガジン』のカットなどを描いてもらうなどもしてました。デザインだけでは収入面でも仕事の管理の面でも不安のあるデザイナーがいられる場所。まさに梁山泊だったんですね。

**井上**　デザイナーだけでなく、小説家の飛といえばか、またデビューしていない物書きも多数在籍していましたよね。

**渡辺**　『聖刻』シリーズを書かれる千葉さんなども『デュアルマガジン』の編集長からですし、嶋地裕行（イラストレーター、『青の騎士ベルゼルガ物語』の挿画や『セーガインベイン』のキャラクター原案などを担当）さんもそうですね。私などは『マジカルセンチュリー』（『みのり書房刊』をやるという噂を聞き、嶋池さんに「一口噛ませてください」とお願いして、伸童舎には潜り込んだんです（笑）。

**井上**　『Zガンダム』の立ち上げ当時、藤田さんの画稿の回収は、私が伸童舎に行ってたんです。当時上司から言われていたのは「野崎さんのところでやるから安心していいよ」でした。お陰様で「書き流星ＳＰＴレイズナー」などの仕事も同時に進めることができました。

**渡辺**　『デュアルマガジン』の頃は、私はまだ読者でしたが、「おかしな連中がいるんだな」とか思ってました（笑）。車にジオラマを積んで全国を回るキャラバンなども、伸童舎がやっていたんです。

## 模型目線の第1期MSVでは第2期MSVは？

**井上**　当時、伸童舎に在籍して活動されていた方は本当に多いんです。今でしたら「メカデザイン／○○○（伸童舎）」のようにクレジットされるのでしょうが、当時はそういうのは入れなかったので。

――本当に「何でも引き受けます」という方針だったんですね。

**井上**　有名どころから無名の新人まで、それぞれ多数のデザイン画が上がってきて、それを富野監督が見て「これ好き、これ使える」というのを集めて、伸童舎に持って行って「何とかして」というところからですね。

――藤田さん、明貴さん、福地さんなど、伸童舎に在籍され、その中でＺ・ＭＳＶなどが展開されていくのは自然な流れだったのですね。

**渡辺**　『Zガンダム』でバーザムなどをデザインした岡本英郎さん（メカデザイナー、『Zガンダム』ＭＳデザイン、『ガンダムZZ』デザインワークス、『機伝伝サムライトルーパー』監督デザインなど多数）もそうですね。バーザムは大ヒットでしたが、今でも再生産されるとすぐ売れてしまうそうなんです。ポジションが二転三転した機体なのですが、それがいっそ「カッコいい」になっていますから。

**井上**　そんなこんなの中でのＭＳＶです。「伸童舎ＭＳＶ」と言っていいのか分かりませんが、伸童舎という現場があったお陰で、いろいろな要素が入り込んでいったわけです。その中には、いかにもヘビーメタル好きが描いたデザインがあるなど、当時の状況も見えてきます。

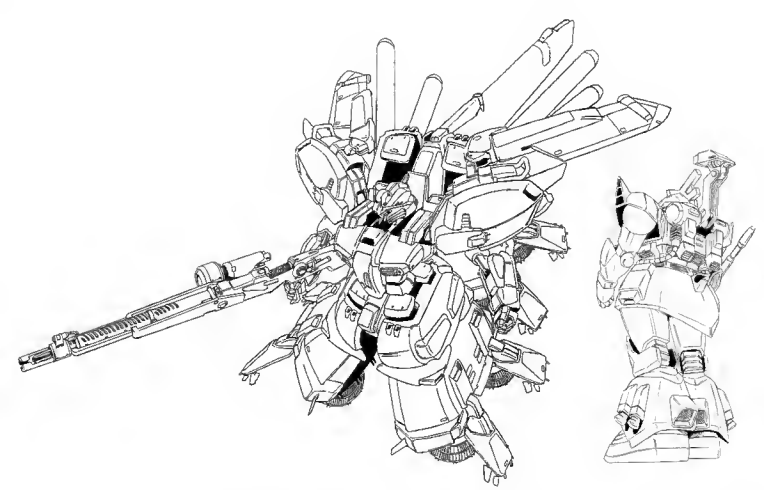
**渡辺**　時代の影響といえば、初代ＭＳＶには『マシンガーＺ』などの影響がわかる人にはわかりますね。

**井上**　初代ＭＳＶは、小田雅弘（ＭＳＶ設定著作など。モデラー集団ストリームベースの主要メンバー）さんなどが模型目線で作っていった企画でした。スケール感やパーツの流用など。そうした視点だったと思います。それが伸童舎の関わったＺ・ＭＳＶでは、絵としてのデザイン、つまり構造から来るマテリアルとしてのバリエーションになっていったと思います。模型では再現できない微細な部分も普通に描いてしまう。それがＭＳＶの幅を大きく広げたと思います。

――ごっこ遊びとしてのＭＳＶがＺ・ＭＳＶの頃になると、できなくなっていった感じもしますが。

**井上**　機甲とミリタリーだったＭＳＶが世界観の中心にあったけれど、Ｚ・ＭＳＶ以降は切り替わったともいえますね。

――ＭＳＶについてですが、「出力○○ｋＷ」というスペック類が



よく表記されていますが、あれはどうやって決まったのですか？

**渡辺**　伸童舎ではないですね。こちらに資料が送られてきた時には、もうそう書かれてたと思います。バリエーションが出てきて項目が埋まっていないところを、見た目で「この機体は、この機体とこの機体の間」とか埋めていただけで、伸童舎で主導して決めていったものではなかったと思います。

**井上**　最近の版にはないのですが、昔の「MSV大全集」には、MSの進化系統図などが掲載されていましたよね？

**渡辺**　ピンナップの裏で全機体を並べてやりましたよ。そりゃあもう頑張って作りましたよ。

ともかく、ある機体について「出力53万です」と言われたら、こちらの機体はそれよりも上か下か、決めていかなくてはキャラ付けができないと思うんです。これについての疑問などは「シャアが3倍速いというのは、何だったのか」論争になるわけです。「速度が3倍だったら、出力も3倍なのか？」というと、意外に本気なのもそうじゃないよね、という言い方があります。そのように担当によって、MSに対する感覚が違ったり、飛行機だったり、戦車だったり、というアプローチの違いがあり、MSというのは、それら全部が合わさって紹介されていった感じです。

その時、担当していた人間の胸先三寸というか、その感覚というのが出ていたと思います。

**渡辺**　伸童舎ではないですね。こちらに資料が送られてきた時には、もうそう書かれてたと思います。バリエーションが出てきて項目が埋まっていないところを、見た目で「この機体は、この機体とこの機体の間」とか埋めていただけで、伸童舎で主導して決めていったものではなかったと思います。

**井上**　最近の版にはないのですが、昔の「MSV大全集」には、MSの進化系統図などが掲載されていましたよね？

**渡辺**　ピンナップの裏で全機体を並べてやりましたよ。そりゃあもう頑張って作りましたよ。

ともかく、ある機体について「出力53万です」と言われたら、こちらの機体はそれよりも上か下か、決めていかなくてはキャラ付けができないと思うんです。これについての疑問などは「シャアが3倍速いというのは、何だったのか」論争になるわけです。「速度が3倍だったら、出力も3倍なのか？」というと、意外に本気なのもそうじゃないよね、という言い方があります。そのように担当によって、MSに対する感覚が違ったり、飛行機だったり、戦車だったり、というアプローチの違いがあり、MSというのは、それら全部が合わさって紹介されていった感じです。

その時、担当していた人間の胸

## どこまでがMSVなのか？その判断が難しい

――渡辺さんが宣伝で関わられていた「逆襲のシャア」ですが、当初、プラモデルのインストなどで、MSVの表記はなくバリエーション機が紹介されていました。

**渡辺**　後からCCA－MSVと名付けられました。宣伝の仕事で関わった時点では、サザビーの型式番号などと決まっていない頃で、「じゃあジオングの次でいいのでは？」といった感じで付けたりしていました（実際のサザビーの型式番号はMSN－04）。

**井上**　分かないというか、「νガンダムって壊れてしまったのにMSVってできるの？」って思うのですが。バリエーションモデルってできなさそうですよね？

**渡辺**　空賀で、フォン・ブラウン工場で完成したワンオフモデルのはずなのに、というのはあるかもしれません。

ただ、その辺りも解釈の問題で、本当にゼロから作れるわけがないのだから、当時の別の量産MSのフレームを流用しつつ、それをアムロが設計し直した、とも考えられます。なので、そこからバリエーション機は生まれてきたと。

**井上**　解釈というのもあるけれど、「どこまでがMSVなのか？」というのも問題ですよね。例えば「頭文字D」の藤原とうふ店トレノ的なものをMSVと考えるのか、そうではなくて「暴走！　ルーベンカイザー」のように、いきなり新事が出てくるようなものもMSVと呼ぶのか。ここが難しいですって（笑）。

**渡辺**　でも『シンハヤブサ』も『グランプリの鷹』も大好きなんですよ。主にギミックが（笑）。

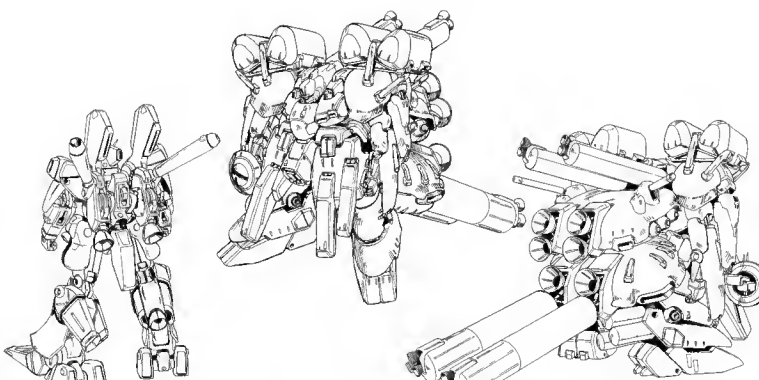
**井上**　つまり本編で見ていたのはグレンダイザー（「UFOロボグレンダイザー」）なのにガソタイガー（「宇宙円盤大戦争ガッタイガー」）のMSVにされちゃったよ、というのが当時のMSVの状況なので（笑）。コレどうする？」という感じですよね。

**渡辺**　そう思っていたら「機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY」って、どう見てもガッタイガーじゃないですって（笑）。

**井上**　「0083」は、すごい苦労して調整（構成ともいいます、笑）しているんですよ。歴史から消えるようにしているわけです。「機動戦士ガンダム　シルエットフォーミュラ91」と同じ感覚で設定されているものなんです。

結局、GPシリーズは、全部の機体が宇宙世紀の歴史から消されてしまいます。

ガンダム試作3号機などは「Zガンダム」の時の、スーパーガンダムに駆がる存在として登場させ



たのですけど、物語の時間軸としては、技術がそこまでまだ追いついていないことを織り込みながら、見た目も要素としたいから、武器を多数搭載したことで成り立った機体です。そういう設計コンセプトです。

**渡辺**　宇宙世紀００８３年を整理でも、宇宙世紀００８７年にあると、スーパーガンダムが実現可能になる、という事ですね。

**井上**　宇宙世紀００８７年になると、ガンダム試作３号機で無理だったものが除かれていったわけです。「大陸だけは残した」とか、「Ｉフィールドは意味がなかった」とか、整理されていくとスーパーガンダムになるわけです。

ともかくＭＳＶか、そうでないかを分けると、一つあるのは制式採用か、そうでないか、ということ。制式採用されたものはＭＳシリーズ。制式採用でないものは、すべてワンオフで作ったというのを含めて、ＭＳＶとに分けられるのではないかと思うのです。もしくはＭＳ・Ｘか。

――ライトなファンからすると、「アニメに出てこなかったものがＭＳＶ」というように判別しているようですね。

**井上**　それだと「Ｚガンダム」でマリン・ハイザック（※ザク・マリンタイプ）とか出てきてしまうと、「じゃあこれはＭＳＶではなく正規品」っていうようにもなってしまうかも。

**渡辺**　それこそ『機動戦士ガンダムＵＣ』では、その大バーゲンですからね。でもそこがまた燃えるです（笑）。本編に出てきたものだけでなく、ゲームで出てきたＭＳだけれど『ＭＳＶ大全集』などの本で取り上げられることでバリューが上がっていく、ということがありますから。

**井上**　「ＭＳＶとはなんぞや」と考えていくと、カオスな世界といえるのかも。

**渡辺**　できるだけ整合性が取れて、仕掛けとしては面白くというスタンスですが、やりすぎたゲームなどもありますね。「コレは違うだろう」という。

**井上**　まあ作品を連結して整合性が取れない、というのは仕方ないですね。「ＺガンダムＺ」とか「ガンダムＺＺ」ですら、繋がらないところがありますから。富野監督は「１作品」ごとに違うことをやっていますから。ましてや別の人が自分の思い入れを込めて作った作品となると、いやが上にも違ってくるのは当然の結果です。

**渡辺**　でも、最初にＭ・ＭＳＶを見た時は、どう消化しようかと思いました。

## 他で作られたＭＳＶも上手く整合性を合わせる

――Ｍ・ＭＳＶもですが、その前の『機動戦士ガンダムＦ９０』や『機動戦士ガンダムＦ９１』のＭＳＶについては、伸童舎は設定関係についてはノータッチですか？

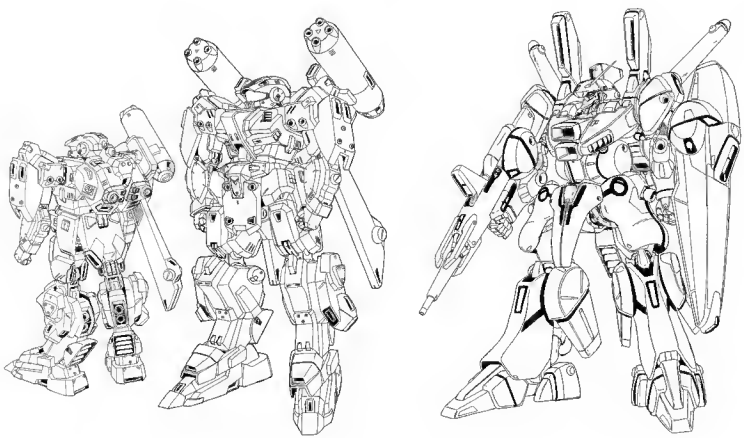
**渡辺**　そうです。あれはバンダイ主導で作られたもので、その過程で決まったものを提供されて『ＭＳＶ大全集』などに掲載した、という感じです。ただ、それを受けて、中原れい（メカデザイナー、漫画家、漆黒出家）さんに漫画をお願いして「その中でこういう展開しますよ」と、チェックを受けて進めた、というのがあります。

特に『Ｆ９１』などは、そうした設定の山でした。続く『機動戦士ガンダム　シルエットフォーミュラ９１』も始まっていくなど、それらを整理してまとめていくだけで、それなりのものができてしまう、といった状態でしたね。でも、その時期にも昔のものに遡った話題や事物もあったので、そちらにも目配りしつつ進めていた、という感じでした。

この『Ｍ・ＭＳＶから『Ｆ９０』『Ｆ９１』の時代には、新しいＭＳＶの形が出てきたことで「今までのＭＳＶもこのポジションでいいのかな」と相互に照らしてみて検討するなどしていきました。

『００８３』のＭＳＶの設定の扱いや、型式番号のナンバリングなども、辻褄合わせを天さんが見事にしていたと思います。

**井上**　あの辺りは本当に見事だったと思います。



**渡辺**　でも例えば「0083」第1話の冒頭で、グワダンの中にドムがいて、それはドム・トローペンのデザインだったんです。さすがに宇宙に砂漠用はいないだろう、ということで、脚部などもよく映らなかったこともあり「これはドム・フユンフだ」と名付けたんですが、それが設定を混乱させることになったようなのです。

気を利かせたつもりで「フユンフ」としたのに、褒めてくださる人もいるのですが、怒る人もいるんですね。バリエーション増やしただけなのに（笑）。

かくして、マスターグレードやら本やらが出るタイミングで「あっ、この場面や設定の言訳（説明）が今できるじゃない」という感じで、戦力の逐次投入をやって消耗戦を繰り広げていました（笑）。

――「MS大全集」にまとめるということでは、「ガンダム・センチネル」の掲載も驚きました。

**渡辺**　「センチネル」はいろいろ問題も多いのですが、バンダイ出版としては掲載しておかないと禍根を残す、という判断だったと思います。そこで第3版の「MSV大全集」に一挙掲載したんです。

**井上**　「センチネル」は権利問題がやっかいなことになってしまったので仕方ないんです。

**渡辺**　あの時期、「センチネル」をやっておかないと「ガンダム」はなくなるかも、という危機感があったんです。このままだと、次のガンダムがなくなるぞ、と……。

――子供たちにとっては「SDガンダム」に類する、ガシャポン（＆カードダス）、BB戦士や元祖SDガンダムがあったのですが、上の世代には確かにアイテム不足だったかもしれません。

**渡辺**　その危機感は、バンダイ出版も強く持っていて、またホビー事業部とは独立した部門だったこともあり、掲載することになったんです。当時、私が「センチネル」の監修をやった、あさのまさひこ（フリーライタープロデューサー）さんのところに行って、画稿などをとーんともらってきたんです。

そして正史にも取り込んでおかないと、という流れから年表も作りました。「ガンダム」の今後を考えて、すごい使命感に燃えていたと思います。

――それ以前は、出版社が雑誌などで独自にやった記事については「それはそれとして出版社側の責任」ということで許されていた部分もありました。

**井上**　それが「これは公式ですか？」という問い合わせが増えていったんです。

――ファンの間でも、そこにすごく、こだわる層がいますよね。

**井上**　ファンの方は「それぞれで楽しんでください」なのですが、出版関係で公式かどうかに関する問い合わせが増えていきました。

そういう背景もあって、対応が変化していったのです。

――公式かどうかはともかく「MS大全集」に載った、ということで「センチネル」もMSVの一つと捉えられるようになっていったと思います。

様々な分野でバラバラに展開されたものを最終的に一つにまとめてMSVのような形にした、というのは大きな功績だと思います。

**渡辺**　コンテンツを時代に合わせて、機骨骸脇してリニューアルしてリブートさせていくというのは大切なことだと思います。

**井上**　ミリタリーや実際にあった機材や、様々素材などから持ってきた、第1期のMSVと、その後の「何でもありでいいから、それを組み込んでしまって、みんな遊べ」という感じの第2期MSVとは、違うものと捉えた方がいいと思います。

そうでないと第1期からのファンは、第2期に文句を言うし、第2期からのファンは、第1期のファンに対して「年寄りがナニ文句言ってるんだ」となってしまいます。それは損ですよね。

例えば機動武闘伝Gガンダムで最初、「こんなのガンダムじゃない！」と言っていた人たちが、後に「面白い」と高い評価をしてくれて戻ってきたような、そんな方向に持っていければいいと思います。

証言

# “その後”のMSV バンダイと模型情報と アンビル星人と

元バンダイ出版課

## 安蒜利明インタビュー

80年代中ごろにブームを起こした「MSV」シリーズだが、その後に展開された同様のMSVポジションの企画群は、どのように形成されていったのか。また、当時のガンダムシーンにおける風潮や時代背景など、時代の証言を得るため、かつてのバンダイ出版より発行されていた『模型情報』で編集長も務めた、アンビル星人こと安蒜利明さんに話を伺った。ガンプラブームとMSVを経た後のガンダムシーンとは、いったいどのようなものだったのだろうか!?

### 出版部署再編のきっかけは『模型情報』の好評

――安蒜さんが「機動戦士ガンダム」そして「MSV」と関わるようになられた経緯をお聞かせください。

**安蒜**　私は85年にバンダイに入社したのですが、この年は『機動戦士Zガンダム』の放送開始の年でした。そのため、当時のガンプラや「Z・MSV」などの企画開発に直接関わってはいないので、その現場を近くで見ていた者としての証言ということで、話をさせていただきます。思い違いもあるはずなので、諸先輩のご指摘お待ちしています（笑）。

――もちろんです。当時バンダイから発行されていた『模型情報』（79年創刊）や、その後の『B・CLUB』（85年創刊）などを手がけた加藤智さんが14年にお亡くなりになられて、お話を伺えないのが残念です。そんな加藤さんとともに、当時その現場にいた安蒜さんにお話しいただければと思います。

**安蒜**　僕はバンダイ入社がメイン・カワグチこと川口克己さんと同期なんです。当時『模型情報』が好評だったことを受けて、人員を増やす話が持ち上がっていました。そこで編集業務を担当していた加藤さんにしてみれば、川口さんが自分の部署に配属される思っていたらしいです。ところが川口さんは営業に配属となってしまい、どうしようかと。そんな時、静岡に配属されていた私に声がかかった、というのが関わった経緯のあらましですね。

――安蒜さんは元々アニメ作品や「ガンダム」のファンだったのですか?

**安蒜**　もちろん「ガンダム」やガンプラは大好きでしたが、マニアなのは隠していました。当時バンダイは、基本的にマニアを採用しないです。担当してその作品やアイテムを好きになっていく、というのが理想で、最初から大ファンで「ガンダム」だけやりたい、という人は避けるんです。そうしないと、その時点で意欲や知識が高くても、その後に仕事として発展させていく場合、足踏になってしまうからなんです。川口さんも採用試験の時には、ガンプラの「川口名人」だというのはできるだけ伏せていたと思います。

――バンダイの営業として、ガンプラを売るのに川口名人のネームバリューが使える、と考えて採用されたのではなくて?

**安蒜**　まあ採用側は知っていたので、そこは、ぜひ別の機会に(笑)。ともかく、そんな経緯で私が加藤さんの下に配属となった次第です。

――その部署はバンダイ出版課の前身なのですか?

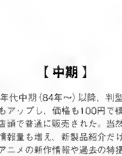
**安蒜**　実はバンダイは「スター・ウォーズ」（78年日本公開）が大ヒットしていた時代に出版に手を広げていました。でもその後は停滞していて、そこは別に『模型情報』は始まりました。加藤さんは、元々プラモデルのパッケージや組み立て説明書などを制作していた、静岡工場のデザイン課に所属していて、そこで『模型情報』の編集と制作を担当していたんです。そして『模型情報』が好評になり、出版事業の再構築のため映像などのプロパティ（新規）事業部に合流します。

――83年にバンダイが組織再編して、新体制になったところですね。

**安蒜**　そうです。当時は試行錯誤もあったと思うので、1年単位で

## 【中期】

80年代中期（84年～）以降、判型サイズもアップし、価格も100円で模型店の店頭で普通に販売された。当然、扱う情報量も増え、新製品紹介だけでなくアニメの新作情報や過去の特選のスチールなども掲載されるとした。また、バンダイ独自のコンテンツも多く、菊地秀行による小説や近藤和久や北嶋拓によるコミック作品も展開。




## 【初期】

創刊時から80年代中盤までは、タミヤから発行されていた情報冊子「タミヤニュース」と同じ判型サイズで展開していた（110㎜×225㎜、いわゆる長3と呼ばれる長形3号の封筒に収まるサイズ）。当時のMSVファンにとってのバイブルといえた「MSVハンドブック」も同じサイズである。当初は製品購入者へ配布される販促物だったが、購入希望者も多く50円で販売されていた。

変わって大変でした（笑）。

――その当時、バンダイピュアルと同じビルの中に「模型情報」や「B・CLUB」の編集部があったのは、そのせいなんですね。

渋谷にあった「B・CLUBショップ」も開店時はバンダイピュアルと同じビルでした。

**安森**　静岡から新宿に移り、渋谷を経てまた新宿、そしてバンダイピュアルが大きくなったこともあり、出版課は分離されて別形でベンダー事業部と一緒になりました。いろいろ移転しました（笑）。そんな中で加藤さんと私の2人体制から始まった「模型情報」も、「B・CLUB」の頃には、8人ぐらいになっていました。

## B-CLUB創刊とZ・MSVの展開

――80年代前半のガンプラブーム以後には、「MSV」が発展し、その次の展開を皆が模索していました。

**安森**　「MSV」で中心となった寺井尚志さんや小田雅弘さんなどによる「MS・X」なども出ましたが、実はこの時期は、掲載能力の「月刊コミックボンボン」（講談社刊）がファミコンに紐足を移しはじめた頃で「ガンダム」やガンプラの優先度が下がっていたんだと思います。そうした中で「Zガンダム」の企画がスタートして「MS・X」も中断になってしまいました。「Zガンダム」に対しても、安井さんは「MSV」のようなモビルスーツのバリエーションがあるはずと考えていたのですが、それを展開する媒体がない状況でした。

そのタイミングで、加藤さんが好調な「模型情報」の延長として「B・CLUB」を構想していくんです。バンダイの新メディアで、MSV的展開よりも良いとの判断で「B・CLUB」で連載していこうとなったのが「Z・MSV」の始まりでした。

――「B・CLUB」は、ガンプラブームで育った小学生、つまり当時の中高生に向けられた媒体だったのでしょうか？

**安森**　いえ、実は「B・CLUB」は、かなり緊張な目標で始まったんです。学生時代に「模型情報」の投稿者でもあった鳥山矢（後の横井孝二）さんなど、才能のある方が多数出てきているのに、そうした才能を活かす土壌がない。彼らに活躍してもらうための媒体が欲しい、ということで加藤さんが構想したものなんです。

実は創刊当時の表紙ロゴには「BANDAI・BRAIN・BANK・MEDIA」と併記されているのですが、その3つの「B」を取って「B・CLUB」なんですよ。

――BANDAIの「B」ではなく……？

**安森**　あくまで3つの「B」です。

なので当初、「B・CLUB」表紙タイトルの「B」の部分は三角（トライアングル）にしていました。もちろん模型のメディアを新たに作りたい、という意志もあったのですが、どちらかというと、才能ある人に活躍してもらいたいというのがきかったんです。

――「B・CLUB」では、ブランドとしてカレージキットなどオリジナル商品も展開していました。

**安森**　それは当時の加藤さんが自由だったというか（笑）。上司たちも加藤さんを泳がせてくれていたんでしょう（笑）。「模型情報」は、静岡工場から模型店に接続するシステムでした。そしてその中に郵便振替用紙が入っていて、それを使った直販もしていたんです。このルートを使えばガレージキットなども展開できる、ということで商品の開発も行っていたわけです。バンダイの営業を通さないから、できたことでした。

――直販ですから利益率なども高く設定できますよね。

**安森**　いやー、価格の付け方が手くそだったもので（笑）。

――自由だったという意味では、「模型情報」などでは、先行情報が掲載されてファンの間で話題になるというのもありました。

**安森**　アレは彼らでけっこう怒られましたよ……というものもあるんですが（笑）。例えば私が入った年の5月の「模型情報」は、Zガンダムを表紙にしているんです。でもあの姿って、決定稿ではなくて、その前段階の資料を基に開田裕治さんに描いてもらったものだったりします。

――当時の「模型情報」や「B・CLUB」は、サンライズの監修をあまり受けすぎていた印象なのですが？

**安森**　いえいえ、怒られましたよ（笑）。ただ加藤さんにしてみれば、「これでいくよ」と静岡に1人向かってきた情報を、そのまま載せていたということになるんです。結果として、最終的に決定稿が変わってしまったという（笑）。

**バンダイのゴリ押しという誤解と邪推**

――「Z・MSV」などで登場するMSの機体のラインナップは、どのような基準で決まっていたのでしょうか？

**安森**　実は当時のバンダイ静岡工場は、開発製造ラインのキャパシティが一杯で、「Zガンダム」の製品ラインナップでも、ジムIIなど最末期に登場したモビルスーツの製品化は追い切れない状況でした。その頃には「機動戦士ガンダムZZ」の商品開発も行われていた上に、「蒼き流星SPTレイズナー」や「パロチェンマン」（※1）などの製造もあり、とても「Zガンダム」のバリエーションをやるだけの余裕はなかったんです。

※1　パロチェンマン：84年から展開されていたデフォルメロボットの変形プラモデルシリーズ「ロボチェンマン」の初評を受けて、ロボット以外のキャラクター（宏心の拳やゴジラ、丸尾町　やケガの鬼太郎などなど）を題材にして展開されたプラモデルシリーズ。いろアイレンを含む各商形やステップアップキットを用いた組立キットで、ゼンマイユニットをの内蔵し変形機能付けるやく、クが付いていた。じつは当SDガンダムの先駆物。

※2　スパイラルゾーン：85年からシリーズ展開されたカプコンコンフィギュア。事情となるフィギュアに有製インナーとプラ製のプロテクトアタを装着するが様で、単機プロテクトやプロ外にビークルなども発売された。兵基スケールは1：12。また、バンダイでシステムインジェクションと初導入したシリーズスタイルでもある。ストーリーは、てリフリー SFテイストで「模型情報」に関連の記や連載が展開された。

## MJマテリアル

模型情報の増刊号に位置づけられる冊子で、一つのジャンルに絞って特集が組まれた別冊。アニメ作品の資料集や作例記事もあれば、当時うぶ声を上げた美少女フィギュアもあれば、読者投稿による人材発掘特集などもあり、1冊ごとにバラエティーに富んだ内容となっていた。まさにB-CLUBの前身にあたる特集ともいえた。

る余力はなく、商品化は考えてなかったんです。「ZMSV」は、安井さんの「自分が生み出したMSVを続けたい」という思いから生まれた企画なのだと思います。ラインナップもウイニングガンダムたちの自由度が高かったと思います。それをサンライズ監修してもらう形でした。

――ウィキペディアなどの記載では、バンダイが「ガンダム」が終わった後のために企画していたが、「ガンダムZZ」が始まったことで一旦ペンディングという記述が見られますが……。

**安森**　それは邪推というか、まったく違いますね。ラインナップについては、例えばガンダムMk-Ⅲなどは、藤田（一広）さんが「これカッコいいですよね」と絵を持ち込んできて、それを見た安井さんが「うん、カッコいいね」と言って、ガンダムMk-Ⅲとしてちゃんと設定をつけようという流れで、連載に組み込まれたのだと思います。大元は、安井さんの方から藤田さんに発注があったのもあり、「ZMSV」という企画は、雑誌媒体のための企画だったと思います。

――全部を藤田さんに発注したというわけではないのですね。

**安森**　連載開始時は藤田さんにまとめて発注したのだと思います。その後のラインナップは、状況に合わせて安井さんが発注していった、という感じです。藤田さんが都合で間に合わないなどの理由で、他の方にお願いしたということもあったと思います。「ガンダムZZ」の後半ではリゲルグやガズエルなどが製品化されたことで、百式改などと同じ流れと勘違いされている、というのはあるかもしれません。一見バリエーションモデルのように見えますが、才能あるデザイナーのクリエイティブを見たい、という、まったく別の流れです。

それと、バンダイが理矢理アニメにリアルタイムの機体を登場させた、という記述がありますが、これも誤解です。あれはバンダイの開発が宮野由悠季監督に「こういうのをプラモオリジナルでやりたいです」と見せたら、宮野監督が「それ面白いじゃない、番組にも出そうよ」というような話になり、そこで初めて番組に使ってもらった、と聞いています。

――なぜか一部のファンの中では、バンダイのゴリ押しが、あたかも真実のように語られますよね。運命共同体ですから、富野監督など制作側の意志に反して、などということは考えられませんよね。

**安森**　バンダイのゴリ押し云々と言われてしまった本もありますが、できたら修正してもらいたいですね。

――「ZガンダムMSV」内で「MSVの機体が登場した時には、マニアの間では評判があまり良くなかったという影響もありそうですね。また、もっと古い時代のロートルアニメなどで、玩具メーカーの意向を中心にデザインが行われた時代の制作側との関係を、そのまま当てはめて考えてしまっているところもありそうです。

**安森**　『Zガンダム』後半に登場したモビルスーツのガンプラが出ていないのに、バリエーション機みたいなことをやって、という思いもファンにはあったんでしょうね。

そもそも、バンダイ出版はガンプラの開発には関わっていないということも、外から見ていてよくわからないでしょうから。

――「別の流れ」というのは、そこですね。出版課は出版課で独立しているし、ガンプラの開発は開発部で別系統だった。

**安森**　そうです。「MSV」シリーズのバックページは加藤さんの功績ですし、開発にアドバイスするなども多かったのですが、あくまでそのレベルで。

――やはり実際にお話を聞くと、世間が思うようイメージと現実との乖離も感じます。

**安森**　さらにMSV関連の取捨が難しい理由に、ガンキャノンのプレイクもあります。ガンキャノンの「SDガンダム」シリーズがマーク10とか20まで増えていったことで、商品化するアイテム（＝モビルスーツ）が枯渇してしまったんです。そこで担当していたバンダイベンダー事業部として、バリエーションを作ることになりました。ただ、いきなり商品が出ても子供たちには認知されませんから、バリエーション機を知らしめる媒体が欲しいとなったんです。そこに加藤さんが乗って、出版されたのが「SDクラブ」（'88年創刊）でした。ですので「SDクラブ」では、「ZMSV」などのバリエーション機についても図鑑的に紹介をしていただけです。

――その後の「ZZ、CCA、MSV」などでは、福地仁さんや明貴美加さんが主に画稿を描かれています。おこたは「模型情報」の製作も行っていた伸童舎の所属でした。

**安森**　そうです。「SDガンダム」の時代には、本当にいろいろな方が関わっています。「SDクラブ」の後半はマイクというSD制作プロダクションにお願いしていたのですが、ガンキャノン用バリエーションのアザイもしており、それこそ何人も関わって作っていた状況でした。機体の名称をメカデザイナー、イラストレーターに提示して、自由に発想して描いてもらっていたのだと思います。

## 公式感を狙ったM-MSV

――その後の「SDクラブ」では、

## 【後期】

80年代後半（88年以降〜）、誌名も模型情報から、ファンもよく知るMJへと変更。価格も200円に上がり、姉妹誌のB-CLUBとどちらを買うか悩んだ中高生は少なくなかったはず（B-CLUBは大体700〜800円前後）。カンダムシリーズのOVA作品情報だけでなく「SDガンダム」関連の情報も台頭してくる。93年に出版課チームがメディアワークスに転籍し、MJは古巣のホビー事業部に移管され、94年に休刊。

## B-CLUB

本文中でも触れられているが、模型情報から発展する形で創刊されたホビー全方位な雑誌。第1号〜第4号までは模型情報の別冊扱いで不定期刊行であったが86年3月発売の第5号からは月刊化され、98年2月まで発行された。誌面表紙には常に「BANDAI・BRAIN・BANK・MEDIA」の文字が記されている。またインタビューにもあるようにB-CLUBの「B」は3つの「B」か元になっているそうである。

「M・MSV」などが展開されていきますが、それはガンヤボンと深い関係がありそうですね。

**安森**　この時代については、最初の「ガンダム」世代が成長して、卒業するなどしてファンの世代交代が起こっていました。なので私自身も把握しきれず「M・MSV」については、詳しいことはわかりません。

――大河原さんをフィーチャーした点についてどう思いますか？

**安森**　一機動戦士ガンダムF 90」、「機動戦士ガンダムF 91」に向けた原点回帰と再構築、ライン整理などが考えられますが、何より大河原さんへのリスペクトだったのだと思います。そこで大河原さんの監修を受けて進行することになったんだと思います。

――ガンダム4号機から7号機まで、またプロトタイプザクのような、以前の書籍では、文字設定のみだった機体がここで登場します。

**安森**　それらも最初はガシャポン用に考えられたものでした。それにリアルな設定もあった方がいいだろう、となり頭身を上げた絵を描いていただいたという感じです。それらを鑑みると「M・MSV」もまた、ガシャポン向けを前提として始まった企画だと思います。それこそ今では BANDAI SPIRITSから「Z・MSV」などのバリエーション機の商品が出されるようになりましたが、それもようやく最近になってからですよね。

――ようやくバンダイに、それらの過去作をラインナップできる余裕が現在になってできたということでしょうか？

**安森**　ユーザーニーズに優先順位をつけると、どうしてもここまで待つ必要があった、といえるとも思います。

――「Z・MSV」「ZZ・CCA・MSV」や、その後に展開される「F 90」などは、商品は出れるとともにユーザーに提示する世界観を広げておこう、この方法で「MSV」は大きくなっていったのだから道は残しておこう、という意志があったからとも思えます。

**安森**　そこまで考えていたわけではありませんが（笑）。最初の「MSV」はプラモに乗って、あわよくばよという間にラインとして確立していきました。しかし「Z・MSV」以降のこの時代は、ファンの世代交代が起こり「その隙間を埋めたい」と思っていた人たちが隙間を埋めていったため、何となく散漫で体系化されないのでわかりにくくなっている、というのはあるかと思います。

――当時のバンダイには、ガンプラブームの後、プラモをもっと延ばそうという雰囲気があったのですか？

**安森**　ブームはもう意識していませんでした。それよりユーザーはいるのだから、そのユーザーが求めているものを作ってあげなくてはいけないよね、というのが強かったです。もちろん企業として新規開拓していかなくてはならない、というのは当然ありましたが、あくまでも1度とは思ってなかったですね。ただ、武者頑駄無などと「SDガンダム」シリーズのブレイクもあり、ここまで大きくなったのだから、まだ何かあるはず、という思いはそれに比例して大きかったと思います。このまま終わっていくはずはないと。

――「SDクラフ」では小説も連載され、ゲームの外伝なども、「ガンダム」の正史に入らないかなり自由な題材も取り上げていました。

**安森**　サンライズは「ガンダム」を好きな人たちが、良いものを作ってくれれば面白いよね、「ガンダム」には、まだまだ可能性がありそうだね、というスタンスだったと思います。「サイバーコミックス」（88年創刊）なども、そうした雰囲気の中で展開したムックでした。

――この時代、バンダイは「模型情報」に「B-CLUB」そして「サイバーコミックス」と、多方面に向けて出版していましたが、その中のコントロールは大変だったのでは？

**安森**　その辺りは本当にそういう時代だった、と言うしかないです（笑）。「サイバーコミックス」などは原稿が上がってから、サンライズに見せてOKをもらっていた状況でした。当時、「ガンダム」を熱心に追いかけていたのは、ジャンルが微妙に違う「ホビージャパン」や「モデルグラフィックス」といった模型誌だけでした。

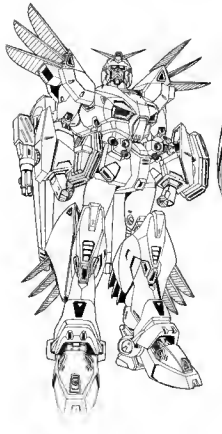
――ファンもパロディについて、原作のアニメとは別物という意識で読んでいた時代でした。人気にあやかっているとしても、「アニパロの内容については出版社に責任がある」という共通認識がありました。サンライズはあくまで監修するくらいの。それが、機動戦士ガンダムF91」の時代になると、「F 90」などを含めてサンライズ公認という形になりました。

**安森**　「F 90」シリーズを「MSV」というかどうかは微妙なところだと思います。宇宙世紀の正史の文脈の中に取り込もうとして展開した企画ですから。

「F 90」は、アニメ化を足掛かりとしたアニメ的な作品として、バンダイさんでは企画していました。

――「MSV」としての企画ではなく、アニメ作品としてのプロジェクトだったのですか？

**安森**　同等の扱いです。ですので「MSV」という名称もできたらやそう、ということだったんでしょう。「F 91」に至る物語の中にあるものとして捉えていこう、「F



91」に繋げるためコントロールできる範疇のものにしないといけない、という考えですね。

## ゲームの進化と関わる『F90』以降の流れ

――これ以降の「MSV」については、原作としてのアニメと同時に企画されていて、外伝のような位置づけになっていきました。

**安藤**　「F90」辺りから、ゲームで物語を展開する必要も生じて、そのためにバリエーションが必要になってきたと思います。バンダイが作るゲームの質も上がり、サンライズとの連携も密になっていきました。物語をしっかりと組み込んでいく時代になってきたわけです。

一方で正史に影響を与えないようにするためにも、バリエーションが増えていったということだと思います。大きな流れとして見ると、最初の「MSV」はプラモデルの需要によってバリエーションなどは「SDガンダム」の需要によって増えていき、そして3つ目の「F90」以降になるとゲームの需要によって増えていった、と言えると思います。

2001年に『ガンダムエース』（現：KADOKAWA刊）ができたというのも大きいと思います。常に発表の場が確保されているので同時展開が可能になったわけです。

――最後に『機動戦士Vガンダム』で展開された「V・MSV」についてはいかがでしょうか？

**安藤**　この少し前から担当を離れていました。私を含む出版武チームが、（株）メディアワークスに出向（2年後に転籍）することになり、バンダイのPR誌である以上「模型情報」は「ホビー事業部で発行するべきでは」という判断で、ホビー事業部にお返ししました。移行後しばらくは、引き続き安井さんが中心だったと記憶していますが、「V・MSV」の頃は、仲宣舎が製作していたように思います。

私の最後の「模型情報」関連の仕事は、92年の「SUPER MJ 機動戦士ガンダム 最新MS画形資料集」でした。

――商品では「マイクロガンダム」（※3）のシリーズで、Vガンダムやキャノンタイプなどが発売されていましたが、「V・MSV」もそうした商品と連動していたのでしょうか？

**安藤**　「MJ」もホビー事業部発行になっていましたから、しっかり連動していました。ただ「Vガンダム」の劇中登場モビルスーツは、従来の兵器体系とは異なる設定でしたから、バリエーションも苦労されたと思います。

――この時代のモビルスーツは、汚しやウェザリングなどは施さず、F1マンソンやレーシングバイクのビカビカのカウルのようなイメージがありますね。そうした時代の影響もあったのではないかと思います。

**安藤**　F1ブームもありましたからね、ボディの大胆なマーキングなどにF1の影響が現れています。私もカッコいいと思いましたよ（笑）。

――先ほど、バリエーションが増えていく中で、体系化ができずに把握しにくくなった、というお話がありました。確かに「ごっ散らかった状況」と解釈できますが、だからこそ、あれほどの数のバリエーションを誕生させられた、とも言えると思います。

**安藤**　当時、皆が全力疾走している最中で、その後どうなるのかを考える余裕はなかったんですね（笑）。それに企画に関わった人数が多い上、関わり方も人それぞれで、私も今、少し混乱しています（笑）。

――体裁としても最初の「MSV」は、第二次世界大戦モノで敷きにして機体の特徴などを考え展開することでまとまっていたのですが、「Z・MSV」以降では、それがどんどん難しくなっていった印象です。

**安藤**　第二次世界大戦の文脈に沿って展開したことで、最後はティーガーⅡが出ておしまい、というようにまとまりがいいですね。

――逆に「Z・MSV」以降の展開は、受け手がそれぞれ考察できる余地があって、それが現在ではとても良いと思えます。デザインも「なぜこうなったの？」と考えるきっかけを与えてくれますね。

**安藤**　それもやはり、「ガンダム」という作品の懐が広かったからだろうと思います。

※3　マイクロガンダム：'94年から発売のシステムインジェクションを利用したアクションフィギュアシリーズ。全高100mm程度、多色成形で色分けされ、MSハンカー風のランナーから切り離して完成する、実際、動かして遊んだ。脚元台座の関係から関節部が固い傾向で、あらかじめ可動させるには時間がかかった。Vガンダム、Vガンダムオーバーメンタイプやフルアーマーガンダム、原機動型サブミとどがライナップ。

安藤さんは現在、一般社団法人「アニメツーリズム協会」所属で「訪れてみたい日本のアニメ聖地88（2020年度版）」を担当されている、10月29日発表予定ということなので興味のある方はぜひチェックしてほしい！　また、2019年度版を閲覧することもできる、キミの身近にもアニメの聖地があるかもしれないぞ。

**ホームページアドレス**
**https.//animetourism88.com/ja**

MSV対談

# “その後”のMSVとバンダイのガンプラとの関係性

BANDAI SPIRITSホビー事業部
川口克己／岸山博文

今でこそ『ガンダムシリーズ』におけるMSV（モビルスーツバリエーション）といえば、オフィシャルな関連企画として、その一翼を担っている。そうした企画に付随してガンプラをはじめとした製品が展開されるのは、日常的といえる光景となった。しかし、80年代後半、『ガンダムシリーズ』が展開される際、時代も昭和から平成へと移る時期には、現在と様相が大きく異なっていた。そうした現在とは違うガンダムとガンプラの関係性を紐解くべく、当時を知るBANDAI SPIRITSホビー事業部の名人こと、川口克己さんと、岸山博文さんの両名に語っていただいた。

## それぞれの事業部が理想を追い求めていた時代

――「機動戦士Zガンダム（以下、Z）」以降も「Z・MSV」など、「MSV」という名称の企画がいくつか立ちあげられましたが、ホビー事業部としてはどのように関わられたのでしょうか？

**川口**　過去の状況からもおわかりになると思いますが、Z・MSVは、基本的には「B・CLUB」（バンダイ出版）主導の企画なんですよ。当時、『ガンダム』の商材は、ホビー事業部のガンプラとは別に、ガレージキットも商品として前面に出ていた時期でした。そこに元バンダイ出版課の加藤（智）さんが考えていた「若いクリエイターを積極的に使いたい」という意図がうまくかみ合っていたんでしょうね。僕の認識では、（Z・MSVは）ホビー事業部としてのコミットはなかったと記憶しています。

**岸山**　一応、「B・CLUB」の創刊から1年くらいの間は、静岡のホビー事業部の中にバンダイの出版課がありました。その出版課が外の部署ということになり、ホビー事業部から外れて、東京で事務所を作って動いていく流れになります。ただし創刊から1年までは、ホビー事業部の中にある部署として動いていたわけですが、加藤さんが進められていた企画ですからね。加藤さんは安井尚志さん（MSVなどの展開を中心で進めたフリー編集者）を見ながら仕事のスタイルを模索しており、バンダイ各事業部の『ガンダム』オリジナル企画の情報を収集して、本誌の中に盛り込んでいく流れでした。実はZ・MSVは、「MSV」から連なるベンダー事業部のカプセル商品の企画として、当時、出向だった「にゃご神（土屋信一善氏）がサンライズと共に設定製作をしていたものが原点でした。

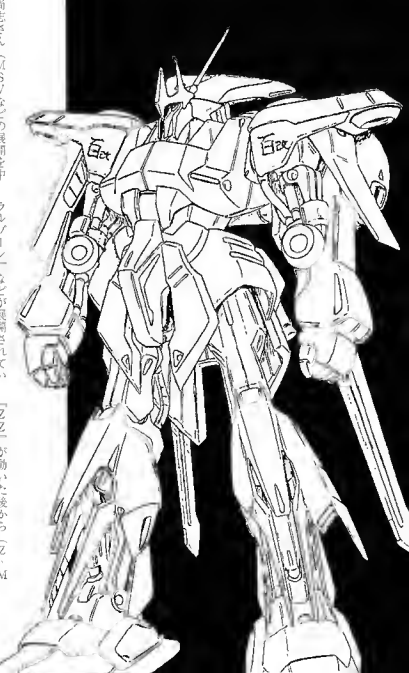
――ちょうど川口さんがバンダイに入社されたあたりの時代とリンクしますね。

**川口**　僕は1985年4月入社で、当時、『模型情報』では「スパイラルゾーン」などが展開されていました。「B・CLUB」が創刊するのは、1985年10月です。僕自身も入社後に『機動戦士ガンダムZZ（以下、ZZ）』の商品企画を担当して、その後は『機甲戦記ドラグナー』に移るわけですが、ホビー事業部ではMSV関連の話は持ちこがりませんでした。それこそ『Z』から『ZZ』までを継続して企画が動いていたわけですから、そこで話が出ないとなると、ホビー事業部としては関わっていないという思いはありますね。

――百式改などは、ガンダム・チームに入っていても不思議ではない機体でしたし。

**川口**　そうですね。状況としては、『Z』が動いた後から（Z・MSVは）本格化したのではないか、という印象があります。特に『Z』の組立説明書などの記事は、基本的に仲重喜さんにお任せしていて、『機体のバリーション要素を連想させる』という方向性でお願いしていましたから。方向性としてはMSVと連動しますね（注：Z・MSVの初掲載は『B・CLUB』1986年3月発売の4号の百式改から。ガンプラの組立説明書のフォーマットでいえば、『ZZ』で1つの完成形が確立された感覚があります）。

――たしかに『機体のバックグラウンド』を補完するアイテムとして、組立説明書の記事は欠かせない



## B-CLUBと模型情報

➡「B-CLUB」の最初期は、模型情報（M.I）の増刊という形でスタート（その前身がM.Jマテリアル）。86年の3月末（第5号）から月刊化し、98年2月まで発行された。単なる商品情報だけでなく、より幅広い層に向けた一種の模型情報誌となった。アニメ作品の新作情報や作例記事だけでなく、時にはグラビアや企画事実などバラエティーに富んだ内容である。「ガンダム」でもメカデザインを手がけた、故田一己氏による「ZMSV（当初はハイフンなし）」以外に、出渕裕氏による「オーラファンタスム」といった人気コーナーが連載されていた。インタビュー中でも触れられているように、自社コンテンツの拡充、次代のヒット作を標榜していた、と聞くと、この野心的な誌面作りも納得できるというもの。

⬅タミヤで販促物として配られていた「タミヤニュース」を発端として製作されたという、パンダイの情報誌。当初はタミヤニュース同様、販促物として配布されていたが、模型情報のみを求める子供（大人も、笑）も多く、後に有料化され利益が大きくなり販売されるようになった。88年から誌名を「MJ」へと改名し、94年に休刊となった。記事はプラモデルの新製品発売情報だけでなく、新作アニメや玩具商品などの紹介記事なども掲載されていた。読者投稿コーナーの投稿者の中には、その後　プロデビューを勝ち取った人も少なくない。

**いファクターとなりました。**

**岸山**　それは一機動戦士ガンダム逆襲のシャア（以下、逆シャア）でもそうです。νガンダムは、新キャラクターでしたし、単純に映画だけで想像力を膨らませてもらうのは難しい。そこで「ネタを提示してあげないと、模型としても触ってもらえないのではないか」と考えまして、そのメッセージとしてネタを仕込んでいたのが理由でしょうね。このスタイルは一機動戦士ガンダム0080　ポケットの中の戦争」でも受け継ぎます。技術背景やメカの図解も描かれていて、そういうところをきっかけに興味を持ってもらおうと思っていました。

**――「Z Z」の組立説明書や機体背景が書かれたのは、最初のMSVの成功も意識としてあったのでしょうか？**

**川口**　うーん、そもそもみなさんご存知のとおり、「Z Z」は、明るいガンダム、という作品の方向性が打ち出されていました。我々としては「本当に大丈夫だろうか？」という気持ちもあり、カッコよさやミリタリーテイストを匂わせたい、という意図がありました。

特に「Z Z」はメカデザインが難航していたタイトルでもありますし、もしその段階でMSVが動いていることをアニメスタッフやホビー事業部が知っていたなら、何かしらの運動があってもおかしくはありません。ですがご存知のとおり、製品では一年戦争の機体をアレンジして出していくような状況ですからね。何かしらネタがあれば、採用されているのが当然だったと思います。

**――知らぬところで企画がスタートしている……というのも時代を感じます。**

**川口**　当時はグレーで、何でもできた時代ですからね（笑）。結局、最初のMSVに関しても、あくまでも講談社の企画じゃないですか？　「機動戦士ガンダム」のネタが切れそうだから、雑誌メディア発信でバリエーションを見せる。それがゆくゆくは商品化に繋がるという。いわばここで雛形ができたわけですが、そのあたりは加藤さんも意識していたと思います。「B-CLUB」でデザインを発表して、それをコミカライズやガレージキットという形で伝えていくという。

### ミリタリー一辺倒ではなく自由なスタイルで取り組むこと

**――当時は藤田一己さんをはじめ、若いクリエイターが多く参入してきた印象があり、それも方向性を変化させた要因かとも思えます。**

**川口**　そうですね。特に大きかったのはゲームの影響だと思いますよ。85～86年くらいまではガンダムⅡ＝プラモデルでしたが、それ以降はガンダム＝プラモデル＋ゲームという印象が強くなっていきました。そういう意味では今までのプラモデルの視線ではない方向性が現れたんだと思います。

そういう世代がやりたかったのは、例えば「機動戦士ガンダム外伝 THE BLUE DESTINY」のような、MSVを自分たちのゲームの世界で作りたい、動かしたい」という方向性です。結局、商材に厚みが出ると関わる人の輪が広がっていくわけです。その中からアニメやマンガとは異なるオ能が出てきた時代だったといえるでしょう。

**――それは一年戦争とグリプス戦役とのMSの違いに表れていると感じますね。**

**川口**　Z・MSVを見ると、まさに「Z」らしいと感じられる部分は強くあると思いますね。それこそ一年戦争と違って、ワンオフの機体がボロボロ出てくる世界観ですから。「なるほど」と思えるラインナップでしょう。ただ、基本的にガンプラブームとは状況が違うわけで、過去のMSVをなぞるような展開にはならないんです。わかりやすいんぱ「Z」は我々とは違う感覚で「ガンダム」に接する人が多かったんです。それはミリタリーだけではなく、SFの影響も濃いですし、モータースポーツ的なニュアンスを込める人も

**HG MSZ-006 Zガンダム**
1990年5月発売

**HG RX-78-2 ガンダム**
1990年3月発売

**HG MSZ-010 ZZガンダム**
1990年3月発売

**HG RX-178 ガンダムMk-II**
1990年7月発売

### ガンプラ 10周年としてのHG

ガンプラ発売10周年を記念したモデル。90年の3月～91年7月まで展開された。種類は全部で4種類。当時のバンダイの技術力をすべて投入した製品として、歴代ガンダムをキット化した。多色成形やスナップフィットにより、塗装をせずともクオリティの高いモデルが手に入る、という点が最大のウリである。後に続くガンプラの仕様フォーマットの原点といえる製品であろう。いずれも現行品ゆえ、現役発売中である。ただし、01年に「HG RX-78-2ガンダム」のみ絶版となっている。

いた。「ガンダム」は綺い部分があって、いろいろなイメージを投影して形作られた作品ということが大きく、そこにいろいろな人が引っ掛かったという。

――**「ガンダム」以外の要素がクリエイターに取り込まれたという。**

**川口** ええ、単に「ガンダム」だけでは語れないでしょう。特に1982年に「超時空要塞マクロス（以下、マクロス）」が放送されたのは大きかった。我々は「ガンダム」に1945以前のミリタリーをイメージしたのですが、「マクロス」で現用機が入ってきたわけですから。「Z」に最新のSF要素が取り込まれ、変形という要素が組み込まれたのも、「そのままではダメだ」という意識があったのではないでしょうか。

――**それぞれが満足するようなスタイルを築き上げていったような印象も受けますね。**

**川口** そうですね。「Z」は非常に期待感の高い作品でした。

俺の見たい「ガンダム」と違うかもしれない」という人が増えてきた点は否めませんでした。やっぱり僕らとしては、ヒート・ホークとビーム・サーベルで斬り合うような、宇宙世紀の泥臭い戦争というイメージしていたんです。

何えば「一連の兵士たちが叫びながら、わらわら来る感覚」という、そういう雰囲気は「Z」には一切ありませんでした。「ああ、「Z」はこういう戦争なんだぁ」って思ったわけですよ。時代も物語もキャラクターも違うわけだし、それは当然のことです。また、実際に「Z」のデザインや表現が、現在に至るMS描写を広げたという影響も無視できません。ただ、それに満足した人がいれば、満足しない人もいたわけですから、Z・MSV的なものが生まれたことも必然だったのでしょう。それぞれに好みが違いますけど、今みたいに批判されるわけじゃなくて、それぞれが共存していた良い時代といえますね。

――**当時の状況を踏まえると、たとえば「ガシャポン」でリリースするために、新たなバリエーションを作る、という流れもあったと感じられます。**

**川口** カプセルトイなどのベンダー商品だけではなく、ゲームの場合もそうなんですが、新作を出すためには、新しいMSが何体も必要になるんですよ。それでどんどん増殖していった側面はあると思います。それぞれのプロジェクトが勝手に……という語弊があるかもしれませんが、自由にやっていたことも影響があるでしょう。そのすべてを把握している人間はいなかったわけですから、様々な形になって表れてくるわけです。

**岸山** また当時のSDガンダムの商品カテゴリーを振り返ると、「武者頑駄無」はホビー事業部、「ガンドランダー」はベンダー事業部、「コマンド戦記」はボーイズ事業部というように、テリトリーの違いなど意識があったんですよ。ホビー事業部で他のカテゴリーをやる時には、やっぱり仁義を通すことが必要でした。

それを包括して取り組んでいくという流れになったのは、その後の時代です。「じゃあウチはこっちでやろう」という感じで、ある意味、範囲を気にしながらやっていたという感じですね。

## アニメのない時代にシリーズを支える意思

――**1990年のMSV的なプロジェクトとして、「機動戦士ガンダムF90（以下、F90）」や「MOBILE SUIT GUNDAM SIL-HOUETTE FOR MULA 91（以下、シルエットフォーミュラ）」も大きな展開だったと思えます。特に当時はTVで「ガンダム」が放送されていない時代ですし、作品が時的に途絶えていました。**

**岸山** そうですね。「逆シャア」は1988年ですし、ネタが枯渇していた時期ですよね。きっかけになったのは、当時の事業部長だった松本浩一の一言です。「今動いている劇場版の後編があるんだけど、これを広げてみよう」と、そこから「F90」という、MSその

もののデザインから始まり、アルファベット順に追加装備があって、「機体の数ではなく装備の幅を広げる」というコンセプトになって。当時、サンライズの企画室にいらした井上（幸一）さんとやり取りしていく中で、それぞれの装備を煉めていきました。

機体数も増やさず、バリエーションで差をつけるというのは、金型を作らなければならないプラモデルとしては、とても理にかなった手法だったと思います。

**岸山**　第1弾となるのがA、D、Sのセットで、いわばデラックス版のような打ち出し方も結果として新しい切り口でした。まあ二十数種類を、全部をやるかどうかは置いておいて、「ここまで行けるといいね」という意識だったと思います。ただ作っていく過程で比較的初期に陥ったのは、「これ、装備をどうやって売ればいいんだろう……？」という状況ですね。F90本体を作っていたがゆえの、限定感があだろうと、同じMSばかり作っても、意欲が湧きませんね（笑）。「じゃあベースモデルも複数あったことにしよう」ということで、2号機というアイデアが生まれました。1号機と2号機という2つを起点にして、アルファベットの残りを埋める形で装備を展開するのであれば、ちょっとは負担が軽くなるかもしれない、という考えですね。

――ちょうど『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY（以下、0083）』と同時期に展開していたこともあり、宇宙世紀の過去と未来が並行して進められていた時代でした。

**岸山**　当時、松本が言っていたのは「新しい時代を描く『ガンダム』をホビー事業部としては応援してかなきゃダメなんだ」と。言い方は悪いのですが、尻すぼみが一番具合が悪いということで、一年戦争には消極的でした。同時期の『0083』は、旧作ファンの方には非常にいい路線ではあるけれども、ホビー事業部としては新しい『ガンダム』を作るという方針は大きかったと思います。そこで『F90』で時代を再現やりこに開けて、『機動戦士ガンダムF91（以下、F91）』に力を入れて、『シルエットフォーミュラ』を本物にしよう、という意識で力をめいっぱい込めていました。

――それは実際の製品にも差として表れていましたね。

**岸山**　それゆえにユーザーさんからは「なぜF90だけ出ないんですか？」とか「なぜ、0083では、いろプラを使わないんですか？」という事は、よくホビーショーで指摘されました。それは単純に技術的リソースの問題で、先の時代の『ガンダム』に力を入れるのであれば、一年戦争などの作品はどうしてもパワーダウンしてしまうんです。ともかく明るい未来は、先の時代を描くというのが当時の意識としてあって、それはホビー事業部に限ったことではありません でした。出版もゲームも同じ意識でした。たとえばスーパーファミコンで出た『機動戦士ガンダムF91 フォーミュラー戦記0122』も同じ理由ですね。なかなか「F91」の全貌が見えてこないので、「F91やあの90を主軸において作っていこう」ということで生まれました。それこそバンプレストさんに、これこそバンプレストさんと作っていこう、という流れになっていたのも、この時代があったからです。

――しかしここまで力を入れて、アニメ外の作品を展開していた例は今でも珍しいですね。

**岸山**　『F91』の上映時期もまだ定まっておらず、だからといって何もしないわけにはいきません。これも弦巻の言葉ですが、「ガンプラが成功したのは、やり続けていたからだ」ということなんです。ですからアニメがない時期でも、「F90」をきっかけにしてこれを絶やさないようにしようと。

ただ、「F90」がMSVかというと違うと思うんです。何かからの派生というわけではありませんし、「F90」というシリーズという捉え方で、作っているうちにMSVという言葉は徐々になくなっていきました。MSVというネーミングは、ちょうど『F90』が発売されていますけど、当時、灯を絶やさないようにと開墾していたことは大きかったのではないかと。約30年という時間を経て、また意味を持ってきたなと感じます。

**川口**　これはZ、ΖΖ、MSVありからZ繋がっていく1つの流れの結果ですよね。混乱から整理されていって、統合していく流れというかいいますか……。

しまう方がよくないだろうな、という気持ちでした。

「F90」は時の販売数を見ても結構いい数字を出していましたし、「これは結構人気あるんだな」という手応えを感じたのは事実です。アニメ発信ではないけれど、新しい『ガンダム』の亜種として捉えた場合、割と受け入れられたかなと思いますね。それこそ今になってまた「F90」が発売されていますけど、当時、灯を絶やさないようにと開墾していたことは大きかったのではないかと。約30年という時間を経て、また意味を持ってきたなと感じます。

**川口**　これはZ、ΖΖ、MSVありからZ繋がっていく1つの流れの結果ですよね。混乱から整理されていって、統合していく流れというかいいますか……。

**SDクラブ　第1号**

**TVシリーズなき時代の牽引力**

87年以降、カンダムシリースはTVで展開されなくなる（93年まで）。間に劇場版の新作やOVA作品は展開されていただが、ガンダムシリーズにおける主要ターゲット層の1つである未就学児や小学生には、いささか縁遠いものとえた。そうした層へ継近感や興味を誘き立たせるため、SDガンダムをはじめとしたデフォルメキャラたちは大いに貢献している。バンダイでも「SDクラブ」を刊行し、SD好きな層に積極的な情報発信を行っている。子供向けと侮るなかれ、今も昔もSDガンダムは立派なカンダムコンテンツの1つであるし、当時のガンダム冬の時代を支えた立役者なのだから。

**MSVの精神は ガンプラの灯を 絶やさぬこと**

**ガンダムの傍らにはザクがいなくちゃね！**

インタビューでも触れられていますが、最初期のHGでは、ザクに触れなかったため、シリーズとしては発展性がなかった、という。しかし、当時はまだまだ広く放送が終了した「オワコン」作品のリバイバルが市場に受け入れられるかは未知数だった（苦しはあったが）から致し方ないことだろう。それ以後、新たなシリーズやブランドが起ち上げられ、新たなガンダムが世に出ると、シリーズラインナップには必ずザクが投入されるようになっている。時代の変化に合わせつつ、シリーズの傍らにはザクがいなくちゃね！

超精密さがウリのガンプラブランドであるRGシリーズでも、カンダムの次にはザクが控えている、というラインナップである（実際、NO.2はシャア専用ザクだが）。

**岸山**　確かに当時「シルエットフォーミュラ」を進める時に言われたんですよ「企画書を作れ」って。これまではそんなことはなかったですからね。

そこでホビー事業部側で大筋な企画を物語の流れを井上さんにうまくまとめていただいた感じです。結局、自分が「何がやりたいか」を明確にアニメサイドに伝える、という経緯は大きかったと思います。

――MSVと銘打ってはいませんが、MG（マスターグレード）も「模型発のアレンジ展開」という点を踏まえると、MSV的な存在ではないかと思えます。当時、どのような意図でMGはスタートされたのでしょうか？

**川口**　「機動戦士Vガンダム」は大変でしたが、「機動武闘伝Gガンダム（以下、Gガンダム）」は結果的に締めてみれば、いい感じで終わることができました。結局、Gガンダムでわかったのは、TVで新作を放送し、新しいお客さんが入ってこないと将来には繋がっていかないということです。ただその一方で、「じゃあ今までずっと好きだった人はどうするの？」と。当時はそれこそ、リアルガンダム。はその時代でしたからね。「Gガンダム」の好結果を受けて、「じゃあ好きなことやれば？」という話はありました。そこで『新機動戦記ガンダムW』の仕込みと並行として、MSの高年齢層向けの企画を始めたんです。

**それが後のガンプラ史を変えることになりましたね。**

**川口**　まあ基本的に僕が好きな世界なんです。MSの解像度を上げ、「本当に存在したらどうなるんだろう？」というアプローチで、模型が好きな連中が色々こねくり回していく……。だからMGはMSV直系といえば直系といえます。結局、MSVも大河原さんの絵を起点として、模型好きのエッセンスで昇華した企画でしたからね。人員的にも『ポピージャパン』の佐藤（忠博）編集長、原型は渡辺（モデラーのMAX渡辺）君、パッケージは小澤晋三さんなど、僕がバンダイにいる前に築いたパイプを全部使ってやろうという、いわばあの時代を一緒に潜り抜けた人たちとの同窓会なんです。

**岸山**　初代4本のHGのリバイバル（RX-78-2ガンダム、RX-178ガンダム、MSZ-006ZガンダムA、MSZ-010ZZガンダムA）の段階で、過去MSの掘り起こし、ということに可能性が見えました。ただ、この時に失敗だったのは、ガンダムしかやらなかったことです。そこで広がりが途絶えてしまいました。ですからMGでザクが出たことは大きな意味があったと思います。

**川口**　結局、この初代HGがあったからこそ、MGに繋がったわけですし、先ほど出口の言葉にあったとおり、「ガンダム」は絶やさずに様々な要素を取り入れることで、続いてきたという背景があります。ガンプラ続けば「ガンダム」も途絶えることはない、ということは歴史を見てもわかると思います。その中でアニメの放送がない時代にシリーズを支えたMSV的なマインドを持つものは「ガンダムの灯を絶やさない」という意味でプラモ業界を牽引してきたといえますね。

モビルスーツ全集 13

**ジオン陸戦モビルスーツBOOK**

B5判カバー付　定価1,400円+税

グレートメカニックスペシャル

**MSV THE FIRST**

A4サイズ／定価1,800円+税

**森下直親画集2　鋼鬼**

HAGANE ONI

A4サイズ／定価2,778円+税

**MS図鑑**

**ジム**

A4サイズ　定価1,800円+税

**機動戦士ガンダムユニコーン**

**RE:0096**

**メカニック・コンプリートブック**

B5判カバー付　定価1,500円+税

# グレートメカニック & 関連書籍シリーズ

## グレートメカニックG 2019 AUTUMN

A4サイズ　定価1,200円+税

大特集
**モビルスーツ40**
ガンダムシリーズにおけるモビルスーツの意義と現在

**30周年！「魔動王グランソート」**

- ガンダムヒルドタイバースReRISE
- 機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンス ウルスハント
- ガンダム GのレコンギスタⅠ行け！コア・ファイター
- ガールズ&パンツァー最終章 第2話
- 新幹線変形ロボ シンカリオン
- INTERVIEWS
  大河原邦男　河森正治　他

## グレートメカニックG 2019 SUMMER

A4サイズ　定価1,200円+税

大特集
**富野由悠季とその作品**

**『エルドランシリーズ』の軌跡**

- 機動戦士ガンダムNT
- 荒野のコトブキ飛行隊
- 新幹線変形ロボ シンカリオン
- INTERVIEWS
  河森正治　やまたかひろ
  吉沢俊一　他

## グレートメカニックG 2019 SPRING

A4サイズ　定価1,200円+税

大特集
**AT「装甲騎兵ボトムズ」**
**今、再び考えるATの"リアル"**

**「機動戦士ガンダム」**
**40周年記念特集**

- 機動戦士ガンダムNT
- コードギアス 復活のルルーシュ
- 荒野のコトブキ飛行隊
- INTERVIEWS
  福井晴敏　倉田英之　海老川兼武　他

## グレートメカニックG 2018 WINTER

A4サイズ　定価1,200円+税

時代を切り開いた
平成はじめのガンダム作品たち
**機動戦士ガンダムF91&**
**機動戦士ガンダム0083**
**STARDUST MEMORY**

今もう一度見る
**機甲戦記ドラグナー**

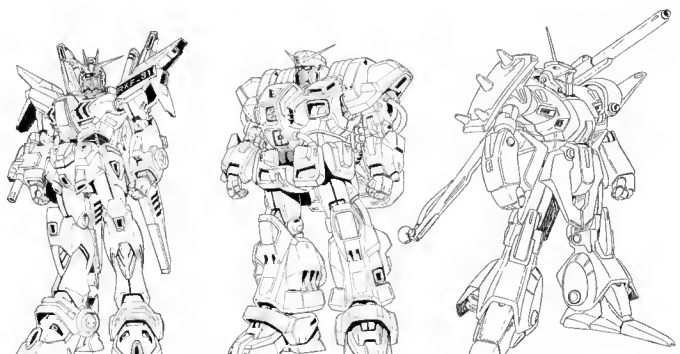
- 機動戦士ガンダムNT
- 荒野のコトブキ飛行隊
- 銀伝サムライルーパー
- INTERVIEWS
  大河原邦男　吉沢俊一　岡本英郎　他

**バックナンバーをご希望の方は、**
**お近くの書店にご注文ください。**

## 双葉社

〒162-8540　東京都新宿区東五軒町3-28
☎03-5261-4818（営業）　http://www.futabasha.co.jp/
（双葉社の書籍・コミック・ノベル買えます）

※書店・HP以外に、電話・FAX・はがきでもご購入いただけます。
ブックサービス（受付時間　9～18時）
☎0120-29-9625（携帯電話も可）
FAX0120-29-9635
いずれの場合も「社名（双葉社）、タイトル、購入冊数、
定価および住所、氏名、電話番号」をお知らせください。



# MSV
## The Second-Generation
# 1986-1993

2019年10月19日発行

| | | | |
|---|---|---|---|
| 編著 | オフィスJ・8 | 編集人 | 二之宮隆 |
| | 旭和則（双葉社） | 発行人 | 島野浩二 |
| 執筆 | 河合宏之　星★馨介　市ヶ谷ハジメ | 発行所 | 株式会社双葉社<br>〒162-8540<br>東京都新宿区東五軒町3-28<br>☎03-5261-4818（営業）<br>☎03-5261-4869（編集）<br>http://www.futabasha.co.jp/<br>（双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます） |
| | 南波健一郎　やすゆきゆたか | | |
| | 小高正稔 | | |
| デザイン | 岡本浩樹（water planet） | | |
| 監修・協力 | ㈱サンライズ | | |
| | ㈱BANDAI SPIRITS ホビー事業部 | 印刷所 | 三晃印刷株式会社 |
| | 井上幸一 | | |
| | 伸童舎 | | |
| | 一般社団法人 アニメツーリズム協会 | | |

※落丁・乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします
「製作部　あてにお送りください。ただし、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。☎03-5261-4822（製作部）
※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です
※定価はカバーに表示してあります。

制造・サンライズ
FUTABASHA \ 2019　Printed in Japan